

以上諸般ノ事情ヲ考量シ之ヲ總フルニ壹梱ニ對スル工費ハ徹夜業廢止ニ依リ必シモ増如スヘキ限ニ在ラス。若シ假ニ一時幾分ノ増加ヲ免レストスルモ其ノ額僅少ナルヘク深ク憂フルニ足ラサルカ如シ。

(九) 資本金及純益。

明治三十三年末現在紡績聯合會員五十四會社ノ資本金拂込額三千貳百九拾參萬餘圓、固定資本總額三千八百三拾七萬餘圓ニシテ、差引五百四拾三萬餘圓ハ資本金ノ不足額ナリ。而シテ積立金三百四拾貳萬六千餘圓、社債其ノ他借入金千七百五萬七千餘圓、合計貳千四拾八萬餘圓ト固定資本ノ不足額トノ差即チ千五百四萬餘圓ハ流動資本ニ用キラル、額ナリ。尙此等五十四會社ノ總錘數ハ百二十四萬錘ニシテ、一萬錘割當固定資本ハ三拾萬九千餘圓ナリ。是新舊工場ノ平均ニシテ、今日新ニ工場ヲ設クルトキハ一萬錘ニ付四拾萬圓以上ヲ要スヘシトハ一般ノ通説ナルヲ以テ、今假ニ一萬錘四拾萬圓トシ、拂込資本金全部ヲ之ニ充當スルモノトシテ論センニ、拂込資本ニ對シテ紡績業者カ收得セル純益金ハ明治二十一年以來ヲ通算スルニ、凡ソ七分ニ相當ス。三十年以前ニ於テハ約

九分ナリシモ其ノ以後ハ僅ニ五分内外ニ出テサル狀況ナリ。而シテ今若徹夜業ヲ廢止ストセハ純益率ニ如何ナル影響ヲ及ホスヤト云フニ、假ニ一梱ノ工費及一梱ノ價格ニ異同ナク(原棉代ハ無論同一ト看ル)從テ一梱ノ純益ニ異同ナシトシテ論センニ、一萬錘ノ工場ニ於テ晝夜交替業ヲ行ヒ、一箇年七千五百梱(一日廿五梱、一年營業日數三百日トス)ヲ製造スルト、晝業ノミニテ其ノ六割内外ヲ製造スルトキトハ固定資本四拾萬圓ニ對シ純益率ニ於テ少カラサル差異ヲ生スル譯ナリ。即チ一梱四圓ノ純益ト見ルモ、晝夜業ヲ行フトキハ一箇年三萬圓ノ純益ニシテ、固定資本ニ對シ七步五厘ニ當ル。然ルニ晝業ノミニテ晝夜業ノ六割即チ四千五百梱ヲ製シ、一梱ニ付等シク四圓ノ純益トスレハ一萬八千圓ト爲リ、之ヲ四拾萬圓ニ割當ツレハ、僅ニ四分五厘ニ相當スヘシ。若又紡績業カ相當ノ景氣ヲ保テル場合ニ於テ、一梱ノ純益八圓ト見ンニハ一萬錘ノ工場ニ於ケル純益金六萬圓ニシテ、之ヲ四拾萬圓ニ割當ツレハ一割五步ノ純益ト爲ル。然ルニ今徹夜業ヲ廢止シ晝業ノミニテ晝夜業ノ六割即チ四萬五千梱ヲ製出シ、仍一梱ノ純益八圓ヲ得ルトセンカ純益金總額三萬六千圓ト爲リ、之ヲ資本金四拾萬圓ニ割當ツレハ九步ノ純益ニ當ル。之

ヲ晝夜交替業ノ一割五歩ニ比較スレハ純益六歩ノ減少ナリ、是レ即チ當業者カ徹夜業ヲ廢止スルコト能ハスト云フ所以ナリ。然レトモ一步ヲ進メテ攷究セシニ、晝業ノミニ依リテ晝夜業ノ六割ヲ製造スト假定セルハ内論ニ見積リタルモノニシテ、優ニ夫以上ヲ製出シ得ルノ望アリ。加之機械償却費ハ晝夜交替業ヲ行フ場合ト晝業ノミヲ行フ場合トノ間ニハ大ナル差異アリ。即チ晝夜業ヲ廢止スルトキハ機械償却費ニ於テ大ナル利益アルヘシ。(固定資本四拾萬圓ノ内土地建物ニ要スル者ハ約拾萬圓、機械費約三拾萬圓ナルヲ以テ、今晝夜業ノ場合ニ機械費三拾萬圓ノ償却年限ヲ十五箇年トシ、晝業ノミニノ場合ニ三十箇年ト假定セハ前者ハ年々一萬三千二百餘金ノ償却ヲ要シ、後者ハ四千三百餘圓ノ償却ヲ要ス。又綿絲一捆ノ價格ハ徹夜業ノ廢止前後ニ於テ異同ナシト假定シタルヲ以テ、一捆ノ純益從テ同一ナルノ結果ヲ生スルモ、徹夜業ノ廢止ニ依リ製品ノ品質ヲ改良シ得ル見込アルカ故ニ、製絲ノ價格ヲ保チ得ル利益アリ。假ニ一捆六圓五拾錢ノ純益アリトスレハ一萬鍾一箇年ノ産額四千五百捆トシ、約三萬圓ノ收益アリテ前陳晝夜業ヲ行ヒ、一捆四圓ノ純益アル場合ト同シ。惟フニ徹

夜業ヲ廢止シテ機械ノ整調ヲ保チ、職工ノ勤績訓練ヲ得ハ假令急激ニ製品ノ改良ヲ見難シトスルモ、久シカラスシテ其ノ結果ノ顯ハルヘキヤ疑ヲ容レズ。是ヲ以テ徹夜業ノ廢止ニ因リ假令一箇年ノ産額ヲ減スルモ、當業者ハ固定資本ニ對シ從前ト同一ノ純益ヲ收メ得ルノ見込ナキニ非サルナリ。

以上ハ假ニ夜業全體ヲ廢スルモノトシテ立論セリ、若シ單ニ徹夜業ノミニ廢止ニ止マルモノトスレハ工場ノ整理ト執業時間ノ繰合ニ依リテ晝夜業ノ場合ト同一産額ヲ得ルコト必シモ期シ難キニ非サルヘシ。果シテ然リトセハ前述ノ論旨ハ直ニ之ヲ此ノ場合ニ適用シ難キモ之ニ依リテ其ノ要領ヲ得ルニ庶幾ランカ。之ヲ要スルニ徹夜業廢止ニ伴フ缺陷ハ或ハ製品ノ改良ニ伴フ販賣價格ノ騰貴、或ハ原棉ノ節略、或ハ生産率ノ増加ニ因リ、其ノ他種々ノ方法手段ニ依リ、之ヲ緩和シ得ヘキ餘地綽々タルヲ見ルヘク、要ハ唯當事者ノ手腕ト奮勵トニ待ツアルノミ。思フニ紡績業ノ前途ハ洋々トシテ春海ノ如キモノアルト同時ニ之ニ横ハレル障礙モ亦幾多排除ヲ要スヘキモノアラン、而シテ其ノ障礙ノ最モ恐ルヘキモノハ寧ロ職工ノ供給ニ關スル問題ニ非スヤ。現今工場ニ於テ最

モ苦心スル所ハ職工ノ缺乏ニシテ、山間ト云ハス、海濱ト云ハス、全國ヲ舉ケテ紡績職工募集員ノ足跡到ラサルノ地ナシトハ當業者ヨリ屢聞ク所ナリ、而カモ尙職工ノ缺乏ヲ訴フルコト斯ノ如キモノアルハ何ソヤ、本調査員カ各地ニ出張ノ序ヲ以テ職工出身地ニ就キ聞ク處ニ依レハ、紡績工場ニ子女ヲ出スヲ好ム者少シ。而シテ其ノ理由ハ勿論會テ紡績工場ニ行キタル者ノ成績不良ナルニ原因ス、而シテ其ノ所謂成績不良トハ或ハ其ノ子女ノ死亡、疾病、或ハ其ノ氣質嗜好ノ墮落、經濟上ノ不利益募集員ノ誑詐等種々アリト雖、要スルニ一度紡績工場ニ子女ヲ送り、其ノ成績ヲ鑑ミタル地方ニ於テハ又其ノ子女ヲ之ニ送ラントスル者少ナシ、此ニ於テカ募集員ハ漸次新規ノ地ニ蹈入ルト同時ニ、百方甘言ヲ逞フシ、無智ノ子女ヲ誘致スルコト、ナルナリ。其ノ結果紡績工場ノ職工ハ漸次智徳體質ニ於テ低落スルニ至リ、而カモ尙缺員ヲ補フニ違アラサル狀況トナレルニハ非サルカ、斯ノ如キ狀況ニテ推移センカ久カラスシテ斯業ハ職工供給ノ點ヨリ蹉跌スルノ憂ナキカ。假ニ職工一人ノ賃錢ハ大ニ騰貴セストスルモ、募集其ノ他ノ諸費ハ漸ク増加シ、勞働効果ハ寧ロ減スルモ増スコトナク、一相ニ對スル

職工費ハ歐米ニ比シ寧ロ増加スルコト決シテ遠キニ非サルヘシ、試ニ現今ノ職工費ヲ以テ歐米ニ比スルモ一相當リニ算スレハ甚シキ徑庭ナキカ如シ。此ノ故ニ紡績業ノ前途ヲ按スレハ今ヨリ深ク思フ此ニ致シ、社會一般ヲシテ安ンシテ其ノ子女ヲ紡績工場ニ入ラシムルノ信用ヲ博シ、徒ニ烏合ノ多衆ヲ誘致スルコトヲ止メ、規律アル職工ヲ訓練スルニ勤メ、徐ニ其ノ利益ヲ收ムルノ計ヲ爲サ、ルヘカラス。而シテ之ヲ爲スニハ徹夜業ヲ廢シテ職工ノ健康ヲ保全シ、工場ノ規律ヲ正フスルカ如キハ最モ緊急ナル要務ナラン。

叙上ノ如ク徹夜業ノ禁止ハ工場勞働ノ取締上最モ緊切ノ事項ナリト雖他方ニ於テ其ノ禁止カ工場ノ現狀ニ及ホス影響ニ付テモ之ヲ省慮セサルヘカラス。左レハ工業界ノ機運未タ熟セサルニ先チテ漫リニ之ヲ提唱センカ、工場法ハ遂ニ議會ヲ通過スルノ機アルヘカラス。然レトモ工場法ノ規定ハ獨リ徹夜業禁止ノミヲ規定スルモノニ非ス、偶之ヲ規定セントスル爲法案全體ノ制定ヲ阻止スルカ如キコトハ是レ亦忍フヘカラサルコトニ屬ス。左レハ最初ノ明治二十年案ハ婦女及十四歳未滿ノ職工ニ對シ夜間ノ使用ヲ禁止シタルニ拘ラス、爾後ノ諸案ハ嘗テ

之ヲ規定シタルコトナシ。然ルニ第二十六議會提出案ハ始メテ十箇年ノ猶豫期間ヲ設ケテ之ヲ實行スヘキ旨ヲ規定シタルヲ以テ茲ニ紡績業者ノ反對ヲ見ルニ至リタリ、反對ノ趣旨左ノ如シ。

女子徹夜業禁止反對理由大日本紡績聯合會陳情書

今回政府ヨリ帝國議會ニ提出セラレタル工場法案ニ規定セル如ク若シ今後十年ニシテ女子ノ徹夜業ヲ禁止シ其ノ結果一般徹夜業ノ全廢ヲ見ルコトアラニハ本邦紡績業者ハ之レカ爲海外ニ於ケル棉糸棉布ノ販路ヲ失ヒ内地ニ退嬰スルノ止ムナキニ至ルヘシ。假ニ數歩ヲ譲リ幸ニ棉糸棉布ノ輸出ニ何等ノ影響ヲ及ボササルモノト想定シ十年後ニ於ケル棉糸ノ内地ニ於ケル需給ノ關係ヲ觀ルニ其ノ供給額ニ大缺乏ヲ來シ延イテ紡績事業界ニ一大混亂ヲ現出スルニ至ルヘキハ殆ント疑ヲ容ル、ノ餘地ナキナリ。左ニ其ノ理由ヲ單簡ニ説明セン。

第一本邦棉糸需給ノ現状。本邦ニ於ケル現在總鍾數ハ約二百萬鍾ニシテ、内約三十萬鍾ハ中糸及細糸紡出ニ使用セラル、モノナレハ太糸紡出ニ使用セラ
ル、鍾數ハ約百七十萬鍾トス。之ニ依リ紡出セラルヘキ太糸ハ全運轉ノ場合ニ於テ約三十萬俵ヲ産スヘク。其ノ内二十萬俵ハ輸出向棉布原料トシテ用キ
ラレ、他ノ三十萬俵ハ棉糸トシテ輸出セラル、モノナレハ差引殘額八十萬俵ハ
内地供給高ト概算セラル、ナリ。

第二徹夜業廢止後ノ棉糸需給。然ルニ若シ今後十年ニシテ徹夜業ヲ全廢セ
ンカ其ノ結果トシテ太糸總出來高ハ約五割五分實驗ニ依レハ晝業出來高ハ晝
夜業總出來高ノ五割五分ヲ出テス即チ七十一萬五千俵ニ減シ其ノ總額ヲ内地
ニ供給スルトスルモ既ニ十萬俵弱ノ内地供給不足ヲ示セルニ更ニ此ノ内ヨリ
前記輸出向棉布原料用二十萬俵及輸出向棉糸三十萬俵ヲ控除スレハ内地供
給額ハ二十一萬五千俵ト爲リ結局五十八萬五千俵ノ内地供給不足ヲ來スヘシ。
尤モ今後十年間内地需要額ノ増加ヲ來スヘキト共ニ鍾數ニ於テモ亦之ニ準
シテ増加スヘキハ必然ニシテ今假リニ年々ノ内地需要增加率ヲ從來ノ經驗ニ
徵シ、毎年三萬俵宛トシ之ニ對スル鍾數增加率モ亦年々三萬俵ヲ製出シ得ヘキ
鍾數、即チ四萬鍾トスル時ハ十年後ニ於ケル内地供給不足額ハ依然トシテ五十

八萬五千俵ナリトス。

或ハ曰ク今後十年ニシテ右ノ不足額ヲ現出スルコト果シテ明瞭ナルニ於テハ其ノ不足額ヲ標準トシテ今後十年間ニ此ノ不足額ヲ補フ丈ケノ鍾數ヲ増加スヘシトサレト是レ謬論ナリ。何トナレハ、

(一) 十年後ニ於テ五十八九萬俵ノ内地供給不足額ヲ見ルコト明瞭ナルモ、今後十年間ハ決シテ何等ノ不足ヲ見ルニ非サレハ、此ノ間ニ於テ實際ノ需要額以上ノ鍾數増加ヲ爲スニ於テハ、需給ノ權衡忽ニシテ崩レ、紡績界ノ恐慌ヲ起スヘキコト必然ナレハ、苟クモ多少紡績事業ニ關スル智識アルモノハ斯カル無謀ノ舉ヲ爲サ、ルヘシ。

(二) 着實ナル事業家ハ十年後若ハ數年ノ後ニ於テ實施セラルヘキ法律ヲ唯一ノ根據トシテ事業ヲ起スモノナカルヘシ。蓋シ萬一其ノ法律ニシテ變改又ハ實施期ヲ延長セラルルコトアランカ、其ノ事業ハ根底ヨリ覆サル、ノ恐アレハナリ。

(三) 徹夜業廢止ノ結果ハ利益ノ大削減ヲ來スヘキコト必然ナレハ事業界ハ是レ

ニ對シテ投資スルヲ躊躇スヘシ。

第三徹夜業廢止ノ結果。前記ノ理由ニ依リ十年後ニ於テ萬一徹夜業ヲ廢止スルニ於テハ、其ノ結果ハ十年後ニ至リ(一)棉糸布ノ輸出ヲ停止スルカ、又ハ(二)内地供給額ノ大不足ヲ來スカ、二者ノ内何レカ其ノ一タラサルヘカラス。而シテ若シ前者ノ如クンハ是レ我國棉製事業ノ大退歩ト云フヘク、若シ後者ノ如クンハ是レ實ニ我國紡績界ニ大波瀾ヲ起スモノナリ。要スルニ今回政府提出ノ工場法案ハ我國紡績事業ノ進歩ヲ阻害スルモノナルノミナラス、寧ロ紡績事業ノ根底ヲ撼動セントスルモノト云フモ不可ナキナリ。

此等ノ議論ニ對シテハ政府ニ於テ公然其ノ反駁ヲ爲スニ至ラスシテ議案ハ撤回セラレタリ。爾後更ニ一層ノ調査ヲ進メテ、徹夜業ノ職工健康ニ及ホス影響ノ甚大ナルコト、及徹夜業ノ禁止ハ決シテ紡績業ノ基礎ヲ殆カラシムルモノニ非ス經濟上ノ根據ヲ明ニスルコトニ努メ、一方ニ於テハ假令猶豫期間ヲ設クルモ一時ニ徹夜業ヲ禁止スルヲ以テ、策ノ得タルモノニ非ストシ、漸次ニ之ヲ禁止スルノ手段方法ニ付テ考慮ヲ廻ラシタリ。

徹夜業漸禁ノ方法ニ關シ各種ノ案ヲ立テタリ、今其ノ主要ナルモノヲ左ニ録ス。

第一案

工場法施行後五箇年間ハ滿十三歳以上ノ者ノ夜業ヲ禁止シ、次ノ二箇年間ハ一周年間二箇月ヲ限リ十四歳未滿ノ者及十六歳未滿ノ女子ノ夜業ヲ禁止シテ此ノ期間夜業休業ヲ餘儀ナクシ、爾後二箇年毎ニ此ノ期間ヲ一箇月宛増加シ、且漸次職工ノ制限ヲ嚴ニシ以テ工場法施行後十五箇年ニシテ、夜業禁止ノ目的ヲ達スルモノトシ、規程ノ要領ヲ左記ノ如クセントス。

最初二箇年間	一周年中連續	二箇月間	十四歳未滿ノ者及十六歳未滿ノ女子夜業禁止
次ノ二箇年間	全	三箇月間	上
次ノ二箇年間	全	四箇月間	上
次ノ二箇年間	全	五箇月間	十五歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子夜業禁止
最後ノ二箇年間	全	六箇月間	上

第二案

工場法施行後三箇年間ハ十二歳以上ノ者ヲ、次ノ四箇年間ハ十三歳以上ノ者

ヲ夜業ニ使用シ得ルモノトシ、七箇年ヲ經過ノ後ハ一箇年一定ノ期間ハ十四歳未滿ノ者ヲ夜業ニ使用スルコトヲ禁止ス。斯ク夜業ニ使用スル職工ノ年齢ノ制限ニ依リテ最初ノ二箇年間ハ一ケ年二箇月以上ノ夜業休止ヲ餘儀ナクシ、次ノ二箇年間ハ之ヲ四箇月以上トシ、以後二箇年ヲ經ル毎ニ二箇月ヲ増加シテ、九年目ヨリ全部休止セシムルモノトス。

以上ノ兩案ニ付實施上ノ難易如何ヲ審案スルニ、夜業休止期間内ハ夜業期間ト同數ノ職工ヲ養ヒ置カサルヘカラス即チ他日夜業ヲ開始スル際ヲ慮リ過剩ノ職工ヲ雇備スルノ結果ヲ生シ、工場經濟ニ不利ヲ生スルノミナラス、年齢ノ制限ヲ漸次ニ高ムルコトニ依リテ事實上夜業ノ休止ヲ餘儀ナクセシムルカ如キハ法令ノ規定トシテ明截ヲ缺クモノト思考シタルヲ以テ、更ニ別案ヲ立ツルコトトセリ。是レ即チ四十三年ノ諮問案ニ現ハレタルモノナリ。

此ノ案ニ依レハ最初五箇年間ハ之ヲ現在ノ儘ト爲シ、爾後ノ十箇年ヲ二期ニ區別シ、最初ノ五箇年(施行後六年目ヨリ十年目迄)ハ夜間ニ於テ晝業職工ニ對シ二割ヲ減シタル職工ヲ使用スルカ、又ハ二時間以上ノ作業休止ヲ行フカ、其ノ孰レカヲ任意ニ選擇セシ

ムルコトトシ、次ノ五箇年間ハ四割ヲ減シタル職工ヲ使用スルカ、又ハ四時間以上ノ作業休止ヲ爲スカニ付テハ工業主ノ任意選擇ニ委ネタリ、尤モ此ノ方法ハ其ノ孰レヲ選フモ生産ニ及ホス影響ニ於テ大差ナシ。而シテ職工ヲ二組ニ分チ、六時交替ノ制ヲ採ル工場ニシテ、第二ノ方法ニ依ルコトヲ不便トスル場合ニ於テハ第一ノ方法ニ依リ、午後六時ヨリ午前六時迄ノ間ニ就業スル組ノ員數ヲ減スルノ方法ニ依ルヘク、十二時交替ノ制ヲ採ル工場ニシテ第一ノ方法ニ依ラサルトキハ作業休止時間ヲ午後十二時ノ前後ニ置き、職工ヲシテ半途ニ操業ヲ停止セサラシムルヲ得ヘシ。斯ノ如クニシテ漸次夜業ヲ減縮スルト共ニ之ニ相當スル生産額ノ減少ヲ補充スル爲ニ必要ナル新施設ハ序ヲ逐フテ行フコトヲ得セシメ、十五箇年ノ後初メテ全ク夜業ヲ廢止スルニ至ラシメントスルニ在リ。

是レニ對スル答申意見ハ何レモ夜業禁止ノ精神ヲ諒トシタルモノノ如シ、而シテ紡績聯合會及工業協會、其ノ他數多ノ商業會議所ハ階段ヲ設ケテ漸次禁止セントスル方法ニ依ラスシテ、猶豫期間内ニ於ケル一切ノ準備方法ハ工場主ニ一任スヘシトノ條件ヲ付シテ徹夜業ノ禁止ニ同意ヲ表スルコトトナリ。生産調査會モ亦同様ノ意見ナリシヲ以テ、政府ハ此等ノ意見ヲ容レ十五箇年後ニ於テ一時ニ全禁ヲ行フモノト決シタリ。

十五箇年後ニ於ケル夜業禁止ノ紡績業ニ及ホス影響ニ關シテハ種々討議ヲ重ネタル所ニシテ、其ノ大要左ノ如シ。

夜業禁止ノ紡績業ノ經濟ニ及ホス影響ハ(一)生産費ノ増加(二)資本ニ對スル利益ノ減少トシテ現出スヘシ。而シテ生産費ノ増加ト利益減少ノ程度ハ如何カアルヘキヤノ問題ニ付テハ、種々ノ説ヲ立テ得キモ、夜業禁止ノ實行迄ニ相當ノ時日ヲ置キ相當ノ用意ヲ以テ斯業ノ經營上ニ改良ヲ實行センカ、此ノ影響ノ程度ハ一般ニ於テ想像スルカ如ク大ナルモノニ非ス。

先年紡績業不振ニ際シ某工場ニ於テ工場ノ一半ニ對シ二箇月間夜業ヲ休止シタルコトアリ、當時此ノ實驗ニ基キ工場全部晝夜業ヲ營ム場合ト十二時間ノ夜業ヲ廢止シタル場合ニ於ケル營業成績ヲ算出セリ、今參考ノ爲其ノ要領ヲ掲載スレハ左ノ如シ。

(一) 紡績總錘數

約四萬餘錘

(二) 運轉日數
 (三) 紡出綿糸平均番手
 (四) 綿糸出來高
 (一) 晝夜業ノ場合
 (二) 晝業ノ場合
 晝夜業ト晝業ノ成績比較表

三百二十一日
 十八番手強
 三萬余捆(一〇〇)
 一萬七千六百余捆(五八)

借方 對比	借方金額		科目	貸方金額		貸方 對比
	晝夜業ノ場合	晝業ノ場合		晝業ノ場合	晝夜業ノ場合	
、五八二	二、四六五、八四〇、三二〇	一、四四三、九四四、九〇七	製糸賣上代	一、〇八二、六九九、八六〇	一、四八四、六五〇、七三六	、五五五
、五六六	四四、七五、二四〇	三、四三、五八三	屑棉賣上代	一、五五六、八六三	一、六四、七〇、七七六	、八三三
、八八四	六、二五、〇九五	五、五三、六三九	雜品賣上代	四三、六六、八三五	三、六、二〇、九九〇	、六四五
、六五〇	九、六二、一九九	六、二五、七〇〇	雜收入	三、八八、三四二	三、二、二七、一七六	、七三五
			原棉需用高			
			社員給料			
			職工給料			
			工場消耗品			
			石炭消費高			

借方 對比	借方金額		科目	貸方金額		貸方 對比
	晝夜業ノ場合	晝業ノ場合		晝業ノ場合	晝夜業ノ場合	
、五八六	二、五三六、六三三、三三四	一、四四三、九四四、九〇七	原棉諸掛	五、一三、三〇〇	九、五九〇、八八八	、五三九
			四十玉入製糸荷造費	八、一四、〇七五	一、七、六九、八四〇	、六六二
			二十玉入同上	一、三〇、四九七、〇七〇	二〇、四九、六一六	、六三七
			製糸運搬費	三、四四、一七八	三、四三、八二三	、七二
			屑糸棉荷造費	九、五、二八五	二、三三、四六八	、四六六
			器械修繕	一〇、四四、八六六	三〇、五八、五八八	、四二
			他ノ諸修繕費	八、〇三、五七九	一三、六九、一七三	、五八六
			火災保險料	九、七〇、〇六一	一一、五、六三二	、九七
			棉花保險料	一、〇七、四八三	二、三三、三六〇	、五四三
			海上保險料	一、二二、六三五	六、三三、二六八	、八八〇
			寄宿舍費	二、四三、三三三	八、九三、六三六	、一五四
			職工募集費	一、三三、六〇〇	六、五七、七九三	、七三七
			人夫賃	四、七二、六九〇	六、五七、七九三	、七三七
			諸夫稅	五、二九、八九三	一、九九、六三〇	、二、六三三
			諸雜費	六、五三、九六五	五、六三、六八〇	、一、六四四
			仕拂利息	一、五、七、八三〇	四、六、九、六六七	、七、五三三
			小計	一、四四三、九四四、九〇七	二、三三〇、六三三、三三四	、五九〇

二、五三六、六三三・三四
一、四二二、九六四・二七
益 計 金
七、八六七・七五
一、四八二、九六四・二七
一、三九、九九五・三
二、五三六、六三三・三四
、五六

本表ノ數字ニ依リテ一梱ノ生産費ヲ求ムレハ左ノ如シ
一梱ノ生産費

科 目	晝業ノミノ場合	晝夜業ノ場合	増 減
原 棉 代	六一・四二一	六一・四二一	増
社 員 給 料	〇・七六九	〇・五四八	増
職 工 給 料	八・一五〇	七・五二三	増
工 場 消 耗 品	一・四六八	一・一七一	増
石 灰 消 費 高	二・七七三	二・八九六	減
原 棉 諸 掛	〇・二九四	〇・三一九	減
四十五入製糸荷造費	一・二〇二	一・〇九四	増
製 糸 運 搬 費	〇・一三九	〇・一四	増
屑 糸 荷 造 費	〇・〇五四	〇・〇九四	増
合 計	六一・四二一	六一・四二一	減

科 目	増 減	合 計
機 械 修 繕 費	〇・五九二	〇・五九二
他ノ諸修繕費	〇・四五五	〇・四五五
火 災 保 險 料	〇・五五四	〇・五五四
棉 花 保 險 料	〇・〇六一	〇・〇六一
海 上 保 險 料	〇・〇六九	〇・〇六九
寄 宿 費	〇・一三七	〇・一三七
職 工 募 集 費	〇・〇七六	〇・〇七六
人 夫 賃 金	〇・二七一	〇・二七一
諸 雑 費	〇・三〇一	〇・三〇一
諸 利 息	〇・三七〇	〇・三七〇
仕 拂 利 息	〇・八九五	〇・八九五
合 計	八・〇五一	八・〇五一

尙最近ノ調査ニ係ル工費ノ概算ヲ掲クレハ左ノ如シ

棉絲一梱ノ生産ニ要スル工費輕減ノ計算

費 目	甲工場晝夜業十八手	乙工場晝夜業二十手	兩工場ノ平均ヲ基礎トシ之ニ推定ヲ加ヘタル二十手ノ工費	晝業十二時間ノ作業トシテ増加ノキ割合	同スヘキ割合	晝業十二時間ノ場合ノ工費
〇・五九二	〇・五九二	〇・五九二	〇・五九二	〇・五九二	〇・五九二	〇・五九二
〇・四五五	〇・四五五	〇・四五五	〇・四五五	〇・四五五	〇・四五五	〇・四五五
〇・五五四	〇・五五四	〇・五五四	〇・五五四	〇・五五四	〇・五五四	〇・五五四
〇・〇六一	〇・〇六一	〇・〇六一	〇・〇六一	〇・〇六一	〇・〇六一	〇・〇六一
〇・〇六九	〇・〇六九	〇・〇六九	〇・〇六九	〇・〇六九	〇・〇六九	〇・〇六九
〇・一三七	〇・一三七	〇・一三七	〇・一三七	〇・一三七	〇・一三七	〇・一三七
〇・〇七六	〇・〇七六	〇・〇七六	〇・〇七六	〇・〇七六	〇・〇七六	〇・〇七六
〇・二七一	〇・二七一	〇・二七一	〇・二七一	〇・二七一	〇・二七一	〇・二七一
〇・三〇一	〇・三〇一	〇・三〇一	〇・三〇一	〇・三〇一	〇・三〇一	〇・三〇一
〇・三七〇	〇・三七〇	〇・三七〇	〇・三七〇	〇・三七〇	〇・三七〇	〇・三七〇
〇・八九五	〇・八九五	〇・八九五	〇・八九五	〇・八九五	〇・八九五	〇・八九五
八・〇五一	七・九五三	七・九五三	七・九五三	七・九五三	七・九五三	七・九五三
	増	減	増	増	増	〇・四九八
						〇・四八九
						〇・一八三
						〇・二三五
						〇・〇五二
						〇・二一四
						〇・〇七四
						〇・〇〇五
						〇・二四四
						〇・四二四

社 員 給 料	職 工 賃 銀	石 炭 代	油 工 場 用 品 其 他 ノ 消 耗 品 費	機 械 修 繕 費	建 物 修 繕 費	荷 造 費	職 工 募 集 費	衛 生 費 其 他 ノ 職 工 費	諸 税 、 運 賃 、 利 息 、 倉 庫 料 、 保 險 料 等	聯 合 會 費	雜 費	計
一、〇〇九	八、五七七	二、一四九	九一八	四六六	一、九六一	一、九六一	六〇一	二、四三〇	三九七	五一二	甲一九、〇一六	一、〇〇九
八、六三六	二、二三四	九五九	三九二	二一五	一、三六九	一、三六九	一七七	三、六六三	一三六	乙一八、一八三	八、六三六	
一、一〇九	八、六〇六	二、一九二	九三八	四〇七	一、六六五	一、六六五	一八八	二、五一七	三二四	丙一八、五四五	一、一〇九	
二五%	七%	五%	五%	三〇%	一	一	一	一五%	一	一	二五%	
一、三八六	九、二〇八	二、三〇二	九八五	二八五	一、六六五	一、六六五	一三二	二、八九五	三二四	丁一九、五六七	一、三八六	

備考

丙丁ノ差壹圓貳錢貳厘ハ夜業十二時間ノ操業ヲ全廢シテ晝業十二時間ノ操業ト爲シタル場合ニ於ケル二十手一梱ノ工費ノ推定増加額ナリ

尙生産費ノ増加及資本ニ對スル利益ノ減少ニ關シテ卑見ヲ開陳スヘシ。生産費中重要ナル原棉ノ相場ハ時ニ依リ少カラサル高低アルヲ以テ暫ク措キ、單ニ工費ノ増減ニ付述ヘンニ、同一番手ノ糸ト雖、原棉ノ適否、機械ノ精粗、職工ノ良否及多少等ニ依リテ出來高ニ相違アリ、工場經理ノ巧拙ト出來高ノ多少ハ工費貴廉ノ岐ル、要因ナリ、故ニ同一番手ノ糸ト雖、其ノ生産ニ要スル工費ハ工場ニ依リテ大ニ異ナルナリ。而シテ工費ハ各社ノ秘スル所ニシテ之ヲ探知スルコト頗ル困難ナルモ、從來ノ調査ト最近ノ調査トニ依リテ、現時棉糸相場ノ標準タル左二十手ノ工費ニ付述ヘンニ、現時二十手一梱ノ工費ハ十八九圓ナルカ、將來夜業十二時間ノ操業ヲ全廢スルトキハ、工費中社員給料、利息、諸税、保險料等ハ約三割ノ増加ヲ來シ、尙職工賃金、石炭代、油其ノ他ノ消耗品等ニモ多少ノ増加ヲ來スモ、機械修繕費、職工募集費其ノ他職工ノ收容ニ關スル費用等ハ二三割乃至四五割ノ減少ヲ來スヲ以テ、結局工費ノ増加率ハ七八分ニシテ多クモ一割内外ヲ出テサルヘシ。工費ノ増加ハ生産費ヲ高ムルヲ以テ、當業者ノ利益ヲ減殺スルコト大ナルカ如キモ、左二十手ヲ百二十圓トスルトキハ之ニ對スル二圓未滿ノ増加ハ原棉ト絲

價ノ差益大ナルトキハ、左程苦痛ナラサルヘク供給ノ不足ニ因ル絲價ノ昂騰ハ一時ノ變態ナルヲ以テ之ヲ別トシ商況普通ノ場合ヲ考察スルニ、夜業ノ廢止ニ伴フ自然ノ結果タル絲價ノ改良ニ對シテハ其相應ノ代價ヲ以テ取引セラルヘク單ニ工費ノ増加ノミヲ顧慮スル要ナキカ如シ。或ハ云ハン内國需要ニ對シテハ暫ク措キ、清國市場ニ於テ印度絲又ハ支那絲ト競争スルコト能ハサルニ至ラント。之ニ對シテ多少ノ懸念ナキニ非サルモ今日清國市場ニ於ケル彼我綿絲ノ賣行狀況ヲ見ルニ單ニ價格ノ貴廉ニ由ルニ非スシテ、我綿絲ハ其ノ品質最モ精良ナルヲ以テ支那絲ニ對シテハ勿論印度絲ニ比スルモ常ニ上値ニテ販賣セラレ等シク本邦ニテモ其ノ精良ナル品種ハ常ニ一二圓以上上値ニ取引セラルル狀況ナレハ、絲質ノ改良ニ伴フ値上ハ需要者ヲ失フノ因タラサルナリ。故ニ夜業禁止ニ依リテ商勢ヲ轉倒スルカ如キコトナカルヘシ。

尙清國ニ於ケル綿絲紡績業ノ進歩ト綿絲需要ノ將來ヲ察スルニ嘗テ我手紡絲ニ代ハリタル印度絲ノ輸入増加ハ我紡績業ノ進歩ヲ促シテ遂ニ輸入絲ヲ驅逐スルニ至リ、尋テ綿布輸入ノ増加ハ織布業ノ興起ヲ促シタルヲ以テ、漸次輸入粗布ヲ驅逐スルニ至リ、更ニ細絲ノ製造ヲ進メテ其ノ需要ノ増加ニ應ジ、又織布業ニ一段ノ進歩ヲ遂ケツ、アル我邦ノ棉業ト略ホ同一ノ徑路ハ、清國ニ於テモ亦現ハルヘク、我對清棉物貿易ノ將來ハ今日ト其ノ趣ヲ異ニシ、太絲ノ輸出ハ比較的増加セサルヘキモ、細絲及棉布ノ輸出ハ増加スヘク、殊ニ棉布ノ輸出ヲ大ニ努ムヘキ運命ヲ有スルノミナラス、内國ニ於ケル手機製織ノ力織機製織ニ變遷スヘキ將來ニ對シテ我綿絲品質ノ改良ハ一層緊切ノ事タルナリ。

夜業ノ廢止ニ依リテ利益ノ減少スルハ已ムヲ得サル次第ニシテ、其ノ要因ハ(一)製額ノ減少(二)生産費ノ増加是レナリ、而シテ生産費ノ増加ハ絲ノ値上ニ依リテ之ヲ償フトスルモ、夜業十二時間ノ操業廢止ハ製額ニ四割乃至四割五分ノ減少ヲ來スヲ以テ、明治四十二年末ニ至ル五箇年ノ營業成績ヨリ計算スレハ資本ニ對スル利益及配當ノ割合ハ

最近五箇年ノ成績

拂込資本ニ對スル純益ノ割合

二割六四

同 配當率

一割七一

夜業廢止後

一割四五——一割五八

〇割九四——一割〇〇

斯ノ如ク減少スル譯ナリ。

上記ノ如ク夜業廢止後ニ於ケル推定成績ヲ從來ノ成績ニ比較スルトキハ今日夜業廢止ノ可否ヲ論斷スルハ聊カ早計ナルカ如ク感スル者アランモ現狀ノ儘ニ放任セハ如何ナル結果ヲ來スヘキヤ、左ノ諸問題ニ對セハ蓋シ思半ニ過ルモノアラン。

- (一) 現狀ノ儘ニテ職工ヲ長ク勤續セシメ得ヘキヤ、
- (二) 其ノ大部分嫁期ニ先ツ數年ノ工場勤務ヲ目的トスル職工ニ對シテ技能ノ上達ヲ望ミ得ヘキヤ、
- (三) 未熟ノ職工ト夜間操業ニ基ク欠點ヲ艾除シテ今後益々製品ノ改良ヲ遂ケ得ヘキヤ、
- (四) 職工ノ募集上ノ困難ト之カ收容ニ尠カラサル費用ヲ投シツ、アル缺陷ヲ此ノ儘ニ放任セハ如何ナル結果ヲ來スヘキヤ、
- (五) 製品ノ改良ヲ遂クルコト能ハストセハ如何ニシテ内外市場ニ於テ先進國ノ商品ト競争シ得ヘキヤ、

(六) 機械其ノ他ノ設備ニハ今後益々多額ノ費用ヲ要スルニ至ルヘク夜業ヲ繼續シテ機械相當ノ命數ヲ保タシメ且其ノ固有ノ能率ヲ發揮シ得ヘキヤ、

(七) 以上ノ諸問題ヲ考察シ今日ノ儘ニテ將來長ク今日迄ノ如キ比較的良好ノ成績ヲ持續シ得ヘキ見込アリヤ、

斯ノ如キ理由ニ依リテ早晚夜業ヲ廢止スル必要起ルヘク、當業者任意ノ休止ハ事情切迫ノ曉ニ非サレハ之ヲ望ムコト能ハス。是レ國民衛生上ノ問題ノ外斯業ノ將來ニ於ケル經濟問題ヲ考慮シテ、敢テ之ヲ禁止スルノ必要ヲ認メタル所以ナリ。

右ニ對シ議會ニ於テハ多少ノ議論アリシト雖當時當業者間ニ何等反對ノ氣勢ヲ示スモノアラサリシヲ以テ、永年ノ懸案タリシ本問題ハ提案ノ通可決セラレタリ。

尙參考ノ爲紡績業ニ關スル統計二、三ヲ摘録スヘシ

其ノ一 綿絲紡績業統計表

(一) 資本額及錘數表

期	別	會社數	資本總額		諸積立金		總機臺數
			資本總額	持込額	諸積立金	總機臺數	
明治四十一年	六月末	五九	八、四一、五〇〇	八、四一、五〇〇	二、九三、八〇〇	一、六一、七四三	九、二九五
	十二月末	五九	八、五三、三〇〇	八、五三、三〇〇	三、一八、六二四	一、六九、八七五	九、六九六
全 四十二年	六月末	五三	一〇、八六、三〇〇	一〇、八六、三〇〇	三、一八、七三三	一、八四三、五九八	一一、〇一九
	十二月末	五三	一〇、九八、七〇〇	一〇、九八、七〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
全 四十三年	六月末	五七	一〇、九八、七〇〇	一〇、九八、七〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
	十二月末	五七	一一、〇〇、〇〇〇	一一、〇〇、〇〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
全 四十四年	六月末	五七	一一、〇〇、〇〇〇	一一、〇〇、〇〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
	十二月末	五七	一一、〇〇、〇〇〇	一一、〇〇、〇〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
全 四十五年	六月末	五七	一一、〇〇、〇〇〇	一一、〇〇、〇〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
	十二月末	五七	一一、〇〇、〇〇〇	一一、〇〇、〇〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇
大正元年	十二月末	四二	一六、一〇、五〇〇	一六、一〇、五〇〇	三、三、八四七	一、九五四、八八三	一一、一五〇

(二) 紡績會社純益金表

期	別	會社數	純益金ノ拂込額		當期配當金		配當金ノ拂込額
			純益金ノ拂込額	本對スル割合	當期配當金	本對スル割合	
全 四十四年	上半期	二八	五七、九三三、五八〇	三、三三三、〇四四	〇、五五	五、三三三、五八〇	一、一五
	下半年	二七	五七、九三三、五八〇	三、三三三、〇四四	〇、五五	五、三三三、五八〇	一、一五
全 四十二年	上半期	二七	六二、七九九、〇〇〇	四、六五二、六七四	〇、七四	五、五〇〇、六九三	一、一三
	下半年	二六	六四、〇三四、五四〇	三、九六、七三三	〇、五九	五、四六五、〇一八	一、〇九
全 四十三年	上半期	二六	六五、二〇九、〇三三	一、二四九、二五〇	〇、一九	二、六九四、一九三	〇、八三
	下半年	二六	六五、二〇九、〇三三	一、二四九、二五〇	〇、一九	二、六九四、一九三	〇、八三
全 四十四年	上半期	二五	六二、五四一、九四三	三、八八六、七四四	〇、六三	三、一六六、九三三	一、〇三
	下半年	二五	六三、四〇八、八六八	三、八八六、七四四	〇、六三	三、一六六、九三三	一、〇三
全 四十五年	上半期	二五	六二、八九九、九九三	三、六九九、七三〇	〇、五九	三、八〇〇、八九二	一、〇三
	下半年	二四	六八、四九九、三四五	八、九九九、七三〇	一、三〇	四、七六四、四五二	一、三九
大正元年	下半年	二四	六八、四九九、三四五	八、九九九、七三〇	一、三〇	四、七六四、四五二	一、三九

(三) 綿絲ノ製造額輸出入額及内地需要高

年次	内地製造高		以上合計		内地需要高	
	内地製造高	綿絲輸入高	以上合計	綿絲輸出高	内地需要高	
明治四十一年	八七八、五七〇	四、五五二	八八三、一二二	一六七、八四二	七一五、二八〇	
全 四十二年	一、〇二五、二四四	三、二〇四	一、〇二八、四四八	二五八、八七八	七六九、五七〇	
全 四十三年	一、一三四、七八〇	一、〇一六	一、一三五、七九六	三四七、六三三	七八八、一六三	
全 四十四年	一、一二九、一六五	一、八四三	一、一三一、〇〇八	二八五、〇〇九	八四五、九九九	
全 四十五年	一、三五二、九九二	一、八九五	一、三五四、八九二	三七四、九三二	九七九、九六〇	

備考 一相ハ四十八貫入トス
其ノ二 絹絲紡績業統計表

年次	絹		絲		合	
	鍾數	製造額	鍾數	製造額	鍾數	製造額
明治四十二年	七一五七一	二三六、四六八	二四、二四五	一四八、七四七	九五、八一六	三八五、二一五
同 四十三年	六三、一七〇	二五三、四六六	二三、三七五	一六三、九一三	八六、五四九	四一七、三七九
同 四十四年	六四、四二六	二四四、四四一	二二、三九八	一五五、六〇三	八六、八二四	四〇〇、〇四四

備考 絹絲紡績ヲ營ム所ハ三會社八工場ナリ
其ノ三 麻絲紡績業統計表

年次	鍾數		製造額	
	鍾數	製造額	鍾數	製造額
明治四十二年	二五、一一一	七五七、八九八	一九、〇六二	一、二四九、一四九
同 四十三年	一九、〇六二	一、四〇一、八六四	二二、六一四	

備考 麻絲紡績ヲ營ム所ハ帝國製麻株式會社ノ五工場小泉合名會社都賀濱工場ヲ其ノ重ナルモノトシ資本金約五百萬圓ナリ
其ノ四

製品ノ重ナル種類	同 上製造ノ工場數	鍾數		織物ノ製造高
		鍾數	製造額	
各種絨、セルヂス毛布、肩掛膝掛類	四	四六、五四〇	約 九、三〇〇、〇〇〇	
フ ラ ン ネ ル	一	三、五七〇	約 五〇〇、〇〇〇	
モ ス リ ン	一	一四四、〇二〇	約 一一、〇〇〇、〇〇〇	
合 計	一〇	一四四、〇二〇	約 一、六八五、〇〇〇	

備考 (一) 本表中ニハ官立工場ヲ含マス拂込資本金ノ總額約一千五百萬圓ナリ
(二) 毛絲紡績ノミヲ専門トスルモノナク孰レモ皆紡績兼營ナルヲ以テ毛絲ノミノ製額明カナラス製織品ノ價格概算ヲ掲ケタリ

第五節 設備ノ取締

職工保護ノ二大眼目ハ職工ノ使用ト工場設備ノ取締ニ在リ。工場設備ニ付立案ノ経過ヲ見ルニ二十年案ニハ之ニ對シ何等ノ規定ヲ設ケス三十二年案ニ至リテ明文ヲ以テ認可制度ヲ立テ三十五年案ニ於テハ同シク認可制ヲ繼承シ四十二年案ニ於テハ認可制度ハ既ニ各府縣ニ於テ確立セル制度ナルヲ以テ之ヲ法文中ニ規定スル必要ナシトシテ唯工場及附屬建設物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アル場合ニ於テ行政官廳ニ於テ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ命シ必要ト認ムルトキハ全部又ハ一部ノ使用停止ヲ命スルヲ得ル旨ノ授權規定ヲ設ケタリ而シテ四十二年案之ヲ繼承シ延テ現行法第十三條ノ規定ト爲レリ。本條ハ命令ヲ以テ如何ナルコトヲ危害ト見ル可キヤ又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スルモノト見ルヘキヤヲ定ムルコトヲ得セシメタルモノナリ而シテ此ノ命令ハ同時ニ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲモ之ヲ具體的ニ定ムルコトヲ得可ク又使用停止ニ關シテモ若シ必要アラハ其ノ場合ヲ規定スルコトヲ妨ケス然レトモ斯ノ如キ事項ヲ一々具體的ニ命令ヲ以テ規定スルハ時トシテ膠柱ノ憾ヲ免レサルヘキヲ以テ命令ハ多クノ場合ニ於テ單ニ概括的規定ヲ設クルニ

過キサルヘシト考フ

茲ニ所謂命令ハ農商務省及各地方長官共ニ之ヲ發スルコトヲ得ヘシ而シテ各地方廳ハ從來其ノ必要ニ應シテ既ニ規定ヲ設ケタリ此ノ從來ノ規定ハ令第四十條ノ規定ニ依リ將來ハ工場法ノ適用ヲ受クル工場ニ對シテ其ノ効力ヲ持續スルモノナリ。惟フニ農商務省ハ工場法ノ施行ト同時ニ從來區々タル府縣令ノ規定ヲ整理シ工場ノ建設ニ關スル事項ヲ詳密ニ規定シ全國ニ互リ整一ノ取締ヲ爲スハ希フ所ニシテ出來得ヘクンハ進ンテ之ヲ實行センコトヲ欲セシナルヘシ。然レトモ工業ノ種類勞役ノ性質職工ノ多寡工場ノ規模工場經濟ノ狀況等千態萬狀ニシテ此等ヲ一律ノ下ニ置カントスルハ事實ニ於テ爲シ得ヘキ所ニ非ス況ンヤ事多クハ工業主ノ負擔ニ歸スルヲ以テ法令一律ノ強行ハ經濟ニ餘裕ナキ工業主ヲシテ事業ヲ廢止スルノ止ムヲ得サルニ至ラシメンコトヲ慮リ勅令以下ノ行政命令ヲ以テ差當リ機宜ニ應シタル必要限度ノ取締ヲ從來通り爲サシムルノ主義ヲ採リ工場設備ノ改善ニ關シテハ漸進主義ヲ執リタルモノナルヘキモ今後研究ヲ進ムルニ從ヒ中央官廳タル本省ニ於テモ之ニ關シ何等カノ施設ヲ爲スヘキコ

トアルヘシト考フ尙是レニ關シテハ後ニ至リテ更ニ詳述ス可シ。
 前述ノ如ク各府縣ニ於テハ法律施行前各地ノ實情ト須要トニ應シ警察令ヲ以テ之カ取締ニ關スル規定ヲ設ケ汽機汽罐取締規則製造場若ハ火工場取締規則等ヲ發布シ警察官吏ヲシテ之カ施行ノ任ニ當ラシメツアリ。尤モ現在各府縣ニ於ケル取締ノ實況ハ同一種類ノ工場ニ對スルモノト雖地方ニ依リ多少寬嚴ノ程度ヲ異ニシ或ハ工場及附屬建設物ノ危險防止若ハ衛生上ノ取締ニ缺クル所アルヲ免レス依テ將來ニ於テハ各地方ニ於ケル立法及行政ノ劃一ヲ期スルト共ニ主トシテ専門ノ吏員ヲシテ取締ノ衝ニ當ラシムルコトト爲ルヘシ法律制定ノ際ニハ議會ニ於テハ本條ノ執行ニ關シ從來ノ通り警察官吏ヲシテ之ニ當ラシムルヤ否ヤニ付數々質問アリタル外内容ニ關シテハ別ニ何等ノ異議ナカリキ。
 然ラハ本條ニ依リ工場設備ニ關シ取締ヲ爲スヘキモノ如何ト云フニ概ネ左ノ如キモノナルヘシ而シテ最初ヨリ此等ノ事項ノ全部ニ付取締ヲ行フトキハ速ニ工業主ニ大ナル負擔ヲ嫁スルコトアルヘキヲ以テ其ノ實施ニ當リテハ緩急ニ付細密ノ調査ト慎重ノ用意ヲ要ス取締事項ノ大要左ノ如シ。

(甲) 工場及附屬建設物ニ付取締ヲ爲スヘキ事項

一 工場ノ構造

- (一) 工場建物ノ地形竝其ノ構造ノ不完全ナルモノ例ヘハ大ナル建物ニシテ内部ニ柱ノ少ナキモノ又ハ屋根ノ荷重ニ對シ下部ノ釣合其ノ當ヲ得サルモノ等之ナリ
 - (二) 工場狹隘ニシテ場内ノ職工ニ對シ空氣ノ容量過少ナルモノ
 - (三) 窓換氣孔等不完全ニシテ換氣不十分ナルモノ
 - (四) 窓ノ構造個數配置等不完全ニシテ光線ノ透射不十分ナルモノ
 - (五) 出入口非常口通路階段戸等ノ配置個數構造等ニ避難ノ注意ヲ缺クモノ
- 以上ノ中(一)及(五)ハ危害ヲ生スルノ虞アリ(二)及(四)ハ衛生上有害ナルヲ以テ取締ルヘキモノナリ

二 寄宿舎ノ構造

- (一) 寄宿人員ニ對シ建物ノ狭小ナルモノ及前各號ニ掲タル缺點アルモノ
- (二) 食堂炊事場便所浴場病室等ノ構造ニ於テ衛生及風紀上不完全ナルモノ

前記ノ(一)ハ危害及衛生上ヨリ、(二)ハ風俗及衛生上ヨリ之ヲ取締ルヘキモノナリ。
三 煙突ノ構造

- (一) 煉瓦煙突ノ地形不完全ナル爲傾斜ヲ來シ、煉瓦積ノ厚サ不完全ナル爲若ハ粘接料ノ不適當ナル爲龜裂ヲ生シ震災ノ際容易ニ倒壊スルモノ
 - (二) 鐵製煙突ニシテ鐵板薄ク腐蝕ニ因リテ脆弱トナリ久シカラスシテ倒壊スル虞アルモノ
 - (三) 煙突ノ位置不適當ナルノミナラス其ノ構造不完全ニシテ甚シキ煤煙ヲ噴出シ近隣ニ害ヲ及ホスモノ
 - (一) 及(二)ハ危害ヲ生スルノ點ヨリ之ヲ取締リ、(三)ハ公益上ノ見地ヨリ之ヲ取締ルヘキモノナリ。
- (乙) 工場設備
- 一 汽罐
- (一) 設計、製作、据附等ノ不完全ナルモノ
 - (二) 汽壓計、安全弁、水準計、驗水器等ノ如キ附屬品ノ規整ヲ缺クモノ

生絲精米等ノ小工場ニ使用スルモノニ於テ特ニ如上ノ缺點多ク、危害豫防上ノ見地ヨリ取締ヲ要ス。

二 原動機其ノ他ノ機械

- (一) 勢輪、曲柄、齒車、車軸、調帶、ロール其ノ他ノ機械ノ部分ニシテ、其ノ位置構造等ニ依リ運轉中危険ノ虞多キニ拘ラス危害豫防ノ裝置ナキモノ
 - (二) 工場内ニ機械密集シ通路甚狹ク非常ノ場合ノミナラス平時ニ於テモ危険ナルモノ
 - (三) 機械ノ位置不適當ナルカ若ハ据付方法ノ不完全ナル爲又ハ除害ノ設備ヲ缺ク爲、震動騒響ヲ發シテ公益ヲ害スルモノ(精米、製鐵、印刷、木皮粉碎等ノ工場)
- 三 危険又ハ衛生上有害ナル工場(チアン、水素酸、水銀、機、鉛又ハ此等ノ化合物)ニ於ケル特殊ノ設備
- (一) 有害瓦斯、有害液、塵埃粉末等ヲ流出飛散スル場所ニ於テ此等有害物ヲ適當ニ處理スル施設ノ完カラサルモノ

(二)有害料品ヲ取扱ヒ又ハ有害物ヲ飛散スル場所ニ於ケル職工ニ對シ、危險豫防(作業服、呼吸器、手袋、食堂、洗面所又ハ浴場)ノ設備完カラサルモノ

四 防火及消火ノ設備

(一)工場ノ構造カ火災豫防ニ對シテ不完全ナルモノ
(二)消火器又ハ消火装置ノ不完全ナルモノ

五 工場及附屬建物若ハ設備ニシテ、使用久シキニ亘リ又ハ變災事故ノ爲危害ヲ發生スル状態ニ在ルモノ

工場及附屬建設物竝設備ノ改善ニ付主トシテ着目スヘキ點概ネ前述ノ如シ然レトモ工場災害ノ豫防、粉塵ノ除去其ノ他ノ衛生施設、工場ノ換氣及照明方法等ニ付テハ夫々専門的ニ詳細ナル研究ヲ要スルモノ甚タ多シ。諸外國ニ於テハ監督官吏竝工業主ハ何レモ熱心ニ此ノ種ノ研究ヲ爲シ、進歩ノ蹟顯著ナルモノアリト雖(第五章參照)我國ニ於テハ此ノ點ニ關スル研究ハ官民共尙未タ幼稚ニシテ、不知不識職工ノ身體健康ヲ傷害シ、勞働效程ヲ損傷シテ顧サルカ如キ感アルヲ遺憾トス、故ヲ以テ法第十三條ニ基ク命令ハ今後ニ於テハ漸次ニ之レヲ具體的ナラシメ

而カモ克ク我國工業ノ状態ニ適合セルモノトシ、且出來得ル限り各府縣令ヲ統一スルコトヲ期スルノ要アルヘキモノトス。(工場取締ニ關スル府縣令ニ付テハ第二章參照)

工場設備ニ關スル府縣令ト法第十三條トノ關係 工場設備ニ關シ工場法施行前ニ於テ發シタル府縣令ハ工場法施行前ニ於テ關係工場ニ適用セラレタル次第ナルカ、工場法施行後ニ於ケル工場法トノ關係如何ニ付テハ次ノ如ク解スヘキモノト信ス。

工場法ノ適用ヲ受ケサル工場ニ付テハ從來ノ通り引キ續キ適用アルハ勿論ナリ、而シテ工場法ノ適用ヲ受クル工場ニ付テハ從來ノ府縣令ハ工場法施行ノ時ヨリ工場法第十三條ノ規定ニ配合シ同條ニ依リ工場法ノ適用ヲ受クル工場ニ適用セラルルモノトス。(令第四十條)或ハ命令ノ字義ニ付少クトモ省令以上ノ命令タルコトヲ要ストナシ、或ハ命令ノ定ムル所トハ工場法施行後ノ命令ノ定ムル所ニ依ルヘシトノ說ナキニ非スト雖何レモ根據アル說ニ非サルナリ。

從來ノ府縣令中工場設置ニ付許可又ハ認可ヲ受クヘキコトヲ規定シタルモノ多シ、而シテ法第十三條ニ於テハ明文ヲ以テ工場設置ニ對スル許可又ハ認可ニ

關スル規定ナキヲ理由トシテ廳府縣令中工場設置ノ許可又認可ノ規定ヲ置クノ適法ナリヤ否ヤヲ疑フ者ナキヲ保セスト雖廳府縣令ニ於テ斯ノ如キ規定ヲ存シ又今後之ヲ新設スルハ違法ニ非サルハ勿論ナリ。何トナレハ法第十三條ノ明文上ヨリ云フモ行政官廳ハ既設工場ニ付必要ナル事項ヲ命令シ其ノ使用ヲ停止スルノ權限ヲ有ス、故ニ工業主カ假令許可ヲ得シテ工場ヲ設立ストスルモ一定ノ事由ノ存スル場合ニ於テハ忽チ其ノ改善ヲ命セラレ又ハ使用ヲ制限セラルルヲ以テ工場建設ノ初ニ於テ豫メ斯ノ如キ處分ニ逢著セサル様許可ヲ得セシムルノ制度ヲ立ツルハ本條ノ存在ヨリ生スル當然ノ結果ニシテ許可制度ヲ立テテ豫メ節制スル所ヲ知ラシムルハ寧ロ工場建設者ニ親切ナルモノト云ハサルヘカラス況ンヤ工場法立法ノ沿革ニ於テハ其ノ立法當時既ニ行政警察規則等ニ根據シテ廳府縣令ヲ以テ設置許可ノ規定ヲ設クルモノ甚タ多カリシカ故ニ改メテ工場法ニ許可制度ヲ規定スルノ必要無シト爲シタルニ於テヲヤ。

外國ノ立法例 工場ノ設備取締ハ工場法中重要事項ノ一ナルヲ以テ英國及獨逸ノ立法例ヲ掲ケ參考ニ供スヘシ。獨逸ハ我工場法第十三條ニ比スレハ較々詳

細ノ規定ヲ設クト雖、要スルニ法律上ニハ只大綱ヲ規定スルニ過キスシテ詳細ナル規定ハ凡テ之ヲ命令ニ讓ルコトニ於テ略我國ノ立法ト一致セリ、英國工場法ハ更ニ詳細ナル規定ヲ存スルモ尙其ノ細則ハ之ヲ命令ニ一任セリ。

獨逸 營業條例第二百十條甲乃至第二百十條戊ノ規定ヲ以テ大凡左ノ如ク定メタリ。

(一) 危害豫防ノ施設 工業主ハ事業ノ性質ノ許ス限リ作業室、工場ノ設備機械及器具ノ配置竝維持ニ注意シ且職工ノ生命健康ニ危害ヲ來ササル様作業ヲ經營スルコトヲ要ス

特ニ日光ノ供給竝氣積及換氣ヲ充分ニシ且就業ノ際生スル塵埃、蒸氣及瓦斯ノ除去及此等ノモノヨリ生スル其ノ他ノ危害ヲ防止スルコトヲ竭ムヘシ
機械ノ全部又ハ一部ニ接觸スルニ因リテ生スル危害及工場又ハ事業ノ性質ニ因リテ生スル危害竝火災ヨリ生スル危害ニ對シ職工ヲ保護スル爲ニ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

工業主ハ就業上ノ規律及職工ノ行爲ニ關シ危害豫防ニ必要ナル規則ヲ設ク

ルコトヲ要ス

(二) 衛生風紀ノ維持 工業主ハ職工ノ行爲ニ關シ其ノ風紀ヲ維持スル爲必要ナル規則ヲ設ケ之ニ依リテ必要ナル處置ヲ爲スコトヲ要ス
 業務ノ性質上差支ナキ限リ男女ヲ別チテ就業セシムルコトヲ要ス但シ就業ノ組織風紀ヲ維持スルニ充分ナルトキハ此ノ限ニ在ラス
 業務ノ性質上衣服ヲ更へ又ハ終業後身體ヲ洗滌スルコトヲ要スル場合ニ於テハ男女ニ區別シタル更衣室及洗場ヲ設クルコトヲ要ス
 便所ハ職工ノ數ニ應シ衛生ニ適シ且風紀ヲ害スルコトナクシテ使用シ得ル様構造スルコトヲ要ス

(三) 少年工ヲ使用スル場合ニ於ケル特別規定 十八歳未満ノ職工ヲ使用スル工業主ハ工場ノ構造及就業ノ規律ニ付テハ特ニ其ノ年齢ニ必要ナル健康及道德ノ安固ヲ保ツニ注意スルコトヲ要ス

(四) 行政官廳ノ處分 所轄警察官署ハ各工場ニ對シ前三條ノ規定ヲ實行スルニ必要ナル設備ニ關シ工場ノ性質ニ應シ實行セラルヘキ方法ヲ設クヘキコト

ヲ命スルコトヲ得警察官署ハ工業主ニ對シ其ノ費用ヲ以テ工場ノ外ニ休憩時間中無償ニテ職工ノ集マルヘキ室ヲ備へ且冬季ニ於テハ之ヲ暖ムルノ設備ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ得

前項ノ命令ニハ生命健康ニ對シテ猶豫スヘカラサル危害アル場合ヲ除クノ外之ヲ實行スルニ相當ノ時間ヲ附與スヘシ

本法發布ノ際既設ノ工場ニ付テハ増築又ハ改築ノ場合ヲ除クノ外ハ職工ノ生命健康及風紀ニ對スル危害ヲ除クニ急要ナル事項又ハ過大ナル費用ナクシテ實行セラルヘキ事項ノミ實行セシム

(五) 工場ノ設備並衛生風紀取締ニ關スル命令 聯邦參議院ハ特種ノ工場ニ對シ前記危害豫防並衛生風紀ノ取締ニ關スル規定ヲ實施スル爲必要ナル規則ヲ發スルコトヲ得

聯邦參議院カ前項ノ規則ヲ發セサル場合ニ於テハ各州中央官廳若ハ特ニ權限ヲ與ヘタル警察官署ハ此ノ規則ヲ發スルコトヲ得右命令及警察命令發布前豫メ之ニ關係アル同業組合會長又ハ同業組合支部長ヲシテ意見ヲ陳述セ

シムルコトヲ要ス。

聯邦參議院ハ此ノ決議ニ依リ日々ノ勞働時間ノ過長ナルニ因リ職工ノ健康ヲ害スヘキ職業ニ關シテ勞働時間ノ制限、始業時間及休息時間ニ關スル規程並其ノ規程ヲ施行スルニ必要ナル細則ヲ發スルコトヲ得

即チ工場ノ設備ニ關スル詳細ナル規定ハ舉テ之ヲ聯邦參議院ノ命令ニ一任シタリ、而シテ聯邦參議院カ此ノ規定ニ基キ發シタル細則ニ依リ取締ヲ受タル事業ノ主ナルモノ左ノ如シ。

- (1) 黃磷燐寸ノ製造禁止(一九〇三年五月法律)
- (2) 含鉛染料其ノ他ノ含鉛製品(一九〇三年)
- (3) 葉卷煙草製造工場(一九〇七)
- (4) アルカリクロロメイトノ製造工場(一九〇七)
- (5) 印刷及活字鑄造工場(一八九七、一九〇七、一九〇八)
- (6) 鉛又ハ鉛化合物ヲ用フル蓄電池ノ製造工場(一九〇八)
- (7) 獸毛紡績、毛髮ノ整毛、刺毛ノ製造工場(一九〇二)

- (8) トーマス礦滓ノ粉碎又ハ貯藏ヲ爲ス工場(一九〇九、一九一一)
 - (9) 亞鉛精鍊工場(一九〇〇、一九〇一)
 - (11) 護謨ノ硬化ヲ爲ス工場(一九〇二)
 - (12) 硝子ノ熔融、研磨、腐蝕、及砂吹工場ニ於ケル保護職工ノ使用(一九〇二)
 - (13) 石切場及石匠ノ作業場(一九〇九、一九一一)
 - (14) 鉛ノ熔融工場(一九〇五)
 - (15) 塗料、顏料、漆食、白色顏料、漆塗作業ヲ爲ス工場(一九〇五)
 - (16) 大ナル製鐵工場(一九〇九)
 - (17) 纖維、獸毛、屑又ハ襪襪ノ加工工場ニ於ケル少年工ノ使用(一九〇八)
 - (18) 製糖工場ニ於ケル女工及少年工ノ使用(一九〇二)
 - (19) 麵包及菓子製造工場(一八九六)
 - (20) 精穀工場(一八九九、一九〇〇)
- 營業條例第十六條ニ依リ工場設置認可ヲ要スル工場ニ付普魯西ニ於テ大體ノ認可標準ヲ示シタルモノ左ノ如シ。

- (1) 瓦斯製造及其ノ貯溜場
- (2) 石油蒸餾場
- (3) 褐炭及石炭ヲ原料トスル「タール」製造場
- (4) 骸炭製造場
- (5) 硝子及油煙製造場
- (6) 石灰及「セメント」製造場
- (7) 煉瓦製造場
- (8) 石膏製造場
- (9) 金屬鑄造場(坩堝ヲ使用スルモノヲ除ク)
- (10) 鍛冶工場(手ヲ打ノモノヲ除ク)
- (11) 漂白場(化學的藥品ヲ使用スルモノニ限ル)
- (12) 「ワニス」類製造場
- (13) 澱粉製造場(馬鈴薯澱粉製造場ヲ除ク)
- (14) 澱粉糖蜜製造場
- (15) 蠟引布製造場
- (16) 腸糸製造及腸ヲ取扱フ製造場
- (17) 屋根紙及屋根布製造場
- (18) 膠製造場
- (19) 魚油製造場
- (20) 石鹼製造場
- (21) 骨炭製造場
- (22) 乾骨煮骨晒骨場
- (23) 獸毛精製場
- (24) 獸脂溶解場
- (25) 屠獸場
- (26) 製皮場
- (27) 剥皮場
- (28) 「ホップ」乾燥場
- (29) 「アスファルト」「ビッチ」製造場
- (30) 藁紙製造場
- (31) 汽罐製造場又ハ他ノ鐵板鋸綴場
- (32) 木材ニ熱シタル「タール」ヲ塗布スル工場
- (33) 人工綿製造場
- (34) 柔油製造場
- (35) 鐵管鐵船鐵橋其ノ他鐵材ヲ使用スル工場
- (36) 「タール」及「タール」水蒸餾工場
- (37) 生皮ノ乾燥及鹽漬工場

- (28) 「ホップ」乾燥場
- (29) 「アスファルト」「ビッチ」製造場
- (30) 藁紙製造場
- (31) 汽罐製造場又ハ他ノ鐵板鋸綴場
- (32) 木材ニ熱シタル「タール」ヲ塗布スル工場
- (33) 人工綿製造場

- (34) 柔油製造場
- (35) 鐵管鐵船鐵橋其ノ他鐵材ヲ使用スル工場
- (36) 「タール」及「タール」水蒸餾工場
- (37) 生皮ノ乾燥及鹽漬工場

英國 工場法ハ衛生及危害豫防ニ付テハ工場及手工工場法第一條乃至第十八條ニ詳細ナル規定ヲ設ケタルノ外第七十九條ニ於テハ職工ノ生命身體並健康ニ危険ノ虞アル業務ニ付テハ主務大臣ハ命令ヲ以テ之ヲ豫防スルニ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得ルコトヲ規定セリ其ノ大要左ノ如シ。

一 衛生

(一) 工場ノ衛生

(1) 左ノ規定ハ之ヲ工場ニ適用ス但シ家内工場ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

- (イ) 工場ヲ清潔ナラシムルコト
- (ロ) 溝渠、厕所其ノ他ノ汚穢物ヨリ生スル臭氣ヲ防クコト
- (ハ) 作業中工場内ニ就業スル者ニ危険ヲ及ホシ又ハ健康ヲ害スル程ニ過多ノ人ヲ收容セサルコト
- (ニ) 工場ニ於テ作業工程中又ハ手工中ニ發散スル衛生上有害ナル瓦斯、蒸氣、塵埃又ハ他ノ不潔物ヲシテ實行シ得ヘキ限リ衛生上無害ナラシムル方法ヲ以テ空氣ノ流通ヲ謀ルコト
- (2) 工場、手工場及仕事場ノ清潔換氣及收容人員ニ關スル一八七五年公衆衛生法第九十一條ノ規定ハ本條ノ適用ヲ受タル工場ニハ之ヲ適用セス
- (3) 工場ノ清潔ニ關スル本條ノ規定ヲ遵守スルカ爲工場各室ノ内壁、天井又ハ上階及通路階段ニシテ七年内ニ一回以上油若ハワニスヲ以テ塗ラサルモノハ最後ニ洗滌セシ日ヨリ起算シテ十四ヶ月間毎ニ一回以上石灰洗滌ヲ爲スヘシ、油又ハワニスヲ以テ塗リタルモノハ最後ニ洗滌シタル日ヨリ起算シテ十箇月間毎ニ一回以上湯及石鹼ヲ以テ洗滌スヘシ

(4) 特種ノ工場又ハ其ノ一部ニ石灰洗滌又ハ洗滌ニ關スル本條ノ規定ヲ適用スルノ必要ナシト認メタルトキ、又ハ特別ノ事由ニ因リテ適用スルコト能ハスト認メタルトキハ、内務大臣ハ特ニ其ノ種ノ工場若ハ其ノ一部ニ對シ命令ヲ以テ本條ノ適用ヲ除外スルコトヲ得(一九〇三年内務省令ハ、煉瓦、製糖、製紙、製鋼、石場及工場ノ一定ノ部分ニ付テハ一人當氣積五百立方呎以上ナルトキ、又造船、製糖、製電氣、黃銅以外ノ鑄物工場等ニ付テハ一人當氣積二千五百立方呎以上ナルトキハ、通常石灰洗滌ノ要ナキモノトセリ)

(二) 手工場及仕事場ノ衛生

- (1) 工場、手工場及仕事場ノ清潔換氣及收容人員ニ關スル一八七五年ノ公衆衛生法第九十一條ノ規定ハ前條ノ適用ヲ受クルモノヲ除クノ外一切ノ工場及工作場ニ之ヲ適用ス
- (2) 一八七五年公衆衛生法ニ該當スル手工場及仕事場ニ於テハ溝渠、便所其ノ他ノ汚穢物ヨリ生スル臭氣ヲ防クヘシ違反者ハ公衆衛生法ニ依リ處罰ス。
- (3) 衛生醫官又ハ汚物監視吏員ノ證明書ニ依リ地方廳ニ於テ労働者ノ衛生ノ爲ニ手工場又ハ其ノ一部ニ石灰洗滌其ノ他ノ清潔方法ヲ行フノ必要アリト認

メタルトキハ地方廳ハ工場主又ハ其ノ占有者ニ對シ其ノ手工場ノ全部又ハ一部ヲ石灰洗滌シ其ノ他清潔方法ヲ施スヘキコトヲ書面ヲ以テ告知スヘシ

(4) 前項ノ告知ヲ受ケタル者指定ノ時日内ニ之ヲ爲ササルトキハ其ノ怠慢日數ニ應シ一日ニ付十シルリングヲ超エサル罰金ニ處ス但シ地方廳必要ト認ムルトキハ手工場ノ全部又ハ一部ニ石灰洗滌其ノ他ノ清潔方法ヲ施シ其ノ費用ヲ本人ヨリ徴收スルコトヲ得

(5) 本條ノ規定ハ一八九一年倫敦公衆衛生法ノ適用ヲ受クル手工場又ハ仕事場ニハ之ヲ適用セス

(三) 氣積

(1) 作業室ノ氣積カ其ノ室内ニ於テ同時ニ就業スル者一人ニ付二百五十立方呎未滿ナルトキ又定時間外就業ノ場合ニ於テハ一人ニ付四百立方呎未滿ナルトキハ工場ニ付テハ本法ニ依リ手工場ニ付テハ公衆衛生法ニ依リ其ノ密集ノ程度職工ノ健康ニ危険又ハ有害ナルモノト認ム

(2) 内務大臣ハ命令ヲ以テ電燈以外ノ燈火ヲ用フル時間中又ハ工場及手工場ノ

業務ノ性質ニ依リ前項ノ氣積ヲ増加スルコトヲ得(一九〇三年内務省令ハ地下立方呎ヲ五百立方呎ニ、又地下ニ在ラサル麵包焼室ニシテ午後九時ヨリ午前六時迄ノ間ニ電燈以外ノ燈火ヲ用フル場合ハ之ヲ四百立方呎ニ増加シタリ)

(3) 家内工場ニ非サル手工場又ハ仕事場ニシテ晝間工場トシテ使用シタル場所ヲ夜間寢室ニ使用スル場合ニハ内務大臣ハ命令ヲ以テ本條ニ規定スル氣積ノ割合ヲ増加スルコトヲ得(一九〇二年内務省令ハ一人ニ付四百立方呎ト定メタリ)

(4) 各工場及手工場ニ於テハ本條ニ依リ其ノ工場又ハ手工場ノ各室ニ於テ使用シ得ヘキ職工ノ人數ヲ揭示スヘシ

(四) 温度

(1) 工場及手工場ニ於テハ職工ヲ使用スル各室ノ温度ヲ適當ナラシムル爲相當ノ方法ヲ設クヘシ但シ之ニ依リテ其ノ室内ノ空氣ヲ不潔ナラシムルコトヲ得ス

(2) 内務大臣ハ工場手工場ニ對シ命令ヲ以テ其ノ指定シタル場所ニ寒暖計ヲ備置クヘキコトヲ命スルコトヲ得(此ノ命令ハ未ダ發布セラレズ)

(五) 換氣

- (1) 工場及手工場ノ各室ニハ適當ナル換氣方法ヲ設ケ空氣ノ流通ヲ謀ルヘシ。
- (2) 内務大臣ハ命令ヲ以テ工場又ハ手工場ノ種類ニ依リ相當ナル換氣方法ノ標準ヲ定ムルコトヲ得此ノ權限ニ依リテ發スル命令ハ本法ノ規定又ハ綿布工場ノ換氣方法ニ關スル内務大臣ノ命令ヲ變更スルコトヲ得(第五章參照)

(六) 排水

工場手工場若ハ其ノ一部ニ於テ事業ノ爲ニ床面濕潤トナル場合ニ於テ排水方法ニ依リテ之ヲ防キ得ヘキモノナルトキハ適當ナル排水方法ヲ設クヘシ

(七) 便所

- (1) 工場及手工場ニ於テハ職工ノ員數ニ應シ相當ナル便所ヲ設ケ且男女兩工ヲ使用スルモノ又ハ使用セントスルモノハ男女各別ニ之ヲ設クヘシ。

- (2) 内務大臣ハ本條ニ關シ必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得(一九〇三年内務省令ハ

仕切及配置等ニ關スル規定ヲ設ケタリ。便所ノ數ハ女子ニ對シテハ二十五人ニ付一個トシ、男子ニ對シテハ二十五人ニ付一個トスルモ職工數百人又ハ五百人ヲ超ニ付ルトキハ、別ニ適當ナル小便所ノ設アル場合ハ超人員ニ付テハ四十八人ニ付一個又ハ六十人ニ付一個等ニ減シ得ヘキモノトセリ)

二 危険豫防

(一) 機械ノ柵圍

工場ニ於ケル機械ノ柵圍ニ付テハ左ノ規定ニ從フヘシ

- (イ) 昇降機及機關室内ニアルト否トヲ問ハス蒸氣力、水力又ハ其ノ他ノ機械力

ト直結セル勢輪及斯ノ如キ原動力ニ依リテ運轉スル水車又ハ、機關ノ部分ニハ必ス堅牢ニ柵圍ヲ施スヘシ

- (ロ) サイリウス車溝ニハ他ニ安全ナル豫防方法ノ設ナキ限り之ニ密接シテ柵圍ヲ設クヘシ

(ハ) 機械ノ危険ナル部分及動力傳導裝置ノ各部ニハ堅牢ナル柵圍ヲ施シ又ハ其ノ工場内ニ於テ使用セラレ若ハ就業スル者ニ對シ堅牢ナル柵圍ヲ施シタルト同様ニ安全ナル構造ト爲スヘシ

(ニ) 柵圍ヲ施シタル部分ハ修繕中若ハ検査中又ハ掃除注油傳導裝置ノ變更若ハ機械ノ調節ノ爲其ノ部分ヲ露出スルコトアル場合ヲ除クノ外柵圍ハ機械ノ運轉又ハ使用中常ニ其ノ用ヲ爲サシムル様保存スシ

(二) 汽罐ノ取締

- (1) 工場及手工場又ハ本法ノ規定ヲ適用スヘキ場所ニ於テ蒸汽ヲ發生スル爲ニ使用スル汽罐ハ單獨ニ設ケタルト二個以上聯結セルトテ間ハス左ノ規定ニ從フヘシ
- (イ) 汽罐ニハ正確ナル安全瓣及汽罐内ノ蒸汽ノ壓力並水量ノ高低ヲ示スヘキ汽壓計及檢水計ヲ備付クヘシ
- (ロ) 汽罐ハ十四ヶ月毎ニ一回以上相當ナル人ニ其ノ全部ヲ検査セシムヘシ
- (2) 汽罐安全瓣汽壓計及檢水計ハ常ニ其ノ現狀ヲ佳良ナラシムヘシ
- (3) 検査報告書ハ成規ノ箇條ヲ具備シ成規ノ様式ニ依リテ作製シ十四日以内ニ其ノ工場又ハ手工場ノ工場臺帳ニ記載スルカ又ハ之ニ綴リ込ムヘシ此ノ報告書ニハ検査シタル者署名スヘシ。検査人汽罐検査會社又ハ検査組合ノ検査員ナルトキハ其ノ會社若ハ組合ノ技師長之ニ署名スヘシ
- (4) 本條ノ規定ハ官立工場ノ専用ニ係ル汽罐ニ之ヲ適用セス
- (5) 本條ノ適用ニ付テハ貸工場又ハ貸手工場ノ全部ハ之ヲ一ツノ工場又ハ手工場ト看做シ其ノ所有主ヲ以テ工業主ト看做ス。從テ其ノ所有主ハ本條ニ定

メタル報告書ヲ其ノ工場臺帳ニ記入スヘキモノトス

(三) 自動機械

- (1) 一八九六年一月一日以後ニ設ケラレタル工場ニ於テハ業務上他人ノ通行スヘキ場所ニ對シテ自動機械ノ走架キヤリヤクヲ固定セル建造物(其ノ機械ノ一部ニ非サルモノ)ヨリノ距離十八吋以内ニ達セシムルコトヲ得ス但シ本項ノ規定ハ綿絲又ハ羊毛紡績機械ノ鍾車カ他ノ綿絲又ハ羊毛紡績機械ノ支柱ヘフトポストヲ距ルコト十二吋マテ進行セシムルコトヲ妨ケス
- (2) 工場ニ於テハ自動機械ノ運轉停止中ノ外其ノ固定部分ト運轉部分トノ間ニ職工ノ居ルコトヲ認容スヘカラス但シ自動機械ノ前面ハ之ヲ除ク
- (3) 女工少年工及幼年工ハ蒸氣力水力其ノ他ノ機械力ニ依リテ運轉中ナル自動機械ノ固定セル部分ト運轉部分トノ間ニ於テ就業スルコトヲ得ス尙幼年工少年工及女子ノ運轉中ノ機械ノ掃除ニ對スル制限ニ付テハ第四節第三項ヲ參照スヘシ

(四) 火災豫防

- (1) 一八九二年一月一日以後ニ建設シタル工場ニシテ四十人以上ヲ使用スルモノ及一八九六年一月一日以後ニ建設シタル手工場ニシテ四十人以上ヲ使用スルモノハ其ノ所在地ノ地方廳ヨリ其ノ場内ニ使用スル者ノ爲火災ノ急ニ應スヘキ避難ニ關シ相當ノ設備ヲ有ストノ證明ヲ受クヘシ
- 地方廳ハ前記ノ工場及手工場ヲ検査シ其ノ設備アルコトヲ認メタルトキハ證明ヲ與フヘシ此ノ證明ニハ避難ノ方法ヲ詳細ニ列記スヘシ
- (2) 前項ノ規定ノ範圍内ニ屬セス且四十人以上ヲ使用スル工場又ハ手工場ニ付テハ地方廳ハ隨時其ノ火災避難設備ヲ検査シ若シ前項ノ設備ヲ有セサルトキハ所有者ニ對シ文書ヲ以テ避難設備ヲ爲スヘキコトヲ命令スヘシ
- (3) 工場又ハ手工場ニ設備セル火災避難ノ方法ハ其ノ狀況常ニ適當ニシテ且障害物ノ介在スルコトナカラシムヘシ
- (4) 本條ノ目的ヲ達スル爲貨工場又ハ貸手工場ノ全部ハ之ヲ一ノ工場又ハ手工場ト看做シ其ノ所有主ヲ以テ工業主ト看做ス
- (5) 各地方廳ハ火災豫防ニ關シテ有スル權限ノ外工場又ハ手工場ニ於テ火災避

難ノ方法ニ關シ必要ナル細則ヲ設クルコトヲ得(一九〇九年內務省ハ職工四

場ニ對スル準則ヲ設ケ階段階梯手摺通路非常
口出入口等ニ關スル大體ノ事項ヲ定メタリ)

- (6) 工場又ハ手工場ニ使用セラルル者カ就業又ハ食事ノ爲其ノ場内ニ在ルトキハ其ノ工場又ハ手工場ノ戸扉及職工ノ居ル各室ノ戸扉ハ内部ヨリ容易ニ開扉シ能ハサル様ニ錠ヲ下シ門ヲカケ又ハ閉ツルコトヲ得ス
- (7) 一八九六年一月一日以後ニ建設セル工場又ハ手工場ニ於テ十人以上ノ職工ヲ就業セシムル各室ノ戸扉ハ引キ戸ト爲スカ又ハ外開ノ構造ト爲ヘシ
- (五) 危険ナル通路工作物及機械ノ使用禁止
- (1) 即決裁判所ハ監督官ノ申告ニ依リ工場又ハ手工場ニ於テ使用スル通路工作物機械装置(蒸氣力發生ニ使用スル汽罐ヲモ含ム)カ生命身體ニ危険ヲ及ホスノ虞アリト認ムルトキハ其ノ使用ヲ禁止シ又ハ修繕若ハ變更ヲ爲ス迄其ノ使用ヲ停止スルコトヲ得
- (2) 本條ニ依リ申告ヲ受ケタル場合ニ於テ通路工作物機械装置カ生命ニ急迫ノ危険ヲ及ホスコトニ付證明アルトキハ裁判所又ハ裁判官ハ監督官ノ請求ニ

依リ裁判ノ判決ニ至ルマテ假處分ヲ以テ其ノ使用ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得。

(六) 危険又ハ有害ナル場所ノ使用禁止

即決裁判所ハ監督官ノ申告ニ依リ工場手工場若ハ其ノ一部トシテ使用スル場所カ其ノ内ニ於テ製造又ハ手工ヲ爲ス者ノ衛生若ハ生命身體ニ危害ヲ生スヘキ状態ニ在ルコトヲ知リタルトキハ危害豫防ノ爲必要ナル設備ヲ爲ス迄其ノ場所ヲ製造若ハ手工ニ使用スルヲ禁止スルコトヲ得

三 危険工業 工場及手工場法第七十九條ハ左ノ如ク規定セリ

内務大臣ハ工場又ハ手工場ニ於ケル製造方法、機械裝置、製造及手工ノ工程等カ女工、少年工、幼年工其ノ他ノ者ノ健康ニ有害ナルカ又ハ身體生命ニ危険ナリト認メタルトキハ、其ノ製造方法、機械裝置、製造及手工ノ工程ノ危険ナルコトヲ明示シ、本條ノ規定ニ依リテ正當ニ實行セラルヘク且實際ニ必要ナリト思惟スル規則ヲ設クルコトヲ得

危険工業取締規則 内務大臣ハ本條ニ基キ左記三十一種ノ工業ニ付詳細ナ

ル取締規程ヲ制定セリ

- (1) 炭酸水ノ醸詰
- (2) 重クローム酸カリウム、重クローム酸ナトリウム、クローム酸カリウム及クローム酸ナトリウムノ製造
- (3) 黄銅其他ノ合金ノ混和及鑄造
- (4) 工業藥工場
- (5) 船渠其他之ニ類スル所
- (6) 支那若ハ印度西海岸ヨリ輸入シタル乾燥皮及鹽漬皮
- (7) 陶器及磁器ノ製造及裝飾
- (8) 陶器及磁器ノ轉寫
- (9) 蓄電池
- (10) 鐵板ノ珐瑯燒付
- (11) 鐵製器物ノ鍍錫及珐瑯燒付
- (12) 金屬製器物及庖廚具ノ鍍錫及珐瑯燒付
- (13) 氈帽製造
- (14) 手工ニ依ル鏡ノ目立
- (15) 亞麻及亞麻屑ノ紡績並製織及之ニ附帶スル作業
- (16) 大麻、黄麻、大麻屑、黄麻屑ノ紡績並製織及之ニ附帶スル作業
- (17) 支那西比利亞及露國ヨリ輸入スル馬毛使用ニ關スル作業
- (18) 二硫化炭素ヲ用ウル護謨ノ硬化
- (19) 鎔鉛工場

- (20) 鉛丹及、オレンジレッド工場
- (21) 鉛白工場
- (22) エローレッド工場
- (23) 一千九百一一年制定工場及手工場法ノ支配ヲ受クル工場ノ構内ニ用キラレ又ハ此ノ構内ト關聯シテ用キラルル鐵道線路上及側線上機關車及貨車
- (24) 黃磷燐寸工場
- (25) ベンジンノ、ニトロ誘導體、アミド誘導體ノ製造及、チニトロペンヅ
- (26) 塗料及顏料ノ製造
- (27) 自働ミユール機ヲ用フル紡績業
- (28) 羊毛、山羊毛及駱駝毛ノ選別、打毛、洗毛、刷毛、梳毛及之ニ附屬スル作業
- (29) 鉛化合物ヲ用フル染絲、ヘツデング
- (30) 馬毛ヲ使用スル作業
- (31) 一九〇八年黃銅鑄造規則
- オイル又ハ、デニトロトリオールヲ用フル爆發物ノ製造

第六節 扶助

第一項 概論

一工業ノ必要ト健康傷害 方今ノ國家ハ勇將猛卒ノミヲ以テ之ヲ防衛スルコトヲ得ス、必スヤ其ノ背後ニ巨大ナル富ノ存在スルコトヲ必要トス、假令幾百千萬ノ貔貅幾百萬噸ノ艦艇ヲ有スルモ戰線ノ背後ニ於テ之ヲ支持スヘキ工業アルニ非サレハ國防ノ目的ハ之ヲ達スルヲ得サルナリ。國民ノ大部分カ平和ナル農村又ハ牧畜ノ業ヲ樂ミ悠々タル田園ニ春草秋月ヲ展ミツツ天然ヲ同伴トシテ平穩和樂ノ生活ヲ送リタリシ時代ハ幸ナル哉。今ヤ世界ノ大潮流ハ滔々國民ノ或ル部分ヲシテ煤煙濛々晝尙闇キカ如キ市街地ニ集中セシメ囂々トシテ地盤ヲ動スカ如キ機械ノ騒響又ハ一タヒ之ヲ吸入シテ忽チ窒息スルカ如キ惡瓦斯ノ側ニ於テ日夜其ノ天然ノ壽命ヲ短縮シツツ操業スルノ已ムナキニ至ラシメタリ。然レトモ工業ハ國富ヲ増進スルノミナラス之ヲ以テ國ヲ護リ之ヲ以テ國ヲ興スノ要具タリトセハ、吾人ハ其ノ害ノ大ナルヲ知ルト共ニ飽ク迄其ノ助長發達ヲ圖ラサルヘカラス。彼ノ制服ヲ着シ銃砲ヲ提ケテ訓練ヲ爲シツツアル兵士ノミカ國防ノ責ニ任スルニ非ス、吾人ハ工場ヲ以テ平和ノ兵營ト爲シ、工業主ヲ以テ平和戰ノ將帥ト爲スナリ、是レ單ニ平和ノ時ニ於テ然ルノミナラス、有事ノ時ニ於テ特ニ然

リトス、果シテ然ラハ職工ハ事實ニ於テ、護國ノ民ニ外ナラサルナリ。工業ノ必要ナルコト既ニ述ヘタル所ノ如シ然ルニ諸般ノ生産業中工業ノ如ク其ノ従業者ノ生命身體ニ危害ヲ及ホシ其ノ健康ヲ害スルモノナシ、此ノコトタルヤ實ニ東西ヲ通シテ其ノ揆ヲ一ニスル所ニシテ工業従業者カ統計上罹病、罹災及死亡率最モ高キコトハ周知ノ事實ナリトス。

二業務上ノ傷害ノ救済 工業ニ従事スル労働者カ作業上災害ニ罹リ、其ノ取扱フ有害料品ニ依リテ中毒ヲ起シ、作業場内ニ於ケル有害瓦斯粉塵其ノ他不衛生ナル就業ノ方法ニ因リテ疾病ニ罹リ其ノ健康ヲ傷害スルヲ未然ニ防止スルハ、人道上ヨリ云フモ又工業ノ發達上ヨリ云フモ最モ緊切ノコトニシテ固ヨリ等閑ニ付スハ能ハサル所ニシテ是レ諸國ノ工場法カ此等ニ關シ特ニ規定ヲ設ケテ職工ヲ保護スル所以ナリ。職工ノ保護ハ先ツ幼年工及女工ノ保護ニ始マリ漸次成年男工ニ及ヒ工場ノ危害豫防並衛生的施設ニ關スル規定ヲ設ケ、更ニ進テ各種ノ危険有害工業ニ對シテ特殊ノ危害豫防ニ關スル規定ヲ置クニ至レリ、而シテ設備命令ニ關スル諸國ノ立法例ハ各國其ノ制定前ニ於テ學識經驗アル有力者ヲシテ理論

上、實際上並一般的及専門的ノ調査研究ヲ爲サシメ其ノ結果ニ基キテ成リタルモノナリ。英國竝獨逸ニ於ケル危険工業取締規則ニ付テハ既ニ前節ニ於テ略述シタル所ノ如シ。英獨其ノ他ノ歐洲諸國ハ孰レモ職工ノ罹災及罹病ニ關シテハ常ニ諸般ノ報告ヲ蒐集シ、工場監督官トシテハ卓越セル技術官及醫師ヲ督勵シテ銳意法ノ實效ヲ收メシムルヲ期スルノミナラス、危険又ハ有害ナリ業務ニ従事スル労働者ニ對シテハ特ニ其ノ労働時間ヲ短縮シ或ハ同種ノ工業ニ従事スル工業主間ノ統一連絡ニ依リ、労働者ノ經濟上、社會上並健康上ノ向上ヲ圖リ、又ハ婦女幼少年者若ハ不熟練者カ有害料品ノ使用或ハ危険ナル方法ニ依リテ作業スルコトヲ全然避ケシムルコトニ務メ、又各職工ヲシテ其ノ作業ニ關シ危害ノ豫防及衛生ニ關スル大意ニ通曉セシムル等其ノ努力寔ニ推獎スヘキモノアリ。

工業ニ依ル災害ハ斯ノ如キ諸般ノ注意ト施設トニ依リ之ヲ防止シ得ルモノ固ヨリ少カラスト雖絕對的ニ之ヲ除去シ盡スコトハ困難ナリ、是レ理論上ハ兎モ角事實上ハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ、茲ニ於テカ災害豫防施設ノ外災害發生ノ事後ニ於ケル労働者ノ救済方法ヲ講スルノ必要ヲ生ス、而シテ此ノ事タル職工カ安ン

シテ其ノ業務ニ従事スルヤ否ヤニ關スルコト最モ大ナルモノナルヲ以テ左ニ之ニ關スル諸國ノ立法例ニ付概説スル所アラムトス。

立法例

職工カ業務ノ爲負傷シ疾病ニ罹リタル場合ニ於ケル救済方法ニ關スル諸外國ノ立法例ヲ見ルニ、工業主ヲシテ其ノ損害ヲ賠償セシムルモノト、保險制度ニ依リ平素ヨリ工業主ヲシテ其ノ料金を負擔セシムルモノトノ二種ニ大別スルコトヲ得ヘシ。

(一) 災害ノ發生セル場合労働者カ工業主ニ對シテ要求シ得ヘキ賠償ノ範圍及程度ハ法律ヲ以テ規定シ而シテ救済ノ方法ハ工業主ノ意思ニ放任スル制度

此ノ制度ハ瑞西(一八七七)英吉利(一八八〇)佛蘭西(一八九八)丁抹(一八九八)瑞典(一九〇二)ニ於テ行ハルルモノニシテ、各國共ニ職工補償法或ハ工業主責任法等ノ名稱ヲ附セリ。而シテ其ノ規定タル災厄ノ場合ニ於テ労働者カ工業主ニ對シテ請求スヘキ賠償ノ範圍及程度ヲ定ムルニ過キスシテ少シモ保險ノ性質ヲ有セサルカ如シト雖、其ノ法律ノ精神ハ矢張保險ノ方法ニ依リテ其ノ責任ヲ全ウセシム

ルニ在リ。佛國法ヲ見レハ此ノ事實ハ自ラ明ナルヘシ。

(二) 災害ノ救済ハ必ス保險ノ方法ニ依ラシムルモノ即チ強制加入ノ制度ヲ採ルモノ 此ノ制度ハ其ノ組織ニ依リ更ニ之ヲ二種ニ分ツコトヲ得

(1) 保險ノ組織ニ付テハ其ノ種類ノ何タルヲ問ハサルモノ

此ノ制度ハ一八九八年ノ災害保險法ニ依リ始メテ伊太利ニ行ハレ、次テ一九〇一年ノ災害保險法ニ依リ和蘭ニ行ハレタリ、其ノ組織ハ官營保險局ヲ設ケ又特定ノ條件ノ下ニ營業保險相互保險、單獨保險ヲモ公認シタリ而シテ工業主ニ對シテハ各自隨意ニ此等ノ保險組織ニ付其ノ一ヲ選ミ保險契約ヲ爲スコトヲ強要セリ

(2) 法律ニ依リ設定セラレタル特定ノ施設ニ限ルモノ

此ノ方法ハ一八八四年以來獨逸ニ行ハルル制度ニシテ一八八七年埃太利ニ一八九四年諾威ニ行ハレタリ

英國ニ於ケル職工補償法

英國普通法ニ依レハ損害賠償ノ請求ヲ爲スニハ(1) 相手方ニ不法行爲アルコト

即チ故意又ハ過失アルコト(2)正式ノ裁判所ニ出訴スルコト(3)工業主ハ自己ノ使用スル職工ノ一人カ自己ノ使用スル他ノ職工ニ爲シタル行爲ニ付テハ其ノ責ニ任セサルコト所謂共同使用主義 (Doctrine of Common Employment)ノ原則ニ依ルコト且(4)此ノ訴權ハ相手方又ハ自己ノ死亡ニ依リテ消滅ス從テ職工カ工業主ノ承繼者ニ對シ又ハ職工ノ遺族カ工業主ニ請求權ナキコト等職工ニ不利ナル條件アリ。而シテ十九世紀ノ初期以來工場組織ノ工業ノ發達著シク職工ニシテ職務上ノ負傷疾病死亡ノ慘禍ニ罹ルモノ益々多キヲ致シ、普通法ノミニ依ル損害賠償ノ請求權ハ保護上遺憾ナルモノアリシカハ之カ救済ノ方法トシテ一八八〇年工業主責任法 (Employer's Liability Act) 成リ(1)工業主ニ不法行爲ナキ場合ト雖業務上身體ヲ損傷セルモノニ對シテハ因テ生シタル損害ヲ賠償セシムルコト(2)工業主ニ於テ之ヲ避ケシムヘキ普通ノ手段ト注意トヲ用ヒタル場合及ヒ不可抗力ニ起因スルモノニ對シテハ工業主ニ於テ其ノ責ニ任セサルコト(3)工業主ニ代リテ職工ヲ指揮スル者ノ行爲ニ對シテハ其ノ責ニ任スルコト(4)訴訟ハ本人又ハ其ノ遺族ヨリ提起スルコトヲ得ルコト(5)身體傷害發生ノ時ヨリ六週間以内ニ工業主ニ

通知ヲ爲シ、且災害發生ノトキヨリ六箇月以内ニ、死亡ノトキハ十二箇月以内ニ訴訟ヲ提起スルヲ要スルコト、但シ死亡ノ場合ニ於テハ裁判所ニ於テ差支ナシト認めタルトキハ工業主ニ通知セサル場合ト雖訴訟ヲ提起スルヲ妨ケサルコト(6)賠償額ハ當人ト同様ノ職工ノ過去三箇年間ノ收入ヲ超ユルコトヲ得サルコト、等ノ特例ヲ認メ以テ職工保護ノ實ヲ全クセムコトヲ期シタリ。然リト雖、尙(1)工業主ハ自己ノ職工カ自己ノ使用スル他ノ職工ニ對シテ爲シタル所爲ニ付テハ責任ヲ負ハス(2)訴訟ハ依然民事裁判所ニ提起スルコトヲ要シ其ノ手續ノ繁雜ナルコトハ之ヲ免ルルヲ得サリキ、殊ニ賠償金額ニ一定ノ制限ヲ加ヘ且債權ノ存續期間ヲ甚シク短縮セルニ拘ハラス、依然トシテ普通ノ民事裁判ニ出訴セシメタルカ如キハ聊カ妥當ヲ缺クモノアリ、此ニ於テカ一八九六年更ニ職工補償法 (Workman's Compensation Act)ヲ制定シテ全然從來ノ缺點ヲ除去シタリ(現行法ハ一九〇六年改正ノモノナリ)

現行職工補償法ニ依レハ(1)職工カ自己ノ重大ナル過失ニ因ラスシテ業務上災害ニ罹リ身體健康ヲ損傷シタル時ハ工業主ハ其ノ損害ヲ賠償スルノ責ニ任スル

コト(2)重傷又ハ死亡ノ場合ニ於テハ職工ニ重大ナル過失アル場合ト雖工業主ハ補償ノ責ニ任スルコト(3)工業主ハ共済組合又ハ保険ニ加入シ其ノ掛金ヲ負擔シタル場合ハ補償ノ責ヲ免ルルヲ得ルコト(4)事件カ當事者間ノ合意ニヨリ落着セサルトキハ簡單ナル仲裁裁判ニ依リテ決スルコト(5)請求ノ要件トシテハ(a)災害發生シタルトキハ可成速カニ工業主ニ通知スルコト(b)自ラ辭職シタルトキハ其ノ罹災セルコトヲ辭職前ニ通知スルコト(c)罹災後六箇月以内ニ補償ノ請求ヲ爲スコト但シ死亡ノ場合ハ死亡ノ時ヨリ六箇月以内ニ請求スルコト等ニシテ、本法ノ特色トスル所ハ普通法及工業主責任法ニ於ケル共同使用主義即チ同一ノ工業主ニ屬スル職工ノ一方カ他方ニ爲シタル行爲ニ付工業主ハ其ノ責ニ任セサルノ主義ヲ全然排除シタルコト及補償金額ノ制限及補償債權ノ短期間ニ消滅スルコトノ規定ニ對應シテ簡易ナル仲裁裁判ノ制度ヲ認メタルコト等トス、仲裁裁判ノ組織ニ付テハ第六項ヲ參照スヘシ、補償金額ノ標準左ノ如シ。

補償ノ金額

(一)職工カ死亡シタルトキ

- (1)死者ノ收入ノミニ依リテ生計ヲ維持シタル遺族アル場合 死者ト同様ノ職工カ死者ノ死亡ノトキヨリ以後三箇年間ニ取得スヘキ金額但シ千五百圓ヲ下ルコトヲ得ヌ又三千圓ヲ超ユルコトヲ要セス
 - (2)死者ノ收入ニ依リ一部分生計ヲ助ケラレタル遺族アル場合 前號ノ範圍内ニ於テ双方ノ合意ニ依リ定メタル金額合意成立セサル時ハ仲裁裁判ニ依リ之ヲ決定ス
 - (3)死者ノ遺族ナキ場合 百圓以内ニ於テ醫藥葬祭料等トシテ相當ノ金額
- (二)職工カ身體傷害ノ爲全然又ハ十分ニ勞務ニ服スルコト能ハサルトキハ左ノ各號ニ從ヒ每週身體傷害前十二箇月間ノ每週平均收入ノ二分ノ一以内ヲ每週支給スヘシ就職十二箇月ニ滿タサルトキノ計算ハ其ノ期間内ノ每週平均額ニ依ル、但シ孰レノ場合ニ於テモ一週間十圓ヲ超ユルコトヲ要セス、一部勞働不能ノ場合ニ於テハ補償金額ハ罹災前ノ平均所得ト現在ノ所得又ハ現在ニ於テ服務シ得可キ適當ナル職業ニ依ル推定賃金トノ差額ヲ超ユルコトヲ要セス、尙勞働不能一週間ヲ超ユルモノニ非サレハ工業主ハ賠償ノ責ニ任セス尙

(1) 二週間以内労働不能ノ場合ニ於テハ最初ノ一週間ニ就テハ補償ヲ爲ササルコトヲ得

(2) 全部労働不能者カ身體傷害ノ當時二十一歳未満ナル場合ニ於テハ補償金ハ其ノ給料全額ヲ支給スヘシ但シ毎週五圓ヲ起エサルモノトス

定期金ノ支給開始後六箇月ヲ經ルモ治療セサル場合ニ於テ永久的ノ労働不能ヲ生シタルトキハ工業主ハ職工カ定期金額ノ四分ノ三ニ相當スル終身年金ヲ國債局ヨリ購入シ得ル丈ノ一時金ヲ支給シテ以後定期金ヲ支給セサルコトヲ得其他ノ場合ニ於テモ仲裁裁判所ハ民事裁判所ノ相當ト認ムル一時金ヲ支給シテ定期金ノ支拂ヲ打切ルコトヲ得。

英國ニ於テハ前記三種ノ法律ハ孰レモ異リタル内容ヲ有シ相矛盾スルモノニ非サルカ故ニ此ノ三種ノ法律ハ孰レモ有効ニ存在シ職工カ事件ノ性質ニ從ヒ自己ノ便利トスル法律ニ依リテ賠償ヲ請求スルコトヲ得ルナリ但シ同一事件ニ付二重ニ賠償ヲ受クコトヲ得サルハ勿論ナリ。

尙英國ニ於ケル職工ノ扶助ヲ陳フルニ當リテハ共済組合ノ制度ニ付一言スル

ノ必要アリ。

共済組合

英國職工補償法ハ職工ノ業務上ノ負傷及疾病ニ付テハ工場主ヲシテ其ノ損害ヲ賠償セシムルノ主義ヲ採ルト共ニ工業主ヲシテ十分其ノ責任ヲ盡サシメシカ爲労働者ノ組織スル共済組合又ハ一般傷害保険ニ加入シ其ノ掛金ヲ負擔スルニ依リ工場主カ賠償ノ責任ヲ保險者ニ轉嫁スルコトヲ認容シタリ。

英國ニ於ケル共済組合ハ其ノ沿革頗ル古ク組織モ一定セス行フ所ノ事業亦複雑錯綜セリト雖要スルニ疾病傷害死亡等ニ對スル労働者ノ相互保險團體ナリト謂フヲ得ヘシ。

(一) 共済組合ノ目的

- (1) 疾病、痲疾、老衰、寡婦、孤兒ノ救助
- (2) 出産及死亡ニ際シ金錢ノ給與
- (3) 災害、失職、難船又ハ海損ニ際シ金錢ノ給與
- (4) 嫁資ノ支出

(5) 器具ノ火災保険

(二) 共済組合ノ種類

(1) 登記ノ有無ニ依ルモノ

(イ) 登記組合

(ロ) 不登記組合

(2) 組合員ノ種類ニ依ルモノ

(イ) 地域ヲ標準トセルモノ〔村落組合 (Village or County Club) 都市組合 (Town Club)〕

(ロ) 特種職業ヲ標準トセル組合〔地方同業組合 (Local Trade Friendly Society) 一般同業組合 (General Trade Friendly Society)〕

(ハ) 組合員ノ年齢男女別等ヲ標準トセルモノ〔幼年組合 (Female F.S.) 婦女組合 (Juvenile F.S.)〕

一八四六年共済組合法ニ依リ共済組合登記局ヲ設ケ中央ニ登記官地方ニ登記官補ヲ置キ共済組合ニ關スル登記並其ノ監督ヲ掌ラシムルコトトシ爾來數次ノ改正ヲ經テ登記官吏ノ權限ハ益々擴張セラレ現行法ニ於テハ登記官吏ハ登記ヲ拒ミ之ヲ抹消シ組合員ノ請求ニ依リ組合ノ財産ヲ管理シ又ハ處分シ且組合ノ事務ヲ検査シ正當ト認ムルトキハ組合ノ解散ヲ命スルノ職權ヲ有ス。共済組合ハ

一方ニ於テハ斯ノ如ク嚴重ナル監督ヲ受クルト共ニ又他方ニ於テハ法人トシテ人格ヲ有シ土地其ノ他ノ財産ヲ所有シ組合ノ資産ヲ國庫債券ニ投資シ簡易ナル手續ニ依リテ解散シ或ル種ノ印紙稅ヲ免除セラルル等其ノ他諸種ノ特權ヲ附與セラレタリ。

工業主カ職工ノ補償責任ニ關シ共済組合ヲ利用セントスルトキハ登記官吏ノ認可ヲ受ケサルヘカラス登記官吏ハ工業主ノ計畫特ニ其ノ負擔額カ適當ナリト認メタルトキハ工業主及組合員ノ意向ヲ儘メ組合員過半數ノ賛成アル場合ニ於テハ五年以内ノ期間ヲ附シ組合規則ニ依ル補償ヲ以テ職工補償法ニ依ル工業主ノ補償ニ代スルコトヲ認可スルナリ此ノ期間ハ更ニ同様ノ手續ヲ經テ之ヲ更新スルコトヲ得要スルニ英國ニ於ケル共済組合ハ傷害保險ノ機關トシテ法律上公ニ利用セラルルコトニ於テ一ノ大ナル特徴ヲ有スルモ而カモ尙將來疾病保險ノ方面ニ於テ一層大ナル任務ヲ遂行セントスルモノナルコトヲ忘ルヘカラス一九一一年ロイドジョーヂ氏ノ熱心ナル主張ニヨリ英國モ亦獨逸其ノ他ノ諸國ニ倣ヒテ勞働保險法ヲ制定シタルカ同法モ亦共済組合ヲ利用スルノ主義ヲ採リ保險

委員ノ承認ヲ經タル共済組合ノ保險ニ加入セルモノニ對シテハ、政府經營ノ疾病保險ニ加入スルコトヲ要セサルモノトナシタリ、斯ノ如クニシテ英國ニ於テハ漸次疾病保險ハ共済組合ノ自治的相互保險ニ移サントスルノ主義ヲ採リタリ。
 共済組合ノ機關ハ役員、委員會、總會ヨリ成ル、又送金係、疾病監視係等ノ役員アリ一ハ送金事務ヲ掌リ他ハ毎週一回組合員中ノ病者ヲ訪問シ之ニ救済金ヲ給與スルモノトス。

獨逸 ニ於ケル災害保險法

獨逸ニ於テハ一八七一年勞働者ノ業務上ノ傷害ニ對スル損害賠償法ヲ制定シテ勞働者ノ保護ヲ計リタリト雖、其ノ效果見ルヘキモノ無ク到底急激ナル工業ノ發達ニ附隨シテ日ニ月ニ増加シ來ル工業勞働者ノ救済ヲ全クスル上ニ於テ遺憾ナキ能ハス、且一面ニ於テハ一般政治思想ノ變遷ト社會民主黨勃興ノ勢ニ促サレテ、一八八一年獨逸皇帝ハ勞働保險法ヲ制定スルノ勅諭ヲ發シ、一八八三年六月疾病保險法先ツ發布セラレ同年十二月ヨリ之ヲ實施シ、次テ災害保險法ハ一八八四年七月六日ヲ以テ發布翌年十月ヨリ實施シ、最後ニ老癯保險法ハ一八八九年六月

公布セラレ一八九一年一月ヨリ實施セラレタリ、但シ何レモ爾後數次ノ改訂ヲ加ヘラレ現行帝國保險法ハ一九一一年此ノ三者ヲ改正統一シタルモノナリ。

現行災害保險法ノ梗概

(一) 被保險者 常時少クトモ十人以上ノ勞働者ヲ使用スル工業、機械力ヲ使用スル工業其ノ他建築工事、航海業、漁業、農業又ハ山林業等危険ナル營業ニ従事スル者年額三千馬克以下ノ賃金又ハ給料ヲ受クルトキハ加入ヲ強制セラル、又上記ノ職業ニ従事シ年額三千馬克以下ノ給料ヲ受クル會社ノ役員、職工長、技師ニ對シテモ加入ヲ強制スルコトヲ得ヘク、又特別法ニ基キ二人以上ノ職工ヲ使用セス、又ハ所得年額三千マゝク以下ノ獨立ノ小工業主及家内工業ニ従事スル者竝年収三千馬克以上ノ會社ノ役員ニ對シテモ加入ヲ強制シ得ルモノトス。

(二) 保險者 ハ同一種類ノ事業ヲ營ム事業主ノ同業組合(Berufsgenossenschaft)ナリ同一種類ノ事業ヲ營ム工業主ハ或ハ全國ヲ通シ又ハ聯邦各國ヲ聯ネテ保險組合ヲ組織スルコトヲ要ス、之ヲ職業組合(Gewerbliche Berufsgenossenschaft)ト云フ、各組合員ハ法律ニ依リテ或ル種ノ事業ヲ營ムノ事實ニ基キ所屬ノ組合ニ加入ヲ強制セ

ラルルモノトス。農業及林業ヲ營ムモノニ付テハ地方ニ依リ事情ヲ異ニスルカ故ニ地方的區劃ヲ基礎トシテ組合ヲ組織ス而シテ之ヲ農業組合 (Landwirtschaftliche Berufsgenossenschaft) ト謂フ。又地方團體ノ事業即チ郵便電信、鐵道陸海軍ノ事業等ニ關シテハ別ニ保險官署ヲ特設セリ。

(三) 保險料 ハ全部組合員即チ工業主ノ負擔ニ屬シ、各年ニ支拂ヒタル金額ヲ特定ノ割合ニ依リテ組合員ニ賦課徵收スル所謂 (Umlageprinzip) ニ依ルモノニシテ一定ノ保險料ヲ徵收スル所謂 (Prinzip der Kapitaldeckung) ニ依ルモノニ非ス。

(四) 保險料ノ支給 労働者カ故意又ハ自己ノ重大ナル過失ニ因ルニ非スシテ業務上身體ニ傷害ヲ受ケタルトキハ其ノ傷害ノ程度ニ應シテ左ノ如キ救済ヲ爲ス。

(1) 療養費 傷害ヲ受ケタル日ヨリ十三週間迄ハ病者トシテ疾病保險ノ救済ヲ受クルモ十三週間ヲ經過シタル後初メテ災害保險ニ移リ其ノ費用ヲ以テ無料ニテ醫師ノ診察治療必要ナル藥劑其ノ他ノ醫療ヲ受ク

(2) 休業手當 身體傷害ノ結果勞務ニ服スルコト能ハサルトキ

(イ) 一時的の全部労働不能 賃金日額ノ百分ノ六十六

(ロ) 一時的の一部労働不能 賃金ノ減少シタル額ノ百分ノ六十六

ハ) 永久的の全部労働不能 賃金年額百分ノ六十六(終身年金)

(ニ) 永久の一部労働不能 賃金ノ減少セル額ノ百分ノ六十六(終身年金)

労働者労働不能トナリタルトキハ療養費及手當ヲ受ケスシテ無料ニテ入院治療ヲ受クルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ此ノ期間其ノ家族ニ對シテハ本人死亡ノ場合ニ準シ其ノ家族ニ扶助料ヲ支給スルモノトス。

(3) 死亡手當 本人カ死亡シタルトキハ左ノ金額ヲ支給ス。

(イ) 葬祭料 賃金日額ノ二十倍ノ一時金、但シ五十馬克未滿タルコトヲ得ス

(ロ) 遺族扶助料

(i) 寡婦 終身又ハ再婚スルニ至ル迄死亡者ノ賃金年額ノ二割乃至六割ノ年金

(ii) 孤兒 年齡十五才ニ達スル迄寡婦ニ支給スルト同額ノ年金

(iii) 尊族親ニシテ死者ノ收入ニヨリ生計ヲ維持シタル者終身死者ノ賃金額

二割以内ノ年金

(iv) 死者ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル孫 年齢十五才ニ達スル迄尊族親ニ支給スルト同額ノ年金

而シテ毎年損害ヲ填補スルニ必要ナル保険料ヲ徴收スルトキハ工業主ノ負擔ハ年ト共ニ増加スルノ虞アルカ故ニ損害填補ノ外毎年相當ノ準備金ヲ積立テ之ニ備フルモノトス

(五) 組合ノ組織及権限 組合ノ機關ハ役員及總會ノ二者ヨリ成ル役員ハ名譽職ニシテ總會之ヲ選舉ス役員ハ常務ヲ處理シ總會ハ役員ノ改選計算ノ調査承認及定款ノ變更等ノ事ヲ司ル組合ハ保險ニ依リ労働者ノ救済ヲ行フノ外帝國保險局ノ承認ヲ得テ危害豫防ニ關スル組合規則ヲ制定シ組合員ヲシテ之ヲ遵守セシムル爲特別ノ検査員ヲ任命シテ組合員ノ工場ニ臨檢シ適當ナル忠告ヲ爲スト共ニ此ノ規則ヲ強制シ從ハサルモノニ對シテ罰金ヲ課シ又ハ保險料ノ率ヲ上騰セシムルコトヲ得ルノ權能ヲ有ス

(六) 組合ノ監督 獨逸帝國ノ保險事業ノ監督機關トシテハ伯林ニ帝國保險局聯邦各國ニ聯邦國保險局ヲ置ク聯邦國保險局ヲ置カサル聯邦國ニ付テハ帝國保險

局直接ニ其ノ事務ヲ處理ス

(イ) 保險局ノ組織 聯邦國保險局ニ於テハ(1)聯邦國政府ノ任命スル數名ノ委員(2)傭主及労働者ヨリ選出スル各四名ノ委員(内一名ハ農業又ハ林業ニ従事スルモノタルコトヲ要ス)前者ハ終身官ニシテ委員長ハ此ノ委員中ヨリ選舉スルモノトス後者ハ五年毎ニ改選スルモノトス

帝國保險局 ニ在リテハ(1)聯邦參事會ノ推薦ニ依リ特ニ親任セラレタル局長及高級ノ終身官(2)總理大臣ノ奏任スル官吏(3)委員十八名任期五箇年トス内六名ハ聯邦參事會ヨリ六名ハ事業主殘餘ノ六名ハ労働者ヨリ之ヲ選舉ス

(ロ) 保險局ノ権限 帝國並聯邦國保險局ハ共ニ聯邦各國ニ於ケル保險事務ヲ監督シ且地方仲裁裁判所ニ於テ調停不能トナリタル組合ト組合員トノ間ノ爭議ニ對シ共ニ最高裁判所トシテ裁決ヲ爲ス而シテ帝國保險局ハ尙職業組合ノ危害豫防ニ關スル規則ノ認可組合カ組合員ニ賦課スヘキ保險率ノ認可等諸般ノ監督權ヲ有ス

英國並獨逸カ労働者ノ災害救助ニ付意ヲ用フルコト斯ノ如シ。而シテ英獨兩

國ノ工業主カ年々労働者ノ救済ノ爲ニ支出スル金額ハ驚クヘキ巨額ニシテ其ノ一般ハ別表ニ依テ之ヲ窺フニ足ルヘシ。

惟フニ英國ニ於テハ職工補償法ヲ以テ工業主ヲシテ其ノ事業ニ基ク職工ノ災害ニ因ル損害ヲ填補スルノ責ニ任セシメ、一般傷害保険ニ加入スルト共済組合ニ加入スルト又自ラ全然其ノ責ニ任スルトハ全ク工業主ノ意思ニ一任シ、獨逸ニ於テハ工業主ヲシテ必ス保險組合ヲ組織セシメ加入ヲ強制シ其ノ料金を負擔セシメ所謂強制保險ノ制度ヲ採用シタリ。然レトモ兩國共ニ工場災害ニ基ク損害ハ實質上工業主ヲシテ之ヲ負擔セシムル點ニ於テ異ル所ナシ。

茲ニ最モ注意ヲ要スルハ獨逸ニ於テハ工業主ハ疾病保險ノ掛金トシテ一九〇九年ニ於テ大約二四八六〇〇〇〇馬克ヲ支出セルカ故ニ此ノ内二分ノ一ハ療養十三週以内ノ負傷者ノ爲ニ使用セラルルモノト假定スルモ、尙職工ノ疾病ニ對シテ一箇年一二四三〇〇〇〇馬克ヲ負擔シ又職工ノ負傷ニ對シテハ一九九〇〇〇〇〇馬克ニ一二四三〇〇〇〇馬克ヲ加算シタル三二三三〇〇〇〇馬克ノ巨額ヲ支出セルノ理ナリ、此ノ故ニ工業主ハ職工ノ負傷ニ對シテ負擔シタル

英國工業界之賠償額 (弗)									
勞働不能者					其他				
總額	平均額	總額	平均額	總額	平均額	總額	平均額	總額	平均額
270,077	678	158,286	61.82	800.7	28.1	98			
844,72	905	187,54	14.32	829.	11.1	87			
222,242	808	247,743	25.22	102.8	23.2	23			
515,018	272	44,010	25.12	222.7	10.0	42	204	51	
110,047	184	31,011	38.11	172.2	22.0	71	1,163	31	
872,58	122	2,202	17.12	272.2	10.0	30	83	21	
252,206	212	23,272	20.20	272.2	22.0	23	1.1.5	111	
812,82	700	127,224	12.21	222.2	22.0	108	18,512	220	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	3.9.6	89	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	11,991	97	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	1,314	73	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	20,746	144	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	24,678	93	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	83,782	114	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	603	86	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	417,697	70	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	24	12	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	467	156	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	224	224	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	2,336	137	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	2,560	142	
222,222	222	122,222	22.22	222.2	22.0	110	505,133	75	

備考：死亡者中
一人 眼珠顫動
九人 炭疽熱
四人 鉛中毒

千九百二十年度英國職工補償法ニ依ル賠償統計 (一週間未滿勞働不能ノ罹災者ヲ含マズ)

事業ノ種類	事業主	負傷者								中毒罹災者							
		罹災者				賠償金額(弗)				罹病者				賠償金額(弗)			
		死亡	千人=對スル割合	勞働不能	千人=對スル割合	死者	平均額	勞働不能者	平均額	死亡	千人=對スル割合	勞働不能	千人=對スル割合	死者	平均額	勞働不能者	平均額
航海業																	
汽船	236.004	439	1.86	7.668	32.49	385.821	879	510.977	67								
帆船	18.394	76	4.13	.633	34.41	45.521	599	37.448	59								
計	254.398	515	2.02	8.301	32.63	431.342	838	548.425	66								
工業																	
綿	612.995	54	0.0	13.252	21.62	31.024	575	419.215	32			4	0.01			204	51
毛	280.573	15	0.05	3.271	11.66	9.913	661	116.942	36	5	0.02	37	0.13	4.229	846	1.163	31
其ノ他ノ纖維工業	248.669	10	0.04	3.275	13.17	5.509	551	82.278	25	1		4	0.02	316	316	83	21
製材	135.257	39	0.29	5.478	40.50	23.875	612	252.596	46			10	0.07			1.1.5	111
金屬(精鍊及他)	437.160	168	0.38	34.323	78.51	127.634	760	872.899	25	5	0.01	84	0.19	5.227	1.045	18.512	220
機械及造船	348.212	210	0.60	32.310	92.79	158.439	754	992.153	31	3	0.01	45	0.13	2.278	759	3.9.6	89
其ノ他ノ金屬製品	801.814	148	0.18	39.722	49.54	103.564	700	999.073	25	9	0.01	123	0.15	6.706	745	11.991	97
製紙及印刷	322.447	22	0.07	4.679	14.51	13.582	617	177.564	38			18	0.06			1.314	73
窯業	72.834	7	0.10	1.143	15.69	4.224	603	32.177	28	15	0.21	144	1.98	15.169	1.011	20.746	144
其ノ他	1.990.480	364	0.18	51.027	25.64	2.65.545	730	1.572.639	31	11	0.01	264	0.13	10.244	931	24.678	93
計	5.250.451	1,037	0.20	188.48	35.90	743.309	717	5.517.536	29	49	0.01	733	0.14	44.168	901	83.782	114
船業	158.598	325	1.42	16.973	107.02	175.223	779	649.955	38	2	0.01	7	0.04	83	42	603	86
鐵山	1.086.113	1,246	1.15	167.959	154.64	984.819	790	4.365.688	26	2		5.949	5.48	2.136	1.068	417.697	70
石切場	84.703		0.76	5.440	64.22	42.168	659	190.480	35			2	0.02			24	12
建築業	115.218	35	0.74	6.111	53.04	60.593	713	264.047	43			3	0.03			467	156
鐵道																	
事務員	74.575	3	0.04	62	0.83	2.273	758	1.757	28			1	0.01			224	224
其ノ他ノ從業者	386.960	149	0.95	24.368	62.97	271.497	736	643.906	26	2	0.01	17	0.04	2.214	1.107	2.336	137
計	461.544	372	0.81	24.430	52.93	273.770	736	645.663	26	2		18	0.04	2.214	1.107	2.560	142
總合(1912)	7.411.005	3,044	0.48	417.694	56.36	2,711.224	765	2,181.803	29	55	0.01	6,712	0.91	48.602	884	505.133	75

備考：死亡者中
 一人 眼珠損傷
 一人 クローム中毒
 九人 炭疽熱
 四人 鉛中毒

九年ニ於テ大約二四八六〇〇〇〇馬克ヲ支出セルカ故ニ此ノ内二分ノ一ハ療養十三週以内ノ負傷者ノ爲ニ使用セラルルモノト假定スルモ尙職工ノ疾病ニ對シテ一箇年一二四三〇〇〇〇馬克ヲ負擔シ又職工ノ負傷ニ對シテハ一九九〇〇〇〇〇馬克ニ一四三〇〇〇〇馬克ヲ加算シタル三二三三〇〇〇〇馬克ノ巨額ヲ支出セルノ理ナリ此ノ故ニ工業主ハ職工ノ負傷ニ對シテ負擔シタル

百 八 年 獨 逸 帝 國 災 害 保 險 統 計 (農業組合ヲ含マス)																			1885	1908	
鑛	山	採石場	窯	業	鐵工業	金、屬、器 具、藥	化 學	瓦 斯 及 水 力 工 場	織 維 工 業	製 紙 印 刷	製 革 衣 服	木 材	食 料 品、 煙 草	製 粉、製 糖、 釀 造 業	建 築 (個 人)	私 營 鐵 道	倉 庫 及 倉 運	內 地 航 海	航 海 業		
1.888	12 423	13.689	108.865	13.425	8.699	2.774	15.960	12.552	15.374	62.782	74.849	45.586	181.237	630	107.137	17.311	1.643	11.256.870			
798.378	439.719	451.758	1.362.102	477.869	216.751	70.099	390.513	392.757	355.654	428.743	440.842	313.575	1.572.208	97.843	472.394	59.242	77.345	146.044.011			
798.378	169.566	354.362	1.289.887	445.983	216.751	70.079	885.522	367.992	325.056	395.117	449.730	292.983	1.109.233	105.679	465.614	55.108	71.491				
1.117.1	178.6	346.0	1.555.9	542.6	240.5	85.7	632.5	365.7	321.4	392.3	319.8	300.4	1.274.0	127.0	475.8	56.7	68.8	109.559.2			
103.977	11.651	10.530	114.048	18.094	12.236	4.995	11.815	10.333	5.336	19.752	9.227	21.211	65.452	7.433	27.711	3.863	3.777	6.064.973			
11.725	2.657	2.431	14.974	2.968	1.994	473	2.748	1.790	1.092	5.021	2.185	3.517	13.064	758	5.912	812	460	1.002.174			
1.847	2.56	208	745	99	128	31	100	112	50	178	65	272	1.023	91	471	186	77	97.711			
60	32	4	148	28	50	3	11	9	8	7	6	24	113	23	28	9	3	24.107			
3.525	846	547	7.448	2.903	1.206	156	1.416	799	718	1.905	610	1.581	4.229	413	1.417	179	116	486.325			
6.293	1.523	1.672	6.633	838	610	283	1.221	870	316	2.931	1.504	1.640	7.699	231	3.996	438	264	394.031			
14.69	6.04	5.38	10.99	6.21	9.20	6.75	3.09	4.56	3.07	11.71	4.93	11.22	3.31	7.75	12.52	13.71	5.95	6.86			
14.69	15.67	6.86	11.61	6.65	920	6.75	3.10	4.87	3.36	12.71	4.86	12.00	11.78	7.17	12.72	14.71	6.43				
542	256	443	3.886	1.502	388	47	1.465	993	524	2.832	536	699	883	28	183	23	48	210.558			
660	117	96	1.255	55	40	12	35	37	22	26	36	127	383	13	215	62	57	35.715			
18	12	2	26	4	11	—	24	12	5	5	3	30	10	2	4	6	7	3.572			
266	81	10	27	2	46	—	1	1	—	2	—	—	68	—	10	3	5	9.993			
528	83	43	864	91	257	28	152	49	40	15	41	88	383	7	53	11	9	33.689			
3.506	493	355	1.443	172	237	46	142	80	30	246	66	334	3.106	67	826	94	23	165.410			
1.103	337	281	1.671	383	372	156	450	225	149	495	396	702	3.203	113	1.133	173	93	162.074			
2.244	298	234	2.471	323	173	59	196	169	114	754	148	509	1.783	64	1.022	76	23	131.240			
829	122	269	422	45	95	26	75	67	34	134	172	531	685	23	1.554	8	1	61.808			
723	377	283	569	14	97	29	10	25	4	33	5	125	1.105	324	132	7	—	40.355			
—	20	5	14	—	6	1	—	—	—	2	—	4	32	—	37	291	146	10.081			
91	30	48	84	6	34	3	18	5	8	39	128	125	88	3	428	3	2	13.968			
688	398	105	1.792	178	30	29	78	56	87	177	496	69	854	58	90	16	16	71.911			
522	33	157	450	193	203	37	102	71	75	277	157	174	481	56	225	39	30	51.792			
1.220	385	541	5.167	1.591	439	57	1.524	1.042	551	2.863	576	856	1.276	43	492	91	112	249.845			
1.53	0.88	1.20	3.79	3.27	2.03	0.84	1.71	2.65	1.55	6.6	1.31	2.73	0.81	0.44	0.85	1.54	1.45	1.71			
1.53	227	1.53	4.01	3.50	2.03	0.84	1.72	2.83	1.69	7.25	1.28	2.92	1.15	0.41	0.86	1.65	1.57	—			
22.617.636	3.819.651	3.278.494	20.592.361	3.351.249	3.056.039	822.535	3.746.744	2.341.477	1.534.852	5.800.392	1.823.206	6.241.700	19.963.051	1.299.029	7.356.126	1.408.923	1.103.898	11.33.045.417			
20.25	21.39	9.48	13.24	6.18	12.71	9.60	5.41	6.56	4.78	14.79	5.70	20.78	15.67	10.23	15.46	24.85	16.05	10.34			
1(1)	14(14)	6(6)	30(28)	8(8)	11(5)	—	13(10)	14(12)	6(6)	11(11)	7(7)	15(10)	111(1.5)	1	22(21)	3(2)	42	—			
62.941	100.173	41.064	177.725	50.542	101.834	12.711	66.259	38.968	17.613	67.108	65.814	70.025	513.364	15.468	68.168	15.699	187.972	19.979.348			
6	56	12	11	9	42	15	10	11	5	17	21	23	40	12	14	218	273	19			

備考
(3) 括弧内ノ数字ハ一年間ノ通シテノ實際ノ人員
(7) 罹災者トハ主トシテ十三週間ヲ超エ療養ヲ要シタルモノニシテ此ノ外工業主者自傷後事四日ヨリ十三週間ニ至ル迄療養ヲ施シタルモノトシテ包含マ
(6) 自傷申告數ハ四日以上労働不能トナリタル自傷者ニシテ事業主ヨリ届出タルモノ

四十八歳以上
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

10	ME
11	EA11
12	EA
13	EA11
14	EA11
15	EA11
16	EA11
17	EA11
18	EA11
19	EA11
20	EA11
21	EA11
22	EA11
23	EA11
24	EA11
25	EA11
26	EA11
27	EA11
28	EA11
29	EA11
30	EA11
31	EA11
32	EA11
33	EA11
34	EA11
35	EA11
36	EA11
37	EA11
38	EA11
39	EA11
40	EA11
41	EA11
42	EA11
43	EA11
44	EA11
45	EA11
46	EA11
47	EA11
48	EA11
49	EA11
50	EA11
51	EA11
52	EA11
53	EA11
54	EA11
55	EA11
56	EA11
57	EA11
58	EA11
59	EA11
60	EA11
61	EA11
62	EA11
63	EA11
64	EA11
65	EA11
66	EA11
67	EA11
68	EA11
69	EA11
70	EA11
71	EA11
72	EA11
73	EA11
74	EA11
75	EA11
76	EA11
77	EA11
78	EA11
79	EA11
80	EA11
81	EA11
82	EA11
83	EA11
84	EA11
85	EA11
86	EA11
87	EA11
88	EA11
89	EA11
90	EA11
91	EA11
92	EA11
93	EA11
94	EA11
95	EA11
96	EA11
97	EA11
98	EA11
99	EA11
100	EA11

千 九 百 八 年 獨 逸 帝 國 災 害 保 險

1	事業ノ種別		總加入者 ニ付テ	鐵	山	採石場	窯業	鐵工業	金、銅、器 具、藥器	化學	瓦斯及 水力工場	纖維工業	製紙印刷	製革衣服	木材	食料品、 草	製粉、製糖、 醸造業	建築(個人)
2	事業ノ數		696,824	1,888	12,423	13,689	108,865	13,425	8,699	2,774	15,960	12,552	15,374	62,782	74,849	45,586	184,231	
3	被保險者ノ數		8,917,772	798,378	439,719	451,758	1,362,102	477,869	216,751	70,009	390,513	392,757	355,654	428,743	440,842	313,575	1,572,201	
4	被保險就業者數(勞働日數ノ300ニテ除シタル數)		7,868,531	798,378	169,566	354,362	1,289,887	445,983	216,751	70,079	885,522	367,992	325,056	395,117	449,730	292,983	1,102,231	
5	保險料計算ノ基礎賃金(百萬馬克)		8,463.6	1,117.1	178.6	346.0	1,555.9	542.6	240.5	85.7	632.5	365.7	321.4	392.3	319.8	300.4	1,274.1	
6	負傷申告數		461,091	103,977	11,651	10,530	114,048	18,094	12,236	4,995	11,815	10,333	5,336	19,752	9,227	21,211	65,451	
7	罹災者數(3-11)		74,581	11,725	2,657	2,431	14,974	2,968	1,994	473	2,748	1,790	1,092	5,021	2,185	3,517	14,061	
8	罹 災 者 (保險金ノ支給ヲ開始シタルモノ)	死	5,939	1,847	256	208	745	99	128	31	100	112	56	178	65	272	1,021	
9		勞働不能者	566	60	32	4	148	28	50	3	11	9	8	7	6	24	111	
10		永續的	29,114	3,525	846	547	7,448	2,903	1,206	156	1,416	799	718	1,905	610	1,581	4,221	
11		一時	38,962	6,293	1,523	1,672	6,633	838	610	283	1,221	870	316	2,931	1,504	1,640	7,691	
12	被保險者千人ニ對スル罹災者ノ割合		8.36	14.69	6.04	5.38	10.99	6.21	9.20	6.75	3.09	4.56	3.07	11.71	4.93	11.22	3.31	
13	被保險就業者千人ニ對スル割合		9.48	14.69	15.67	6.86	11.61	6.65	9.20	6.75	3.10	4.87	3.36	12.71	4.86	12.00	11.73	
14	原動機、動力傳導装置其他ノ機械		95,278	542	256	443	3,886	1,502	388	47	1,465	993	524	2,832	536	699	883	
15	起重機		3,249	660	117	96	1,255	55	40	12	35	37	22	26	36	127	383	
16	汽罐其他		181	18	12	2	26	4	11	—	24	12	5	5	3	30	10	
17	爆發物		522	266	81	10	27	2	46	—	1	1	—	—	—	—	68	
18	發火物高熱物體		2,742	528	83	43	864	91	257	28	152	49	40	15	41	88	383	
19	衝突		11,266	3,506	493	355	1,443	172	237	46	142	80	30	246	66	334	3,406	
20	高所コリ墜落		11,440	1,103	337	281	1,671	383	372	156	450	225	149	495	396	702	3,203	
21	重量品ノ揚卸		10,660	2,244	298	234	2,471	323	173	59	196	169	114	754	148	509	1,783	
22	運搬		5,092	829	122	269	422	45	95	26	75	67	34	134	172	531	655	
23	鐵道		3,952	723	377	283	569	14	97	29	10	25	4	33	5	125	1,105	
24	航海		558	—	20	5	14	—	6	1	—	—	—	—	—	—	32	
25	動物		1,137	91	30	48	84	6	34	3	18	5	8	39	128	125	388	
26	工具		5,217	688	398	105	1,792	178	30	29	78	56	87	177	496	69	864	
27	其他		3,287	522	33	157	450	193	203	37	102	71	75	377	157	174	481	
28	機械ニ依ルモノ(14)(15)及(16)		18,708	1,220	385	541	5,167	1,591	439	57	1,524	1,042	551	2,863	576	856	1,276	
29	同上ノ被保險者千人ニ對スル割合		2.10	1.53	0.88	1.20	3.79	3.27	2.03	0.84	1.71	2.65	1.55	6.6	1.31	2.73	0.81	
30	(28)ノ被保險就業者千人ニ對スル割合		2.38	1.53	2.27	1.53	4.01	3.50	2.03	0.84	1.72	2.83	1.69	7.25	1.28	2.92	1.15	
31	支拂タル保險金(馬克)		110,157,406	22,617,636	3,819,651	3,278,494	20,592,361	3,351,249	3,056,039	822,535	3,746,744	2,341,477	1,534,852	5,800,392	1,823,206	6,241,700	19,963,061	
32	賃金千馬克ニ對スル支拂保險金		13.02	20.25	21.39	9.48	13.21	6.18	12.71	9.60	5.41	6.56	4.78	14.79	5.70	20.78	15.67	
33	組合監視員數		315(247)	1(1)	14(14)	6(6)	30(28)	8(8)	11(5)	—	13(10)	14(12)	6(6)	11(11)	7(7)	15(10)	111(11)	
34	危險防止ニ要シタル費用(馬克)		1,673,978	62,941	100,173	41,064	177,725	50,542	101,834	12,711	66,289	38,968	17,613	67,108	65,814	70,025	513,364	
35	賃金千馬克ニ對スル危險豫防費(布片)		20	6	56	12	11	9	42	15	10	11	5	17	21	23	63	

獨逸帝國勞働保險成績概表

自一八八五年 至一九〇九年 (二十五年間) 一九〇九年 (一年間)

收 入 (單位: 馬克)	自一八八五年 至一九〇九年 (二十五年間)				一九〇九年 (一年間)			
	疾病保險	災害保險	老衰保險 (1881-1909)	計	疾病保險	災害保險	老衰保險	計
勞働者掛金	2,998.8	--	1,271.2	4,270.0	121.0	--	94.2	342.8
事業主掛金	1,351.3	2,195.0	1,271.2	4,817.5	248.6	199.0	94.2	414.2
政府支出金	--	--	587.2	587.2	--	--	51.5	51.5
利子其ノ他ノ收入	205.7	283.6	521.0	1,010.3	16.2	15.1	54.0	85.2
計	4,817.5	4,269.9	3,650.6	10,685.0	355.9	214.1	293.9	893.7
組合財産	286.5	510.7	1,574.1	2,371.3	286.5	510.7	1,574.1	2,371.3
醫師報酬	845.1			845.1	75.4			75.4
藥品及材料	615.9			615.9	47.8			47.8
本人ニ對スル疾病保險金	1736.2			1736.2	145.8		3.5	149.3
家族ニ對スル疾病保險金	39.5		25.9	39.5	4.7			4.7
出産保險金	63.7			63.7	6.1			6.1
病院費	510.6			510.6	49.1			49.1
死亡保險	122.0	10.4		132.4	8.2	0.7		8.9
治療費		44.7	137.6	182.3		3.7	20.7	24.4
待期ニ於ケル療養費		10.6		10.6		1.0		1.0
事業主ノ療養費		67.2		67.2		5.0		5.0
家族定期金		18.3		18.3		1.4		1.4
本人定期金		1304.2		1304.2		117.4		117.4
内國人一時金		12.4		12.4		1.8		1.8
外國人一時金		3.9		3.9		0.3		0.3
寡婦一時金		12.2		12.2		1.0		1.0
遺族扶助金		324.2		324.2		30.0		30.0
廢疾保險金			1188.9	1,188.9			139.9	139.9
老衰保險金			423.5	423.5			15.6	15.6
拂戻金			95.7	95.7			9.4	9.4
其ノ他	61.4			61.4	5.1			5.1
計	3,994.4	187.4	1,871.6	7,674.4	342.2	162.3	189.1	693.6
行政費	243.2	319.6	204.8	767.6	20.7	27.6	20.3	68.6
行政費費		215.2	140.9	338.1		17.2	12.3	19.5
內 危害豫防費		18.9		18.9		2.1		2.1
仲裁々判費		27.0	9.0	36.0		2.7	0.8	3.5
課 保險金額決定費		58.5	17.1	58.5		5.6	2.3	7.9
保險料ノ徵收費			55.8	55.8			4.9	4.9
合 計	4,237.6	2,127.0	2,076.4	8,444.0	362.9	189.9	209.4	762.2
罹病者(罹災後十三週以内ノ疾病者ヲ含ム)	87,000,000		103,192		23,063	職業組合66	保險組合31	
罹病者ノ延治療日數	1,566,000,000					農業組合48	特殊金庫10	
罹災者(罹災後十三週以内ノ災害者ヲ含ム)		2,141,066						
廢疾者			1,748,137					
老衰者			481,382					
拂戻ヲ受ケタル者			2,406,341					
組合數								
被保險者	男	9,946,585	14,854,000	10,707,100				
	女	3,457,711	8,913,000	4,737,300				
人口	男	31,526,000						
	女	32,353,000						
勞働者	男	10,412,000						
	女	5,834,000						

備考 (一)(二)(三)
 (一) 一九〇九年ニ於テ二十歳以上七十歳ノ者ニシテ廢疾トナリタル者被保險者千人ニ付八、七
 (二) 一九〇八年ニ於テ被保險者千人ニ付ノ平均罹病日數四一、四九(男四三、五、一七)ニシテ平均治療日數四二〇、一七(女二二、二八)
 (三) 一九〇九年ニ於テ被保險者百人ニ付一年間ノ平均罹病日數四一、四九(男四三、五、一七)ニシテ平均治療日數四二〇、一七(女二二、二八)



料ヲ得ルニ苦シム場合少カラサルナリ。労働者ヲシテ其ノ生ヲ全クセシメサルコトハ單ニ工業ノ盛衰ニ關スルノミナラス一國ノ興廢ニ關スル重大問題ニシテ、獨リ工業主ノミカ其ノ救済ノ責ニ任スヘキモノニアラスシテ國家モ亦與リ知ラサルヘカラサル社會問題ナリ。是レ英獨其ノ他ノ諸外國カ労働者補償法又ハ災害保險ノミヲ以テ足レリトセス一般の労働保險ノ制度ヲ立テタル所以ナリ。

一般の労働保險ハ其ノ目的ニ依テ(一)災害保險(二)疾病保險(三)老衰並廢疾保險(四)失業保險ノ四種ニ大別スルコトヲ得ヘシ。

(一) 災害保險 已ニ述ヘタル所ノ如シ

(二) 疾病保險

職工ノ疾病カ其ノ業務ニ起因スル場合ニ於テハ之ニ因リテ生シタル損害ニ付テハ工業主ニ於テ賠償ノ責ニ任セシムヘキコト負傷ノ場合ト異ルナシ。然レトモ業務ニ起因セサル疾病亦甚タ多ク、斯ノ如キ疾病ニ對スル救済ハ法律ヲ以テ工業主ニ強制スヘキモノニ非ス。故ニ労働者ノ疾病ニ付テハ保險ノ制度ヲ設ケ主トシテ職工ヲシテ自ラ不時ノ場合ニ備フルノ用意ヲナサシメサル可カラズ。惟フニ各

種ノ労働保險中其ノ起原ノ遠クシテ最モ廣ク行ハルルハ疾病保險ナルヘシ。歐洲諸國ノ疾病保險制度ニ二種アリ。

(1) 任意主義ノ疾病保險

任意主義ノ疾病保險中最モ廣ク行ハルルモノハ相互保險ノ組織ナリ。而シテ其ノ首位ニ立ツモノヲ共済組合トス。英國ニ於テ「フレンドリソサイエチー」ト謂ヒ、佛蘭西ニ於テ「ソシエテ、ド、スタイル、ミユチユエール」ト謂ヒ、獨逸ニテ「ヒルフスカツセ」ト謂フモノ即チ是レナリ。何レモ相互救済ノ基礎ニ起リ主トシテ労働者ヲ以テ組織セル團體ニ外ナラス。或ル種ノ共済組合ハ必スシモ疾病保險ノミヲ營ムモノニ非スシテ、疾病以外ノ事情例ヘハ老衰、廢疾、災害等ニ對スル救済ヲモ併セ行フモノアリト雖其ノ重ナルモノハ疾病保險ナリトス。瑞典ニ於テハ一八九一年法律ヲ以テ此等ノ組合ニ對シテ政府ハ補助金ヲ給付スヘキコトヲ制定セリ。丁抹ニ於テモ亦政府ヨリ補助金ヲ給スルノ制度ヲ採レリ。英國ニ於テハ一九一一年労働保險法制定以來共済組合中優良ナルモノヲ公認シ、疾病保險ノ經營ニ付テハ漸次共済組合ヲシテ之ニ當ラシメントスルノ計畫ヲ立テタリ。

(2) 強制主義ノ疾病保険

疾病ニ關スル強制保険ハ獨逸ヲ以テ嚆矢トス。一八八三年制定セラレタル疾病保險法即チ是レナリ。次ニ一八八八年奧太利ノ疾病保險法發布セラレ、一八九〇年ニハ匈牙利ニ、一九〇九年ニハ諾威ニ同法制定セラレ、又一九一一年ニハ英國ニ於テモ國民保險法ノ制定ヲ見タリ。

(三) 老癯保險

老癯保險ハ窮民救助ノ制度ト甚タ密接ナル關係ヲ有シ、各種勞働保險中社會政策上殊ニ都市ノ發達ニ伴ヒ最重要ナル地位ヲ有スルモノナリ。然ルニ歐洲各國ニ於ケル老癯保險ハ其ノ發達仍甚タ幼稚ニシテ他ノ勞働保險ノ如ク普及セサル所以ノモノハ、主トシテ永久ニ勞働能力ヲ失ヒタル勞働者ニ對スル救済ヲ目的トシ、其ノ救済方法トシテハ、終身年金制ニ依ルカ、又ハ一時ニ多額ノ扶助金ヲ給セサルヘカラサルカ故ナリ。左レハ此等ノ金額ヲ支出スル爲ニハ平素ヨリ比較的多額ノ保險料ヲ徵收セサルヘカラス、是レ勞働者ノ通常堪フル所ニ非サレハナリ、此等ノ事情ニ基キ老癯保險ハ諸國之ヲ官業トシテ經營スルモノ多シ。獨逸ニ於

テハ災害、疾病兩保險ニ付テハ純然タル相互組織ヲ採レルニ拘ラス、老癯保險ニ付テハ相互組織ヲ主トシ、之ニ加フルニ官業保險ノ性質ヲ以テセリ。老癯保險モ亦疾病保險ト同シク之ヲ任意、強制ノ二種ニ分類スルコトヲ得ヘシ。

(1) 任意主義ノ老癯保險

任意主義ニ依ル老癯保險ニ於テハ相互保險ヨリモ寧ロ官業保險發達セリ。伊太利、佛蘭西、白耳義ノ三國ニ於テ最モ顯著ナル實例ヲ見ル。英國ニ於テハ從來ノ共濟組合組織ヲ以テ満足スルコト能ハス疾病保險ヲ官業ト爲スニ至レリ。佛蘭西、白耳義兩國ニ於テハ共濟組合ニ一定ノ補助金ヲ交付スルノ方法ヲ設ケテ之ヲ保護セリ。然レトモ老癯保險ニ於テ最モ發達シタルモノハ官業保險ナリトス。

(2) 強制主義ノ老癯保險

老癯ニ對スル強制保險ノ實例ノ顯著ナルモノハ只英獨兩國ナリ。獨逸ニ於テハ一八八九年始テ之ニ關スル法律ノ公布アリ、襲テ一八九九年ノ改正アリ、而シテ一九一一年帝國保險法ノ制定アルヤ、其ノ第四編ニ於テ老癯保險ノ規定ヲ設ケタリ、是レ即チ現行法ナリ。此ノ法律ハ災害及疾病ノ保險ト均シク、加入竝設備ノ強

制ヲ實行スルモノナリ。其ノ組織ハ工業主ト労働者ヲ以テ組合員ト爲シタル相互保險ナル點ニ於テ疾病保險ト同一ナリト雖老廢保險ノ經營ニハ巨額ノ經費ヲ要スル爲、保險料ヲ工業主及労働者ノミノ負擔ト爲ス時ハ十分ナル救済ヲ爲ス能ハサルヲ以テ、政府ハ特定ノ金額ヲ補助スルモノトス。此ヲ以テ其ノ組合ニ對スル政府ノ監督モ亦嚴重ニシテ其ノ機關ノ構成ノ如キハ政府ノ官吏ヲモ參加セシムルモノニシテ即チ半官半民制ナリ。

救済ノ條件ハ七十歳ニ達シタル者ハ法定ノ救済ヲ受クルコトト爲シ、廢疾ノ場合ハ慢性廢疾ト爲リタル者ハ其ノ日ヨリ又二十六週間以上繼續シテ労働不能トナリタル時ハ、其ノ以後ニ於テ救済ヲ爲スコトトセリ。保險料ハ労働者及工業主ノ負擔トシ各同額ノ支出ヲ爲シ、政府ハ特定ノ補助金ヲ交付スルコトトセリ。労働者ノ保險料ハ其ノ賃金額ニ依リ之ヲ五級ニ分チ第一級年收三百五十馬克以下ノ者ハ一週十六布ヲ第五級年收千五百馬克以上ノ者ハ一週四十八布ヲ收ム。

佛蘭西ニ於ケル老廢保險ハ、一九一〇年ノ老廢保險法ニ依リテ強制主義ヲ採用スルコトトナレリ。

(四) 失業保險

失業者ノ救済ヲ目的トスルモノニシテ、前三者ト異リ労働ノ機會ヲ失ヒタル者ヲ保護セントスルニアリ。失業保險ハ其ノ性質上労働保險中ニ加フヘキモノナルヤ否ヤニ關シテ學者間ニ多少ノ議論ナキニ非スト雖、其ノ目的ハ労働者ノ扶助ニ外ナラサルヲ以テ茲ニ一言スヘシ。

「ツウキーヂネツク」氏ハ失業保險ニ付述ヘテ曰ク「失業ニシテ當事者ノ個人的事情ニ原因スルモノ又ハ同盟罷業ニ因ルモノノ如キハ労働保險ノ目的トシテ救済スヘキモノニ非ス。何トナレハ保險金庫ノ基礎ヲ危クスルノ結果ヲ來スヘケレハナリ、故ニ労働保險ノ目的トスル失業ハ當事者ノ干與セサル原因ニ出ツルヲ要ス。又失業保險ニ要スル費用ノ負擔者ハ國庫、雇主及労働者ノ三者タルヘシ、何トナレハ失業ノ起ルハ社會組織ニ缺陷アルコトヲ示スモノニシテ、社會組織ノ缺陷ヲ醫スルハ即チ社會ノ責任ナレハナリ。雇主カ資本ヲ利用スルニ當リ單ニ其ノ利益ノ獲得ニノミ熱中シ、労働者ノ利害ヲ顧ミサルカ如キハ失業ノ起ル一大原因ナレハ、雇主モ亦失業保險ノ費用ヲ分擔スヘキモノナリ。労働者ハ失業保險ノ利

益ヲ享受スヘキモノナルカ故ニ相當掛金ヲ出スハ當然ナリト、此ノ言ハ眞ニ失業保險ノ觀念ヲ簡單明瞭ニ言明シタルモノナリ。

此ノ失業保險モ亦老廢保險ト同シク國庫ノ補助ヲ必要トスヘク、從ツテ失業救濟金ノ請求者ニ對シテハ嚴密ナル調査監督ヲ要ス。其ノ種類ニ於テモ之ヲ二種ニ分ツコトヲ得ヘシ。

(1) 強制主義ノ失業保險

此ノ種ノ保險ハ英國ニ於テ一九一一年ノ國民保險法ヲ以テ翌年七月十五日ヨリ始メテ實施セラレタリ。

(2) 任意主義ノ失業保險

此ノ種ノ保險ハ始テ瑞西國(ベルン市)ニ行ハレ、次テ白耳義(ジエント市)獨逸(ケルン市)ライプツヒ市等ニ行ハレ又佛蘭西、諾威、丁抹國ニモ行ハルルニ至レリ。彼ノ歐洲各國ニ於ケル職工組合カ有スル罷業基金、ストライキファンド)ノ如キハ其ノ實質ニ於テハ全ク失業保險ニ酷似スト雖、同盟罷業ノ目的ニノミ供セララルヲ以テ明ニ之ヲ區別セサルヘカラス。北米合衆國ニ於テハ強制的官業保險ヲ

以テ職工ヲ救濟スル等ノ規定ナク、一切各州ノ立法ニ基ク共濟組合ニ一任セリ。以上ハ歐米各國ニ於ケル職工ノ扶助ニ關スル法制ノ大體ナリ。

四 我國ニ於ケル職工ノ救濟制度

我國ニ於テハ政府ニ於テ使役スル職工人夫其ノ他ノ傭人即チ政府ノ使用スル一切ノ勞働者ハ、官役職工人夫扶助令(明治四十年五月十日勅令第百八十六號)ニ依リ、自己ノ重大ナル過失ニ因ルニ非スシテ、業務上傷痍ヲ受ケ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外扶助金ヲ受クルコトヲ得タリ。而シテ特別ノ規定ニ依リ法令ヲ以テ公認セラレ加入ヲ強制セラル、モノハ、鐵道院現業員救濟組合(明治四十年勅令第一二七號)、明治四十一年勅令第三〇五號(改正)及大體ニ於テ之ニ準據シタル專賣局、印刷局等七種ノ共濟組合トス(第九項官立工場ニ於ケル職工ノ扶助参照)

此ノ種ノ組合ニ於テハ單ニ勞働者ノミナラス現業員カ業務上ノ傷痍ヲ受ケタル場合ハ勿論、疾病老衰等ノ場合ニ對シテモ幾分ノ金額ヲ支給セラルルモノ多シ。要之政府ノ使役スル勞働者ハ明治四十年以來業務上ノ傷痍ニ付テハ官役職工人

夫扶助令ニ依リ一般的ニ救済ヲ受ケ、特殊ノ官業ニ従事スルモノハ業務以外ノ死亡、疾病、老衰等ニ際シテモ幾分ノ金額ノ支給ヲ受ケヘキ道ヲ啓カレタリ。

然ルニ一般民業ニ従事スル労働者ニ付テハ如何ト云フニ、鑛業ニ従事スル労働者即チ鑛夫ハ、鑛業法第八十條ノ規定ニ依リテ發セラレタル明治三十八年六月農商務省令第十七號鑛業法施行細則ニ依リテ、業務上ノ負傷、疾病又ハ死亡ニ付テハ鑛業權者ヨリ扶助ヲ受ケ來リシモ、鑛業以外ノ一般工業界ニ於テハ、鐘淵紡績株式會社、富士瓦斯紡績株式會社、三菱造船所等、任意的ニ共濟組合ヲ設ケ其ノ効果ノ稍見ルヘキモノナキニ非サリシト雖固ヨリ法令ニヨル監督ヲ受クルモノニ非ス、又其ノ數亦頗ル少ク、大多數ノ工業労働者ハ只工業主ノ厚意ニヨリテ多少ノ救恤ヲ受クルコトアルノ外、何等秩序アル救済ヲ受クルコトヲ得サルノ有様ナリ。

此ニ於テ工場法ハ第十五條ニ於テ、職工自己ノ重大ナル過失ニ因ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル時ハ、工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシト規定シ、工業主ヲシテ工業労働者ノ業務ニ起因スル災害ニ基ク損害賠償ノ責ニ任セシムルコトヲ明カニシテ、労働者ノ權利ヲ確認シタ

リ。而シテ本條ノ委任ニ基キ施行令ハ前述官役職工人夫扶助令、官業共濟組合及鑛業法施行細則ニ依ル鑛夫ノ扶助ニ關スル規定等ヲ參照シ我國ノ國狀ヲ顧慮シ、扶助ノ種類、金額及其ノ順位等ヲ規定シタリ、而シテ施行令ノ定ムル扶助金額ノ如キ固ヨリ其ノ最低額ヲ以テ十分ナリトスヘキニ非サルヘシト雖、我國ノ現狀ニ照シ亦已ムヲ得サル所ナリ。

惟フニ工場法ハ業務上ノ負傷、疾病並死亡ニ就テハ救済ノ道ヲ設ケタリト雖、職工ノ業務ニ起因セサル疾病、老衰並失職等ニ付テハ未タ何等法令ノ規定アルナシ、民間ノ共濟組合ハ法律上如何ナル位置ニ置クヘキヤ、共濟組合ノ制度ハ必ラスヤ英國及獨逸ニ於ケルカ如ク將來疾病保險ノ中心點タルヘキモノタルヤ疑ヲ容レス。然ルニ世間較モスレハ現行工場法令中工業主カ共濟組合ニ加入スルニ依リテ扶助ヲ免ルルノ規定ナキノ故ヲ以テ共濟組合ノ効果何所ニアリヤト爲シ、折角將ニ發展セントスル組合制度ヲ中止セントスルカ如キ傾向アルハ歎スヘキノ至リナリ。元來職工ノ業務上ノ傷害ニ付テハ何等ノ形式ニ依ルヲ問ハス實質上工業主其ノ損害ヲ填補スヘク、共濟組合ノ眞ノ任務ハ疾病ニ依ル職工ノ困厄ヲ救済

スルニアルコト歐洲諸國ノ實例ニ徴シテ明カナリ、茲ニ特筆シテ讀者ノ一考ヲ煩ハサントス。而シテ尙疾病保險ノ外老廢及失業保險等將來ノ施設ニ俟ツヘキモノ亦頗ル多シ、工場法並施行令ニ於テ共濟組合ニ關スル規定ヲ置カサリシモノハ決シテ其ノ存在ヲ否認スルノ意味ニハ非サルヘシ。我國ニ於テハ共濟組合ノ發達未タ顯著ナラサルト、其ノ組織ノ複雑ニシテ尙十分ノ研究ヲ要スヘキモノアリタルカ爲、法令上之レヲ公認スルコトニ付テハ暫ク他日ノ立法ニ俟ツコトトナシタルニ過キス、必スヤ他日疾病保險ニ關連シ若ハ之ニ先シテ法律上其ノ存在ヲ認メラルルノ時期アルヘキモノト信ス。

職工救濟ニ關スル内外立法ノ主義概ネ斯ノ如シ、以下項ヲ分チテ職工扶助ニ關スル現行法ノ規定ヲ説明スヘシ。

第二項 扶助義務ノ發生

工場法第十五條及施行令第四條ニ依リ工業主カ職工ヲ扶助スヘキ義務ノ發生ニ必要ナル要件左ノ如シ。

(一) 職工カ負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルコト 往時ノ刑法中ニハ負傷トハ

皮膚面ノ異狀及皮下瘀衝ヲ謂ヒ、疾病トハ身體内部ノ機能ノ故障ヲ謂フト定義シ、症狀ノ如何ニ依テ負傷ト疾病トヲ區別セント試ミタリト雖、惟フニ是レ完全ナル定義ト云フヲ得サルヘシ、而シテ現行法令中負傷又ハ疾病ノ定義ヲ掲ケタルモノナキカ如シ。工場法モ亦何等ノ定義ヲ掲クルコトナシト雖、工場法ハ負傷並疾病ニ付テハ之ニ對シテ工業主ヲシテ均シク扶助ノ責ニ任セシムルコトトシ、苟モ業務ニ起因スル以上ハ其ノ間何等ノ差異ヲ設ケサルカ故ニ、負傷ト疾病トヲ如何ニ區別スルヤハ寧ロ解釋上ノ便宜ニシテ實質上何等ノ影響ナカルヘキニ依リ、茲ニハ法令解釋ノ便宜上負傷ト疾病トノ區別ヲ其ノ症狀ニ求メス寧ロ症狀ノ依テ生スル原因ニ之ヲ求メントス。即チ負傷トハ災害即チ豫期セサル出來事ニ依テ生スル身體健康ノ傷害ニシテ、物體ノ墜落ニ依ル打撲傷、機械ニ依ル挫傷、切創等ノ外傷ハ勿論、重量物ノ取扱ニ依テ生スル脱膈、筋違等ノ内傷並災害ヲ目撃シタル爲起リタル神經ノ激動ニ依ルノ傷害等ヲ含ムモ漸次發生スル損傷ヲ含マス、疾病トハ災害即チ豫期セサル出來事ニ依テ生スルニ非スシテ漸次發生スル身體健康ノ傷害ヲ云フモノト解スヘシ。

(二) 負傷、疾病又ハ死亡ハ業務上ノモノナルコト

業務上ノ負傷トハ職工ノ負傷カ業務ニ起因スルノ意ニシテ、即チ負傷ト業務トカ因果ノ關係ヲ以テ聯結セラレ居ル場合ヲ云フ。就業中又ハ工場内ニ於ケル負傷ハ業務上ノ負傷タル場合最モ多カルヘク、從テ施行令中ニ就業中又ハ作業場内ニ於ケル負傷ヲ以テ業務上ノ負傷トナスノ推定規定ヲ設クヘシトノ議論ナキニ非サルヘシト雖、斯ノ如キ推定規定ヲ設クルモ若シ之ヲ法庭ノ問題トナストキハ結局ハ負傷ト業務トノ間ニ於ケル因果關係ノ有無ニ依テ決スルノ外ナキカ故ニ斯ノ如キ推定規定ヲ設ケサリシモノナルヘシ。而シテ因果關係ノ存否ニ付テハ各個ノ場合ニ付一般私法上ノ原理ニ從ヒテ之ヲ決スルノ外ナク、因果關係ニ關スル學說甚多シト雖、所謂適當條件說即チ原因カ結果ノ適當ナル條件タルヲ要スルモノトスルヲ以テ最モ當ヲ得タルモノト信ス。業務ニ起因スルトハ必スシモ作業ノ爲現實ニ勞働ヲ爲スコトニ依ルモノト嚴格ナル意味ニ解スヘカラス。例ヘハ工場ノ作業ノ開始前後又ハ休憩時間中ニ於テ汽罐ノ破裂ニ依リテ負傷シタル場合ノ如キ當然之ヲ業務上ノ負傷トシテ取扱フヘク、又就業時間内ニ於ケル負傷又ハ

疾病ト雖必スシモ業務上ノモノニ非サル場合ナキニ非ス。例ヘハペンキ塗工カ恣ニ機械工場ニ入り他人ノ機械ヲ使用シタル爲負傷シタルカ如キ場合ハ業務上ノ負傷ト云フコトヲ得サルヘク、又業務ト何等ノ關係ナキ前日ノ食傷ニ依ル胃瘵變カ就業時間中ニ發作シタルカ如キ場合亦業務上ノ疾病ニ非サルヘシ。但シ斯ノ如キ場合ニ於テモ工業主カ則第十四條ノ規定ニ依リ醫師ヲシテ診斷又ハ檢案ヲ爲サシムルノ要アルハ勿論ナリ。

疾病カ業務上ノモノナルカ爲ニモ亦疾病カ業務ニ起因スルコト即チ疾病ト業務トノ間ニ因果ノ關係ノ存在ヲ必要トスルコト勿論ナリ。然ルニ疾病ハ其ノ發生原因ノ顯著ナラサルカ爲、疾病カ果シテ業務上ノモノナリヤ否ヤニ付テハ其ノ判定ノ困難ナル場合甚多シ。英國職工補償法ニ於テハ單ニ業務上ノ疾病ト云フカ如キ廣汎ナル文字ヲ使用セス。法律ヲ以テ其ノ種類ヲ限定シ所謂工業病ノミニ限リ(病名ヲ列記ス)業務上ノ負傷ニ準シ賠償ノ責任アルモノトセリ。(補償法第八條)英國ノ如ク疾病ニ對スル共濟組合ノ制度發達シ而カモ最近ニ至リ疾病保險ノ制ヲ設ケタル國ニアリテハ斯ノ如クスルモ敢テ職工ノ保護ニ於テ缺クル所ナカルヘシ。

我國ニ於テハ法令ヲ以テ斯ノ如キ限定的規定ヲ設ケス、苟モ業務ニ起因スル疾病ニ付テハ工業主ヲシテ之ヲ扶助セシムルコトトセリ。是レ明治三十八年以來鑛業法ノ採リ來レル主義ニシテ我國ニ於ケルカ如ク未タ疾病保險ノ制度ノ設ナク、共濟組合ノ效果亦云フニ足ラス、而カモ職工ノ多數カ女工ニシテ且寄宿生活ヲ爲スモノ少カラサルカ如キ特殊ノ事情存スル場合ニ於テハ、誠ニ已ムヲ得サル所ナリト云ハサルヘカラス、業務上ノ疾病ノ範圍ニ付テハ之ヲ確定スルコト固ヨリ不能ナリト雖、之ヲ諸外國ノ立法例ニ徵シ我工場法ノ立法ノ精神ニ考フルニ

- 一 砒素、砒素化合物、水銀、水銀化合物、磷、磷含有物、鉛、鉛化合物、チアン水素酸、チアン化合物其ノ他毒性又ハ劇性料品ヲ取扱フ業務ニ於ケル其ノ中毒諸症及業務ノ過程ニ於テ發生シタル毒性又ハ劇性物質ニ因ル中毒諸症
- 二 業務上使用スル鑛酸、苛性アルカリ、クロール、フルオール、フルオール化合物「クロロム化合物、テール」其ノ他腐蝕性又ハ刺戟性料品ニ因ル腐蝕又ハ潰瘍
- 三 生絲工ノ手指蜂窩織炎、研磨工ノ水疹及業務上使用スル「テール」、「セメント」、チアン化合物等ニ因ル皮膚濕疹

四 業務ニ因ル筋ノ強直痙攣、斷裂、腱鞘炎、關節炎、脫腸

五 高熱物體ノ取扱、刺戟性瓦斯又ハ異物、塵芥ノ如キモノニ因ル結膜炎其ノ他ノ眼病

六 襤褸、獸毛、革皮其ノ他古物ヲ取扱フ業務ニ因ル丹毒、炭疽、ペスト、痘瘡等ノ疾病ハ例外ナク之ヲ業務上ノ疾病ト見做シテ差支ナカルヘシ

七 前各號列記以外ノ疾病ニ付テハ各個ノ場合ニ付キ諸般ノ事情ヲ探究シテ其果シテ業務ニ起因スルヤ否ヤヲ決定スルノ外無カルヘシ、此ノ點ニ付最モ困難ナル問題ヲ生スルノ虞アルハ肺結核並傳染病ニシテ、此ノ種ノ疾病モ亦時ニ業務上ノ疾病タルコトナキニ非サルカ故ニ、工業主ハ此ノ種ノ疾患ノ原因ヲ除去スルト共ニ常ニ職工ノ健康ニ付周到ナル注意ヲ加フルコトヲ要スヘシ。
(肺結核及「ト」ラホ「ム」ニ付テハ第四章第四節第三項參照)

業務上ノ死亡ニ付テハ業務上ノ災害ニ依リ即死シタル場合ハ勿論業務上ノ負傷又ハ疾病ニ因リ死亡シタル場合ヲモ包含ス、而シテ此ノ場合ニ於テハ業務上ノ負傷又ハ疾病ト死亡トノ間ニ因果關係ノ存在ヲ必要トスルコトハ勿論ナリ。

(三) 職工ニ重大ナル過失ナキコト

過失トハ當然爲スヘキ注意ヲ爲スコトヲ怠ルヲ云フ、重大ナル過失トハ著シク注意ヲ用ヒサル場合ヲ云フ、過失ノ有無ハ先ツ客觀的ニ觀察シテ之レヲ判定シ、次ニ各個ノ場合ニ付主觀的ニ當事者カ果シテ相當ノ注意ヲ爲スノ能力ヲ有スルヤ否ヤニ依リ之ヲ決スルコトヲ要スヘシ。工業主カ如何ニ周到ナル注意ヲ以テ危険豫防其ノ他一般工場ニ關スル施設ニ力ヲ盡スモ、工場ニ於ケル一切ノ危険ノ原因ヲ除去スルコトヲ得ルモノニアラス、而シテ職工カ如何ニ細心ノ注意ヲ爲シテ其ノ業務ニ従事スルモ長時間ニ亙リ長年月ヲ通シテ或ハ單調無味ナル勞働ニ従事シ、或ハ粉塵、瓦斯若ハ蒸氣ノ爲空氣ノ汚染セル室内ニ於テ作業シ、或ハ過激ニシテ冒險的ナル勞務ニ服スルニ當リテハ時ニ注意ヲ怠ルコトナキニ非ス、又冒險ヲ敢スルニ非サレハ仕事ノ進行ヲ期シ難キ場合ナキニ非サルヘシ。換言スレハ或ル程度ノ過失ト冒險トハ工業上ニ於ケル已ムヲ得サル凶事トシテ之ヲ認容セサルヘカラス、凡ソ工場ニ於ケル大小ノ災害ニシテ職工ノ過失ニ因ラサルモノハ甚タ稀ナリ、故ニ職工ニ過失アルノ故ヲ以テ工業主ニ扶助ノ義務ナシトセハ職工

扶助ノ法規ハ其ノ效果ノ大半ヲ失ヒ名有ツテ實ナキニ至ルヘシ、是レ諸國ノ災害保險法又ハ職工補償法カ職工ニ重大ナル過失アル場合ノ外其ノ過失ノ有無ヲ問ハス賠償ノ責ニ任スヘキヲ規定セル所以ナリ。殊ニ英國職工補償法ノ如キハ重傷及死亡ノ場合ニ於テハ、假令重大ナル過失若ハ故意アル場合ト雖尙賠償ノ責ニ任スヘシトナシタルカ如キハ如何ニ職工ノ冒險的精神カ工業上缺クヘカラサルモノニシテ、過失ノ避クヘカラサルモノナルカヲ認メタルモノナルコトヲ知ルニ足ルヘシ。

故意 ハ結果ノ發生ヲ許容スル場合ニ存ス、過失ハ如何ニ重大ナリト雖結果ノ發生ヲ許容スルノ意思ヲ存セス、我現行法上當該職工ニ故意アル場合ニ於テハ工業主カ扶助ノ義務ヲ負ハサルコト勿論ナリ、斯ノ如キハ固ヨリ業務上ノモノニ非サレハナリ。

不可抗力 工業主ニ過失ナクシテ發生スル出來事ニシテ其ノ發生ノ原因カ企業ノ業務執行ノ範圍ニ屬セス、且通常生スル事變ヲ超越シテ大ナル勢力ヲ以テ生スルモノヲ云フ。元來職工ノ扶助義務ハ工業主ニ故意又ハ過失アルヲ要件トシ

テ發生スルモノニアラス、工業主ノ故意ノ有無ニ拘ラス扶助セシムルヲ以テ其ノ特徴トス、故ニ不可抗力ノ故ヲ以テ直ニ扶助義務ヲ免ルルモノトナスヲ得ス、但シ此ノ場合ニ於テハ業務ニ起因スルモノト爲シ得サル場合アルヘキハ勿論ナリ、例ヘハ洪水ノ爲工場所在地全部カ范濫シ、爲ニ一般住民ト共ニ工場ニモ死者ヲ生シタルカ如キ場合(工業主ニ過失アル場合又ハ業務ノ爲ニ盡シタル場合ハ別問題トス)ノ如キハ、其ノ死亡ハ業務ニ起因セサルヲ普通トスヘク、反之高所ニ於テ労働スルモノカ落雷ニ打タルルカ如キハ業務上ノ死傷ト爲スヲ要スヘシ。

使用人ノ所爲 工業主ノ使用人カ職工ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テモ職工ニ重大ナル過失ナキトキハ工業主ニ於テ扶助ノ義務ヲ負フ場合アルヘシ、但シ此ノ場合ニ於テモ業務上ノ關聯ヲ有スルコトヲ要スルヤ勿論トス。

職工ノ解雇 扶助ノ義務ハ職工ノ解雇ニ依リテ之ヲ免ルルコトヲ得ス、從テ職工使用中ノ事由ニ關シ解雇後尙扶助義務ヲ發生スル場合アルヘシ(第六項)

發生ノ時期 扶助ノ義務ハ負傷疾病又ハ死亡ノ事實ノ發生ト共ニ發生スルモノト解セサルヘカラス、但シ休業手當ハ休業ヲ開始シタル時ヨリ始マル、獨逸帝國

保險法ハ負傷又ハ疾病ノ場合ニ於テ、療養ニ付テハ負傷又ハ罹病ノ時點ヨリ休業手當ハ休業第四日目ヨリ之ヲ支給スルモノトス、而シテ負傷ノ場合ニ於テハ災害發生ノ時ヨリ十三週間ヲ經過スル時ハ一切ノ扶助料ハ同業組合ノ責任ニ期ス。英國補償法ニ依ル時ハ負傷ニ付テハ補償金ノ支給ハ負傷ノ時點ヨリ始マルモ、休業一週間未滿ノ者ニ付テハ賠償ノ責ヲ負ハス、休業二週間ヲ超エサルモノニ付テハ最初一週間ハ休業手當ヲ給スルニ及ハサルモノトセリ、而シテ業務上ノ疾病ニ付テハ其ノ労働不能開始ノ時點ニ於テ災害ニ罹リタルモノトシテ之ト同様ニ取扱フノ規定ナリ。

第三項 扶助義務ノ性質

扶助義務トハ工場法令ノ規定ニ依リ工場主カ一定ノ事由アル場合其ノ職工又ハ遺族ヲ扶助スヘキ私法上ノ義務ニシテ其ノ實質ハ一種ノ債務タルヤ疑ヲ容レズ、以下扶助義務ト謂ヒ又ハ扶助債務ト謂フモ其ノ意義ヲ異スルノ意ニ非ス。

英獨兩國ニ於ケル労働者補償法ノ沿革殊ニ英國ニ於ケル職工補償法ノ沿革其ノ普通法及工業主責任法トノ關係ニ付テハ已ニ第一項ニ述ヘタルカ如シ。蓋シ

職工補償法ハ工業ノ發達ニ伴ヒ工場災害ノ數ハ年ト共ニ増加スルモ、此等ノ工場災害ハ必スシモ工場主ノ不法行爲ニ基クモノニ非スシテ、普通法ノ損害賠償ノ規定ニ依テ工業主ヲシテ損害ヲ賠償セシムルコト能ハサルニ依リ、普通法ニ對スル特別法トシテ特ニ職工ニ對スル工業主ノ賠償責任ヲ定メタルモノナリ。故ニ英國ニ於ケル職工補償法ハ、其ノ立法ノ精神ハ固ヨリ強者ヲシテ弱者ヲ助ケシムル慈惠主義ト、富ノ分配ノ不權衡ヲ緩和セシメントスル社會政策的立法ナルニ相違ナシト雖、補償法其ノモノハ形式ヨリシテモ又實質ヨリ見ルモ純然タル損害賠償法タルコトハ一點ノ疑ヲ容レサルナリ。翻テ我國工場法ニ依ル扶助ノ性質如何ト云フニ此ノ點ニ關シテハ二說アリ。第一說ハ、實質上ノ見地ヨリシテ工場法第十五條ニ所謂扶助ノ規定ハ一ツノ損害賠償法ニシテ、民法第七百九條ノ例外規定タル特別法ニ外ナラス、是レ法第十五條ノ規定及令第四條乃至二十條ノ規定ニ依リ職工又ハ其ノ遺族カ扶助ヲ請求シ得ルハ常ニ損害ノ存在ヲ前提トシテ行ハルルニ徴シテモ明カナルヘシ云々ト。而シテ第二說ハ形式上ノ見地ヨリシテ工業主ノ扶助義務ハ民法第七百九條ニ所謂損害賠償ノ義務トハ全ク別個ノモノニシ

テ、工場法ナル特別法ニ依ル獨立ノ根據ニ基キテ發生スル獨立ノ債務ナリ云々ト云フニ在リ、而シテ施行令立法ノ當時ニ於テハ後說ニ依リタルモノナリト謂フ。

民法第七百九條ニ依ル損害賠償ト扶助トノ關係 若シ民法上ノ不法行爲ニ基ク損害賠償ノ債務ト扶助ノ債務トカ全ク別個ノ債務ナリトセンカ特別ノ明文ナキ限り工業主ニ不法行爲ノ存スル場合ニ於テハ工業主ハ同一ノ損害ニ對シテ二様ノ賠償ヲ爲ササル可カラス、此ニ於テ令第四條但シ書ヲ以テ扶助ヲ受クヘキ者同一原因ニ付損害賠償ヲ受ケタルトキハ工業主ハ扶助金額ヨリ其ノ金額ヲ控除スルコトヲ得トノ規定ヲ設ケ以テ損害賠償ト扶助トノ重複スルコトナカルヘキコトヲ明ニシタリ。職工カ不法行爲アリタル第三者(例ハハ伍長等)ヨリ損害賠償ヲ受クルモ之カ爲同一原因ニ付工業主ヨリ扶助ヲ受クルコトヲ妨ケス、是レ扶助ト損害賠償トハ獨立別箇ノ債權ナリト解スル當然ノ結果ニシテ本條但シ書ノ趣旨亦工業主ヲシテ二重ノ負擔ヲ免レシトメンスルニ外ナラス。茲ニ所謂原因トハ損害賠償額ヲ積算スルニ當リ其ノ積算ノ根據タル事項ヲ謂フ、詳言スレハ工業主ノ不法行爲例ヘハ職工ヲ負傷セシムルノ目的ヲ以テ機械ニ或ル細工ヲ爲シ、其ノ細工

カ原因ト爲リテ職工カ負傷シ之カ爲一箇月間ノ労働不能ト爲リ、他ノ一箇月ハ労働力半減ノ結果ヲ來シ三箇月間ノ醫療ヲ要シタリトセムニ、工業主ハ此等一切ノ損害即チ(一)労働不能若ハ半減ヨリ生スル損害(二)醫療費支出ノ損害等ニ對シテ賠償額ヲ積算セサルヘカラス、此ノ場合ニ於テ職工側ニ在リテハ民法ニ依ル損害賠償ヲ受クルモ亦或ル事項ニ付テハ民法ノ損害賠償ヲ受ケ他ノ事項ニ付テハ工場法令ニ依ル扶助ヲ受クルモ隨意ナリ。例ヘハ(一)ニ付テハ民法上ノ賠償(二)ニ付テハ令第五條ノ扶助ヲ受クルコトヲ得ルナリ、此ノ場合ニ於テ工業主ハ(二)ノ原因ニ對スル扶助金ヲ損害賠償積算額ヨリ控除スルコトヲ得ルモノトス、而シテ職工カ賠償ヲ受クルニ先チテ扶助ヲ受ケタルトキハ如何、特別ノ明文ナシト雖既ニ扶助ヲ受ケ之ニ依リテ損害ノ填補セラレタル以上其ノ填補セラレタル損害ニ對シテハ賠償ヲ爲スノ要ナカルヘキハ殆ント明文ヲ要セサルモノト解セサルヘカラス。從テ工業主カ同一ノ負傷ニ關シ損害賠償トシテ慰藉料ヲ支拂フモ扶助料トシテ支拂フヘキ治療費中ヨリ之ヲ控除スルコトヲ得ス蓋シ慰藉料ト治療費ハ全然給付ノ目的ヲ異ニシ從テ兩者ハ同一原因ニ付支給スルモノニ非サルナリ。

尙損害賠償ト扶助トノ異同ヲ表示スレハ左ノ如シ。

工場法令ニ依ル扶助債權

民法第七百九條ニ依ル損害賠償債權

(一) 工業主ニ故意又ハ過失アルコトヲ要セス

(一) 工業主ニ故意又ハ過失アルコトヲ要ス

(二) 權利侵害アルコトヲ要セス

(二) 權利侵害アルコトヲ要ス

(三) 損害アルコトヲ要ス

(三) 損害アルコトヲ要ス

(四) 職工ニ過失アルモ扶助金ヲ減セラ

(四) 過失アルトキハ賠償金額ヲ減セラ

ルルコトナシ但シ重大ナル過失アルトキハ扶助ヲ受ケサルコトアリ

(五) 工業主ノ使用人ノ行爲ニ對シテハ工業主カ其ノ選任監督ニ對シ相當ノ注意ヲ爲シタル時ハ請求權ナシ

(五) 工業主ノ使用人ノ行爲ニ對シテモ請求シ得

(六) 金額ハ豫メ制限セララルコトナシ(特約アル場合ヲ除ク)

(六) 金額カ施行令(第五條乃至第九條第十、四條第十六條第十九條)ニ依リ制限セララル

(七) 請求權ハ民法第七百二十四條ノ時

(七) 請求權カ短期期間ニ依リ消滅スル

(七) 請求權ハ民法第七百二十四條ノ時

コトアリ(令第十條)

效ニ依リ消滅ス

扶助料ノ金額ハ扶助規則ニ依リテ豫メ一定セラレ其ノ手續等モ簡易ナルカ故ニ通常ノ場合ニ於テハ扶助令ノ規定ニ依リ扶助ヲ受クルヲ便トス然レトモ工業主ニ不法行爲アル場合ニ於テハ損害ノ極メテ重大ナルトキト雖扶助ノ金額ハ扶助規則ニ依リテ一定シ且扶助ノ請求權ハ短期ノ豫定期間ニ俟リテ消滅スルカ故ニ斯ノ如キ場合ハ民法ノ規定ニ依リ損害賠償ヲ請求スルヲ便トスヘシ。

第四項 扶助ノ種類及範圍

一 扶助料ノ種類及範圍

扶助ノ種類並範圍ハ令第五條乃至第十條ノ規定スル所ナリ左ニ之ヲ略說セム。
 (一) 療養扶助料 令第四條及第五條ハ職工業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ工業主ハ其ノ費用ヲ以テ療養ヲ施シ又ハ療養ニ必要ナル費用ヲ負擔スヘシト規定セリ本條ノ目的トスル所ハ畢竟職工ノ身體健康ニ對スル損傷ヲ出來得ル限リ舊態ニ回復セシムルノ義務ヲ工業主ニ負ハシメタルモノニ外ナラス。而シテ工業主ハ工場所屬ノ病院若ハ其ノ依囑セル醫師ヲシテ療養ヲ施サシムルト又

ハ療養ニ必要ナル費用ヲ職工ニ支給シテ自ラ療養ヲ爲サシムルトハ其ノ自由タリ然レトモ債務ノ履行ハ信義ニ從ヒテ誠實ニ之ヲ爲スヲ要スルカ故ニ不適當ナル方法ニ依テ療養ヲ施スコトヲ得サルヤ勿論ナリ而シテ萬一療養ノ方法ノ適否ニ付諍議ヲ生スルトキハ或ハ地方長官ノ調停ニ依リ又ハ終極ニ於テハ裁判ニ依テ之ヲ決スルノ外ナキモ一般ノ場合ニ於テハ常識ヲ基礎トシテ之カ判定ニ苦マサルヘシ例ヘハ眼科専門ノ醫師ヲシテ骨折ノ治療ヲ擔任セシムル如キハ明ニ不適當ノ方法タルヤ論ナシ。療養ニ必要ナル費用云々中必要ノ意義モ若シ之ニ關シ爭アルトキハ結局裁判上ニ於テ決スルノ外ナシト雖苟モ療養ニ必要ト云フ以上ハ必スシモ診察投藥等治療ニ直接不可缺モノノミニ限ラサルモノト解セサルヘカラス但シ普通ノ觀念ニ於テ病者トシテ贅澤ノ程度ニ入ルヘキモノハ之ヲ包含セシメスシテ差支ナキハ勿論ナリ。

療養ノ義務ハ負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキヨリ始マリ其ノ治療ノ完成スルニ至ツテ已ムヲ原則トスレトモ若シ療養久シキニ亘ルモ尙治療セサル場合ニ於テハ永久的ニ工業主ヲシテ之カ責ニ任セシムルハ聊カ酷ニ失スルヲ以テ令第十

四條ハ療養開始後三箇年ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治癒セサルモノニ對シテハ、工業主ハ賃金百七十日分以上ノ扶助料ヲ支給シテ以後一切ノ扶助ヲ爲ササルコトヲ得セシメタリ、尤モ此ノ點ニ付テハ將來尙考究ヲ要スヘキモノアルヘシ、英獨等ノ制度ニ付テハ本節第一項ヲ參照スヘシ。

負傷又ハ疾病カ如何ナル程度ニ達シタルモノヲ以テ治癒シタルモノト云フカハ固ヨリ困難ナル問題ナリト雖、大體ニ於テ「治癒」トハ負傷又ハ症狀カ安定トナリ、現今醫術ノ範圍内ニ於テハ此ノ上治療ヲ施スモ機能ヲ回復スルノ望ナク而カモ症狀進行ノ虞ナキニ至レルコトヲ指稱スト解シ大過ナカルヘシト信ス。

(二) 休業扶助料 令第六條ハ職工療養ノ爲勞務ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金ヲ受ケサルトキハ、工業主ハ職工ノ療養中一日ニ付賃金二分ノ一以上ノ扶助料ヲ支給スヘシ、但シ其ノ支給引續キ三月以上ニ亘リタルトキハ其ノ後ノ支給額ヲ賃金三分ノ一迄ニ減スルコトヲ得ト規定セリ。

賃金ヲ受ケサルトキトハ當該工業主ヨリノミナラス一切ノ他人ヨリ賃金ヲ受クルコトナキ場合ヲ云フ、而シテ賃金ヲ受ケサル事實ハ負傷又ハ疾病ニ起因スル

コトヲ要スルト共ニ療養ノ爲ナルコトヲ要ス。故ニ治癒シタル後ハ他ノ原因ニ依リ勞働ニ服スルコト能ハサルトキト雖扶助ヲ受クルノ權利ナキヤ勿論ナリ、而シテ療養ノ爲賃金ヲ受ケサルトキハ工場ノ休日ニ相當スル日ニ對シテモ亦扶助料ヲ給スヘキコト言フ俟タズ、又一旦生シタル工業主ノ扶助義務ハ其ノ事業ノ廢止又ハ變更ニ依リテ何等ノ影響ヲ受クルモノニ非サルナリ、

職工カ全然勞働ニ服スル能ハサル場合ニ於テハ別段ノ疑義ヲ生セスト雖、一部分ノ勞働不能ノ状態ニ在リ現ニ多少ノ賃金ヲ受ケ、若ハ其ノ健康ニ適當ナル職業アルニ拘ハラズ勞働セサル場合ニ付テハ解釋上疑義ヲ生スルコトヲ免レス、英獨ノ法律ニハ斯ノ如キ場合ニ關シ明文アリ。【註】 我國ニ於テハ何等ノ明文ナシト雖現ニ他ノ職業ニ依リ多少ノ賃金ヲ得ル場合ニ於テハ、其ノ賃金ト扶助料算定ノ基礎タル賃金トノ差額ヲ超ユルコトヲ要セサルヘク、又他ニ職工ノ健康其ノ他ニ適當ナル職業アリテ、此ノ職業ニ従事スレハ相當收入アルヘキニモ拘ラス、職工カ故意ニ其ノ職業ニ従事セサル場合ニ於テハ勞働不能ト謂ヒ得サルヘク、此ノ場合ニ於テモ其ノ職業ニ依リテ得ヘキ賃金ト扶助料算定ノ基礎タル賃金トノ差額ヲ

超過スルヲ要セサルモノト解シ差支ナカルヘント信ス。尤モ此ノ解釋ニ對シテハ文理解釋ヲ基礎トセル反對説ナキニ非ス、曰ク職工ノ多少共勞働可能ノ状態ニ在リテ或ル金額ノ賃金ヲ得ル場合ニ於テハ、令ニ所謂勞務ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金ヲ受ケサル場合ニ該當セルヲ以テ工業主ニ於テ何等法律上ノ義務ナシト解スヘキモノトス、又職工ノ健康上不適當ニ非サル職業アルニ拘ラス職工ハ故意ニ之ヲ忌避スルカ如キ場合ニ於テハ令ニ所謂勞務ニ服スルコト能ハサルモノニ非サルヲ以テ工業主ニ於テ何等扶助ヲ給スルノ義務ナシ云々ト云フニ在リ。後段ノ解釋ハ兎モ角前段ノ解釋ハ職工保護ノ上ニ於テ甚タ酷薄ノ嫌アルノミナラス多少共勞働可能ノ職工ヲシテ強テ不能ヲ裝ハシムルカ如キ弊害ヲ生シ易シ、旁以テ法令ノ精神ニ副フタル解釋ト爲スヲ得サルカ如シ、然レトモ余輩ハ茲ニ最後ノ斷案ヲ下スコトヲ避ケ他日ノ研究ニ留保スルト共ニ、法令改正ノ時機ニ於テ一層最前ニ陳ヘタル趣旨ヲ明確ナラシムルコトノ希望ヲ陳フルニ止メムトス。

休業扶助料ノ金額ハ支給開始ノ當初ハ給料日額二分ノ一以上トシ、引續キ三箇月以上支給シタルトキハ三分ノ一以上迄ニ減額スルコトヲ得、即チ扶助料ヲ三分

ノ一以上迄ニ減額シ得ル場合ハ、二分ノ一以上ノ扶助料ヲ引續キ三箇月以上支給シタル場合ニ限ルヲ以テ、初二箇月間扶助料ヲ支給シ一旦其ノ支給ヲ中止シタルトキハ更ニ引續キ三箇月以上日額二分ノ一以上ヲ支給スルニ非サレハ其ノ支給額ヲ減少スルコトヲ得サルナリ。

令第六條ノ扶助料支給ノ義務ハ、職工カ療養ノ爲勞働ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金ヲ受ケサル期間ノ繼續スル期間、幾年月ニ互ルモ之ヲ負擔スヘキモノナルモ、斯クテハ工業主ノ義務ヲ負擔スル期間餘リニ長キニ失シ工業主ニ酷ナル場合ヲ生スヘケレハ、令第十四條ハ療養開始後三年ノ期間ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治癒セサルトキハ、工業主ハ一時ニ賃金百七十日分以上ヲ支給シ以後一切ノ扶助義務ヲ免ルルコトヲ得ト規定シタリ、從テ此ノ場合ニ於テハ令第六條ノ義務ハ勿論第五條ノ義務ヲモ免ルルモノトス、換言スレハ令第五條ノ扶助ノ外休業扶助料ヲ支給スルモノニ至リテハ此ノ兩者ヲ一時ニ廢止スルコトヲ得ヘク、又令第六條ノ休業扶助料ハ之ヲ受ケサルモ令第五條ノ扶助ハ之ヲ受タルモノニ在リテハ其ノ扶助ヲ受クルノ權利ヲモ失フモノトス。

【註】

英國職工補償法附則第一編第三條 每週支給スル休業扶助料ノ額ヲ定ムル場合ニ於テ職工カ一部勞働不能者ナルトキハ工業主ノ支給スル扶助料ハ罹災前ノ每週ノ平均賃金ト罹災後ニ於テ職工カ現ニ受クル每週ノ平均賃金又ハ相當ナル職業ニ依リ收得シ得ヘキ平均賃金トノ差額ノ二分ノ一ヲ超ユルコトヲ要セス

獨逸帝國保險法第五百五十九條 勞働不能ノ罹災者ニ支給スル定期金ハ罹災者カ全部勞働不能ナルトキハ第五百六十三條乃至第五百七十條ノ規定ニ從ヒ罹災者ノ年收ヲ基礎トシテ其ノ三分ノ二ヲ支給シ罹災者カ一部勞働不能ナルトキハ全部不能ノ場合ノ定期金中勞働缺損部分ニ相當スル部分ヲ支給スヘシ

(三) 身體障害扶助料 令第七條ニ曰ク職工ノ負傷又ハ疾病治療シタル時ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スル程度ノ身體障害ヲ存スルトキハ工業主ハ左ニ掲クル區別ニ依リ扶助料ヲ支給スヘシ。

- 一 終身自用ヲ辨スルコト能ハサルモノ 賃金百七十日分以上
- 二 終身勞務ニ服スルコト能ハサルモノ 賃金百五十日分以上
- 三 從來ノ勞務ニ服スルコト能ハサルモノ、健康舊ニ復スルコト能ハサルモノ又ハ女子ノ外貌ニ醜痕ヲ殘シタルモノ 賃金百日分以上
- 四 身體ヲ傷害シ舊ニ復スルコト能ハスト雖引續キ從來ノ勞務ニ服スルコトヲ得ルモノ 賃金三十日分以上

本條ハ官役職工人夫扶助令及鑛業法第八十條ニ基ク鑛夫ノ扶助ニ關スル同法施行細則第六十七條ノ規程並鐵道院其ノ他ノ官業ニ於ケル共濟組合ノ規定等ヲ參酌シテ立案セラレタルモノニシテ、身體障害ノ程度ニ關スル規定ハ官役職工人夫扶助令ト殆ント同様ニシテ鐵道院共濟組合ノ規定ニ比スレハ遙カニ抽象的ナリ、立案ニ際シ之ヲ具體的ニ規定スルノ可否ニ付テハ相當論議ノ存シタル所ナルモ、結局具體的ニ記載スルモ傷害ノ程度ヲ明確ナラシムルコト困難ニシテ寧ロ抽象的ノ標準ヲ掲ケ各個ノ場合ニ應シテ適宜ニ判定スルノ勝レルニ如カストノ主義ニ據リ斯ノ如キ規定ヲ設クルニ至リタルモノナリト謂フ。(第九項參照)

本條ニ依ル身體障害扶助料ハ負傷又ハ疾病ノ治癒シタル場合ニ於テ之ヲ支給スヘキモノトス。

英獨ノ立法例ニ於テハ傷害ノ程度ハ法律ニ於テハ只全部不能及一部不能ニ區別スルノ外其ノ程度ニ關スル細則ヲ設ケス而シテ獨逸ニ於テハ「ケリীগ」教授ノ研究ニ依リ取扱上大凡左ノ分類ニ從フト云フ。固ヨリ此ノ標準モ亦獨逸ニ於テモ彼是批評ヲ免レサルモノニシテ之ヲ以テ直ニ我現行法ニ依ル扶助ノ範圍ノ決定ニ引用スルコトヲ得サルヘシト雖參考ノ爲左ニ之ヲ掲クルコトトセリ。

身體傷害ニ因スル勞働率減退ノ割合(ケリীগ) (百分率)

兩眼ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	一眼ヲ失ヒタル場合	二五、一五〇、
兩腕ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	一上膊以下ヲ失ヒタル場合	七〇、一七五、
兩手掌ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	右手掌ヲ失ヒタル場合	六〇、一七五、
兩脚ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	左手掌ヲ失ヒタル場合	五〇、一六六、
兩足ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	右中指ヲ失ヒタル場合	二五、一三〇、
一手一腳(又ハ一足)ヲ失ヒタル場合	一〇〇、	右示指ヲ失ヒタル場合	一〇、一二〇、
		右中指ヲ失ヒタル場合	〇、一二〇、

二指以上ヲ失ヒタル場合	二五、一五〇、	右環指ヲ失ヒタル場合	〇、一二〇、
一腳ヲ失ヒタル場合	五〇、一七〇、	右小指ヲ失ヒタル場合	〇、一五、
一足を失ヒタル場合	五〇、	左環指ヲ失ヒタル場合	二〇、一三〇、
右踵趾を失ヒタル場合	〇、一五、	左示指ヲ失ヒタル場合	一〇、一二〇、
左踵趾ヲ失ヒタル場合	〇、一〇、	左中指ヲ失ヒタル場合	〇、一二〇、
二趾以上ヲ失ヒタル場合	一五、一三〇、	左環指ヲ失ヒタル場合	〇、一五、
鼠蹊股兒尼亞	一〇、一二〇、	左小指を失ヒタル場合	〇、一五、

英獨兩國共假令負傷ハ治癒スト雖尙全部又ハ一部分勞働不能ナル者ニ對シテハ其ノ程度ニ應シ原則トシテ引續キ扶助スヘキモノトス。英國ニ於テハ定期金ノ四分ノ三ニ相當スル政府ノ年金證書ヲ購入スルニ足ルヘキ一時金ヲ支給シタル場合、獨逸ニ於テハ定期金ノ年額六十馬克以下ナルトキハ聯邦參議院ノ定ムル利率ニ依リ、定期金ニ相當スル利子ヲ生スル一時金(Abschlag)ヲ支給シテ定期金ノ廢止ヲ爲スコトヲ得ル等特別ノ場合ニ限り定期金ノ廢止ヲ許スモノニシテ、本條ノ如ク療養中ニ限り又ハ小額ノ一時金ヲ以テ定期金ノ支給ヲ止ムルコトハ之ヲ

認容セサルナリ此ノ點ハ今後ノ改正ノ際特ニ攻究スヘキ事項ナルヘシ。

(四)遺族扶助料 令第八條ハ職工死亡シタルトキハ工業主ハ遺族ニ賃金百七十日分以上ノ遺族扶助料ヲ支給スヘシト規定セリ故ニ職工カ業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リ其ノ結果直ニ又ハ遂ニ死ニ至リタル場合ニ於テハ療養扶助料、休業扶助料ヲ與ヘタルトキト雖其ノ以外ニ於テ更ニ遺族扶助料ヲ支給スルヲ要ス、又一旦治療シ身體障害扶助料ヲ支給シタル者ニ付テモ解雇前ニ再發シ死亡シタル場合ハ更ニ遺族扶助料ヲ支給スルコトヲ要ス。(令第十二條第二號)但シ令第十四條ノ規定ニ依リ療養開始後三年ヲ經過シタル場合一時ニ賃金百七十日分以上ノ扶助料ヲ支給シ扶助義務ヲ滌除シタル場合ハ此ノ限ニ在ラサルコト勿論ナリ。

(五)葬祭料 職工業務上ノ負傷又ハ疾病ニ因リテ死亡シタルトキハ工業主ハ令第九條ノ規定ニ依リ葬祭ヲ行フ遺族ニ十圓以上ノ葬祭料ヲ支給セサルヘカラス、葬祭ヲ行フ遺族ナキ場合ハ之ヲ如何ニスヘキヤ友人其ノ他ノ葬祭ヲ行フ他人ニ對シテ葬祭料ヲ支給スルノ義務アリヤ解釋トシテハ義務ナキモノト云ハサルヘカラス、勅令案審議ノ當時ニ於テハ遺族ニ非サルモノト雖葬祭料ノ支給ヲ受ケシ

ムルヲ可トスルノ説ナキニ非サリシモ、斯クテハ法第十五條カ本人又ハ其ノ遺族(第五項參照)ノ扶助ヲ命シタルニ對シ、安當ヲ失スルノ嫌アルカ爲遂ニ斯ノ如キ規定ヲ設ケサルコトト爲シタリト聞ク。

(六)集合扶助料 令第十四條ニ依レハ負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルニ依リ扶助ヲ受クル職工療養開始後三年ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治療セサルトキハ工業主ハ賃金百七十日分以上ノ扶助料ヲ支給シ、以後本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得ルモノトス、此ノ規定カ令第七條ニ依ル身體障害扶助料ト異ル所ハ、未ダ治愈セサルモ療養三年ニ及フ者ニ對シテハ一時金ヲ支給シ扶助ヲ打切ルモノニシテ、第七條ハ單ニ休業扶助料中斷ノ方法タルニ止マルモ、本條ノ規定ハ一切ノ扶助ヲ一時的ノモノニ集合シ、將來ニ向テ扶助義務ヲ消滅セシムルノ效果アルモノトス、而シテ療養開始ノ時點ハ療養カ間斷ナク繼續スル場合ニ於テハ何等ノ疑ナシト雖療養カ中斷スル場合ニ於テハ最初ノ療養開始ノ時點ヲ指サヤ、新ナル療養開始ノ時點ヲ指サヤ多少ノ疑ナキニ非スト雖三年ナル期間ハ工業主ノ扶助義務ノ除斥期間ニシテ、始メテ療養ヲ開始シタル時點ヨリ起算スヘキモノト解スルヲ

至當トス。

二 扶助料算出ノ標準 令第六條乃至第八條及第十四條ノ規定ニ依ル扶助料算出ノ標準トスヘキ賃金ニ付テハ令第十六條ハ左ノ如ク規定セリ。

一定額ニ依リ賃金ヲ定ムル場合ニ於テハ其ノ賃金ノ額

二 稼高又ハ就業時間ニ依リ賃金ヲ定ムル場合ニ於テハ疾病ニ在リテハ、診斷ニ據ル發病ノ日ヲ除キ、發病ノ日明ナラサルトキハ診斷前七日ヲ除キ、負傷又ハ即死ニ在リテハ事故發生ノ日ヲ除キ、其ノ前就業三十日分ノ賃金ノ平均額但

シ就業三十日ニ滿タサルトキハ其ノ賃金ノ平均額トス

三 前二號ノ規定ニ依リテ金額ヲ算出スルコトヲ得サル場合ニ於テハ扶助規則

ニ於テ定ムル金額、但シ扶助規則ニ定ナキトキハ地方長官之ヲ定ム

而シテ令第十七條ハ前條第一號又ハ第二號ノ規定ニ依リ金額ヲ算出スル場合ニ於テ工業主カ食事其ノ他ノ給與ヲ支給スルトキハ其ノ價額ハ之ヲ金額中ニ加算スト規定セリ、之ヲ要スルニ諸工場ニ於ケル賃金支拂ノ方法ハ頗ル雜多ニシテ之ニ關シ一々規定シ盡ス能ハスト雖、工業主カ職工ニ與フル食事其ノ他ノ給與ニ

シテ、苟モ賃金ノ一部ヲ組成スルモノハ之ヲ賃金中ニ加算セシムヘキモノトス、尙之ヲ説明スレハ左ノ如シ。

就業三十日分トハ現實ニ就業セル日數ノミニ依リテ計算スヘキヤ、又ハ休日ヲ此ノ日數中ニ算入スヘキヤ、立法論トシテハ休日ヲモ算入スルヲ可トスルノ議論ナキニ非サルヘシト雖、現行法ノ解釋トシテハ現實ニ就業シタル日數ト解スルノ外ナカルヘシ。一日交代ニ二十四時間宛就業スル者ニ付テハ明文ナク、稍疑ヲ存スルモ常識ニ依リ當番日ト非番日トヲ併セテ就業日中ニ加算シテ差支ナカルヘシト信ス。尙三十日間ノミノ平均ヲ以テシテハ賃金ノ變動ニ原因シテ扶助料ノ高低甚シカルヘキカ故ニ長期ニ互ル平均額ヲ以テスヘシトノ說ナキニ非サレトモ、我國ノ現狀トシテハ餘リニ長期ニ涉ラシムルハ却ツテ精確ヲ失スルノ虞アルヲ以テ斯ノ如ク短期ノ平均額ニ依ルコトト爲シタルモノナリト謂フ。

令第十六條第三號ニ所謂前二號ニ依リテ金額ヲ算出スルコトヲ得サル場合トハ、例ヘハ御目見ノ期間又ハ雇入ノ當初賃金ヲ支給セス又ハ賃金ノ定メナキ場合等ヲ云フモノニシテ、斯ノ如キ場合ニ於テ如何ニシテ扶助金額ヲ算出スヘキヤハ

可成扶助規則中ニ之ヲ規定スヘキモノトス。而シテ扶助規則中ニ若シ其ノ規定ナキトキハ地方長官ニ於テ當該工場ニ於ケル職工ノ收入特ニ其ノ職工ト略同一ノ技倆ヲ有スル他ノ職工ノ所得等ニ批准ヲ採リテ賃金額ヲ認定スル等適宜ノ方法ニ依リ扶助金額ヲ定ムヘキモノトス。

食事其ノ他ノ給與トハ食事ハ勿論時間拂又ハ出來高拂制度ニ於ケル歩増精勤賞與勤勉賞與勤績賞與成功賞與利益分配制度ニ依ル配當金其ノ他益暮ニ與フル定期的ノ賞與ト雖苟モ賃金ノ一部タルノ性質ヲ有スルモノ(單ニ工業主カ與フル任意ノ恩惠ニ非サルノ意)ハ凡テ之ヲ包含スルモノトス。

尙定額ニ依リ賃金ヲ定メタル場合又ハ工業主カ給與ヲ爲ス場合ニ於テ其ノ日額ノ算出方法ニ付契約又ハ慣習無キ場合ニ於テ年ヲ以テ定メタルトキハ三百六十分シ月ヲ以テ定メタルトキハ三十分シテ一日ノ賃金又ハ給與ヲ定ムヘキコトハ則第十五條ニ於テ之ヲ規定セリ。

第五項 扶助ノ支給

一 扶助義務ノ主體 扶助義務ノ主體ハ工業主ナリ工場管理人ヲ置ク場合ト雖

扶助ニ付テハ管理人ハ何等ノ責ニ任セス(法第十九條第一項但書)工業主カ直接ニ職工ヲ使用スル場合ニ於テハ扶助義務ノ主體ナルコトハ疑ヲ容レスト雖請負ノ場合ニ於テハ往々ニシテ疑義ヲ生スルコトナキニ非ス。例ヘハ甲工業主カ乙工業主ヲシテ自己ノ工場内ニ於テ仕事ヲ請負ハシメタルカ如キ場合ニ於テハ乙ノ連レ來リタル職工丙ハ甲ノ職工ト見ルヘキヤ又ハ乙ノ職工ト見ルヘキヤニ付疑義ヲ生スヘシ此ノコトニ付テハ前ニ職工ノ觀念ニ關シテ述タルカ如ク甲ト丙トノ間ニ於ケル雇傭關係ノ有無如何ヲ問ハス丙カ甲ノ工場内ニ於テ甲ノ工場ノ主タル作業又ハ之ニ關係アル作業ニ付勞働ニ従事スル以上ハ甲ノ職工ナリト解セサルヘカラス但シ工場ノ作業ト何等ノ關係ナキ作業例ヘハ工場ノ建築ヲ請負ヒタルカ如キ場合ハ此ノ限ニ在ラサルコト勿論ナリ。英國ノ補償法ハ此ノ點ニ關シ請負關係(Sub-contracting)ト稱シ工業主(甲)請負者(乙)及請負者ノ職工(丙)間ノ關係ニ付テハ甲ハ丙ニ對シテ補償ノ責ニ任スルト共ニ乙ニ對シテ求償權ヲ行フヲ得ルコトトシ丙ハ甲乙何レニ對シテモ其ノ選擇ニ依テ補償ヲ請求シ得ルコトト定メタリ蓋シ當然ノ事理ナリト云フヘシ此ノ點ニ付我工場法令ニモ上述ノ精神ヲ明ニスル爲條

文ヲ設クルコトヲ希望セサルヲ得ス。

次ニ職工カ時ヲ異ニシテ順次數多ノ工業主ニ使用セラレ、各工場ニ於ケル就業カ共同ノ原因トナリテ遂ニ業務上ノ疾病ニ罹リタル場合ニ於テハ何レノ工業主カ扶助ノ義務ヲ負ヘキヤノ問題ニ付一言スヘシ、我施行令ハ此ノ點ニ付何等ノ明文ヲ設ケス、然レトモ英國補償法ハ其ノ疾病ニ付最後ニ原因ヲ與ヘタル甲工業主カ賠償ノ責ニ任スヘキモノトシ、但シ解雇後一箇年ヲ經過シタルトキハ此ノ限ニ在ラストノ趣意ヲ規定セリ、而シテ此ノ一箇年以内ニ職工カ他ノ乙工業主ノ工場ニ於テ就業シタルコトカ其ノ疾病ノ發生ノ原因ノ一部ヲ成ス場合ニ於テハ、乙工業主ハ賠償ヲ爲シタル甲工業主ニ對シテ相當ノ金額ヲ補償スヘキコトト爲リ居レリ。

案スルニ、扶助ハ不法行爲ニ因ル損害賠償ニ非サルカ故ニ、特別ノ場合トシテ數人ノ工業主ニ共同ノ不法行爲アリタルニ因リ民法第七百十九條ニ依リ連帶シテ債務ヲ負フ場合ハ別問題トシ民法第七百十九條ニ依ル連帶債務ト爲ルモノニ非ス、又數人ノ工業主ハ結果ノ發生ニ協力シタルノ事實アルヲ以テ、所謂不真正連帶

債務ニモ非サルナリ。果シテ然ラハ民法第四百二十七條及第四百二十八條ノ規定ニ準シ、給付ノ可分ナルモノ即チ療養費以下一切、全額給付ヲ目的トスル扶助料ハ、可分債務トシテ各工業主カ平等ノ割合ニ以テ負擔スヘク、工業主カ施療ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ性質不可分ナルカ故ニ、施療ヲ施ス工業主カ其ノ全部ヲ負擔シ他ノ工業主ニ對シ其ノ負擔部分ニ付求償權ヲ行フコトヲ得ルモノト解スヘシ。但シ令第十五條ノ規定ニ依リ扶助義務ヲ免除セラレタル工業主ハ共同ノ原因ヲ與ヘタルノ事實アルモ扶助ノ義務ヲ負フノ事實ナキカ故ニ共同債務者ニ非サルモノト解セサルヘカラス。

上述ノ解釋ハ理論上職工ニトリテ一大不利益アルヲ免レス、即チ可分債權ナルトキハ各工業主ニ對シ平等ノ割合ヲ以テスルニ非サレハ權利ヲ行使スルコトヲ得サルコト是レナリ、然レトモ事實ニ於テハ果シテ他ノ工業主ノ與ヘタル原因カ終局ノ結果ヲ協助シタリヤ否ヤハ、總テ最後ニ職工ヲ使用シタル工業主之ヲ立證スルコトヲ要スルヲ以テ、事實ニ於テハ最後ノ工業主其ノ全責任ヲ負フコト多カルヘク職工ニトリテハ理論上想像シ得ルカ如キ不利益ナカルヘシ、然レトモ余輩

ハ他日法令改正ノ機ニ於テハ立法論トシテ債務者連帶制ヲ採用セラレンコトヲ
要望セサルヲ得ス。

尙各獨立シタル數人ノ工業主カ同時ニ同一職工ヲ使用シタル場合ニ付テモ上
述ニ準シ之ヲ解スヘシ。

以上説述スル所一旦本問題ヲ解釋シ得タルカ如キモ尙之ニ對シテハ多少ノ議
論ヲ容ルルノ餘地ナキニ非ス、即チ獨立シタル扶助ヲ爲スノ程度ニ達セサル健康
被害ヲ原因シタル工場ノ工業主カ、遇々他ノ工業主ニ於テ同一職工ヲ使用シタル
ノ事實アルニ依リテ新タナル責ニ任スルニ至ルノ點是レナリ、然レトモ斯ノ如キ
工業主ニハ全然義務ナキモノトスレハ職工ノ扶助ヲ受クルノ權利ハ根本ニ於テ
危殆ニ陥ル場合ヲ生スヘク、斯ノ如キハ恐ラク法令ノ精神ニ非サルヘキヲ以テ、職
工權利本位主義ヲ以テ解釋ヲ下スヘキモノト信ス。

尙參考ノ爲左ニ他ノ解釋論ヲ掲ク、曰ク。

前工業主ノ工場ニ於ケル「工業被害」ノ程度ニシテ單ニ疾病ヲ發生セシムヘキ素
質ヲ作り出セルニ過キササル場合、即チ獨立シテ扶助ヲ給スルノ程度ニ達セサルモ

ノナルトキハ、終ニ疾病ニ罹ラシムル迄ニ、工業被害ノ程度ヲ高メタル工場ノ工業
主ノミカ責ニ任スヘキナリ、之ニ反シ既ニ前工業主ノ使用中ニ獨立扶助ノ目的タ
ルヘキ丈ノ疾病ノ原因ヲ存シ、後ノ工業主ノ使用中ニ發病セルニ過キサルトキハ
前工業主ノミ其ノ責ニ任スヘキナリ。此ノ見解ヲ生スル所以ハ若シ工業主使用
中ニ疾病ヲ發生セシムヘキ素質ヲ造り出スモ、解雇後同一事業ニ從事セサル結果
罹病ニ至ラサルトキハ前工業主ニ責任ナキコト勿論ナルヘシ、又工業主カ本來罹
病ノ素質ヲ有スル職工ヲ使用シ、容易ニ業務上ノ疾病ニ罹ルニ至ルトキハ責任ヲ
免レサルヘキニ鑑ミテ然ルモノトス。尙之ヲ刑法上ノ責任問題ニ比例スルトキ
ハ甲乙ニ毒物ヲ飲用セシメタルモ死亡ニ至ラス、然ルニ後丙同一毒物ヲ乙ニ飲用
セシメタルニ乙ハ甲ノ行爲ノ結果其ノ毒物ニ耐、ユサル體質トナリ居リタル爲容
易ニ死亡セリ、此ノ場合ニ於テ乙ノ死亡ニ付テハ丙ノミカ責ヲ負フヘキモノタル
コト疑ナシ、甲ハ唯乙ニ對シ其ノ體質ヲ弱メタルコトニ付責ヲ負フヘキニ止マル
ヘシ云々。

此ノ説ハ次ノ如キ弱點ヲ有ス即チ今假リニ扶助ヲ要スル最低程度ノ疾病ヲ「十」

ト定ムルトキハ、前工業主カ九ノ原因ヲ與ヘ、後ノ工業主カ一ヲ與ヘタルニ過キサル場合ト雖後ノ工業主ニ於テ全責任ヲ負ハサルヘカラス、又前工業主ニ於テ十ノ原因ヲ與ヘタルモ未タ發病セサル前ニ於テ後ノ工業主カ五ノ原因ヲ與ヘタルトキハ、前工業主ニ於テ十五ノ程度ノ疾病ニ對シテ全責任ヲ負ハサルヘカラス、是レ衡平ノ原則ヲ破ルモノニシテ恐クハ法ノ豫期スル所ニ非ルヘシ、又此ノ說ヲ以テスレハ職工カ同時ニ數多ノ工場ニ歴使セララル場合ニ付解決ヲ與フルコト困難ナルヘシ、故ニ此ノ說モ必シモ正當ナリト爲スヲ得サルナリ、之ヲ要スルニ本問題ハ何レニ立論スルモ多少ノ缺點アルヲ免レサルカ如ク立法ノ手段ヲ以テ之ヲ補正スルノ外ナカルヘシ。

二 扶助債權ノ主體及其ノ順位 業務上ノ負傷又ハ疾病ニ對シ扶助ヲ受クル權利ヲ有スルモノハ職工自身ナリ、然レトモ職工死亡ノ場合ニ於テハ遺族扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有スル者ハ職工ノ遺族トス、遺族數人アル場合ニ於テハ其ノ順位ハ令第十條乃至第十二條ノ定ムル所ニ從フ、今其ノ大要ヲ説明センニ此ノ順位ノ第一ニ在ルモノハ即チ配偶者ナリ、若シ配偶者ナキトキハ職工死亡當時其ノ屬シ

タル戸籍内(令ニハ「家」トアリ同一義ナリ例ヘハ他家ニ養子ト爲リタル者ハ入ラス又「事實血族」上ノ父母祖父母等ナリト雖職工ト別戸籍ニ在ルトキハ入ラス)ノ直系卑屬即チ子孫以下又ハ直系尊屬即チ父母祖父母以上ノ者ノ中職工ニ最モ近キ親等ノモノトス、而シテ同一程度ニ於テ職工トノ親等近キ者二人以上アルトキハ卑族ヲ先キニス、是レ卑族ハ尊族ヨリモ先シテ扶助ヲ受クヘキ性質ノモノト推定セラレタルニ依ル。

前記ニ依リ特定ノ順位者ヲ求メタル上若シ同一順位者カ二人以上アル場合ニ於テハ如何ニ之ヲ決スヘキヤト云フニ、此ノ場合ハ令第十一條ノ規定スル所ニシテ其ノ順位ハ左ノ如シ。

- 一 職工ノ家督相續人又ハ戸主ハ之ヲ他ノ者ヨリ先ニス
 - 二 男ハ之ヲ女ヨリ先ニス
 - 三 直系卑屬ニ付テハ男又ハ女ノ間ニ在リテハ嫡出子ヲ先ニシ嫡出子、庶子及私生子ノ間ニ在リテハ嫡出子及庶子ハ女ト雖之ヲ私生子ヨリ先ニス
 - 四 前二號ニ掲クル事項ニ付相同シキ者ノ間ニ在リテハ年長者ヲ先ニス
- 尙職工カ絶對ノ獨身ニシテ配偶者モナク又直系ノ親族ナキトキハ如何ニスヘ

キヤト云フニ、此ノ場合ハ令第十二條ノ規定ニ依ルヘキモノニシテ左ニ掲クル者ノ中一人ニ遺族扶助料ヲ支給スヘキモノトス、但シ職工ノ遺言又ハ工業主ニ對シテ爲シタル豫告ニ依リ左ニ掲クル者ノ中一人ヲ特ニ指定シタルトキハ之ニ從ハサルヘカラス。

- 一 職工ノ家督相續人又ハ戸主
- 二 職工ノ兄弟姉妹ニシテ職工死亡當時之ト同一ノ家ニ在リタル者
- 三 職工ノ親族又ハ職工ト同一ノ家ニ在ル者ニシテ職工死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者

扶助ヲ受クル權利ヲ有スルモノ及其ノ順位概ネ右ノ如シ、而シテ施行令ハ

(一) 内縁ノ妻ヲ認メス 即チ職工ト事實上夫婦關係アリテ職工ノ收入ニ依リ生計ヲ維持スル者ト雖、法律上夫婦ニ非サル以上ハ之ニ對シ扶助ヲ受クル權利ヲ認メス、此ノコトニ付テハ立法ノ際議論アリタル所ニシテ消極論者ノ説トシテハ法第十五條ニハ「遺族ヲ扶助スヘシト規定セリ、遺族トハ遺サレタル親族ノ意義ニシテ、法律上親族關係ナキ事實上ノ配偶者ヲ認ムルコトハ解釋上不都合ナルノミナ

ラス、斯ノ如キ事實上ノ關係ヲ公認スルコトハ風教上好マシカラサルコトニ屬ス云々ト云フニ在リ、之ニ對スル積極論者ノ説ニ曰ク法律カ職工及其ノ遺族ヲ扶助スル精神ヲ案スルニ、無産階級ニ屬シ専ラ勞働ニ依リテ衣食シ又ハ勞働者ニ從屬シテ生計ヲ維持スル者カ、勞働能力ノ減退又ハ喪失ニ原因シテ困厄ニ陥ルコトヲ扶助スルニ至ルヤ疑ヲ容レス、職工ノ收得能力喪失ニ依リ救助ノ要アルハ大多數ノ場合ニ於テ其ノ妻子タルヘシ、而シテ職工社會ニ於テハ假令正當ニ結婚スルモノト雖、事實上入籍ノ手續ヲ怠ルモノ甚タ多キヲ以テ實際ニ於テ職工ノ收入ニ依リテ生計ヲ維持スルノ事實ヲ基礎トセス、單ニ戶籍ノ形式ニノミ依リテ之カ救濟ヲ否認スルカ如キハ職工社會ノ現實ノ狀況ニ適應セス扶助ノ制度ハ其ノ效果ノ大半ヲ没却スルニ至ルヘク、從テ立法ノ趣意ニ適合スルモノト謂フヘカラス、若シ夫レ内縁ノ妻ヲ保護スルヲ以テ社會風教ヲ紊ルノ虞アリト爲スカ如キハ出獄人保護法ヲ以テ犯罪ヲ獎勵スルモノト爲スノ類ニシテ不通ノ議論ナリ又令ハ一方ニ於テ私生兒ヲ公認(令第十一條第三號)シナカラ他方ニ於テ内縁ノ妻ヲ認ムルヲ忌ムカ如キハ聊カ矛盾ノ譏ヲ免ルルヲ得サルヘシ云々ト云フニ在リキ、而シテ審議ノ

結果ハ遂ニ内縁ノ妻ニ對シテハ全然扶助ヲ受クルノ權利ヲ認めサルコトニ決定セリト云フ。惟フニ此ノ兩說孰レモ理アリ、一ハ法文ノ解釋ヲ基礎トシ他ハ職工社會ノ實狀ニ立論ス、然レトモ法律ニハ「遺族」ナル文字ヲ用キタルヲ以テ之ヲ法律的ニ解釋スル以上ハ消極論者ノ說ヲ否定スヘキ理由ナシ、然レトモ積極論者ノ說又實ニ聽クヘキモノアリ、職工社會ノ戶籍ノ整理ニ付テハ他ニ其ノ途アルヘシ、必スシモ扶助權利ノ付與ト然ラサルトニ依リ之ヲ矯正スルコトヲ得サルヘシ、要ハ次期ニ於ケル法令改正ノ際ハ此ノ點モ亦再議ヲ爲スヘキモノノ一ナラン乎

(二) 親族ノ順位ニ付テハ家族制及直系主義ニ重キヲ置キタルモノニシテ 配偶者ニ次ク第二順位者中ヨリ職工ト同一ノ戶籍内ニ在ラサル一切ノ親族並同一戶籍内ニ在ル者ト雖旁系ニ屬スル者ハ假令事實上職工ノ收入ニ依リテ生計ヲ維持シタルモノト雖之ヲ排除シ、令第十二條ニ依リ家督相續人、戶主及職工ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ト共ニ第三順位者トシテ認めラルルニ過キス、是レ我民法ノ遺產相續ノ順位ニ準シタルモノニシテ官役職工人夫扶助令カ配偶者ノ次ニ子、父母、孫、祖父母、兄弟姉妹等ヲ認め、扶助ニ付テハ遺產相續ト異レル順位ヲ定メタル

ニモ拘ラス本令ニ於テハ絶對的ニ直系主義及卑族優先主義ヲ採リタリ、尙本令ハ家督相續人ノ外戶主ニ優先權ヲ與ヘタル點ニ於テ官役職工人夫扶助令ト異ルモノトス(令第十一條及第十二條)

惟フニ遺族扶助ノ第一義ハ事實上職工ノ收入ニ依リテ生計ヲ維持シタル職工ノ遺族カ、職工ノ死亡ニ依リ俄ニ路頭ニ迷ヒ溝壑ニ轉スルノ慘事ヲ救済セントスルニ在ルヘシ、果シテ然ラハ扶助ヲ受クヘキ者ノ範圍竝其ノ順位ノ如キハ現在ノ實情ヲ基礎トシ之ニ順應セシムルヲ以テ足レリトスルニ非サルカ、尙此ノ點ニ關スル斷論ハ後日ノ研究ニ留保ス。

(三) 職工ノ遺言又ハ豫告ニ依ル指定 職工ノ配偶者又ハ直系親族ニシテ職工ト同一ノ家ニ在ル者ナキ場合ニ於テ、令第十二條第一號乃至第三號ニ該當スル者數人アルトキ、職工カ遺言又ハ工業主ニ對シテ爲シタル豫告ニ依リ其ノ中ノ一人ヲ指定シタルトキハ、工業主ハ此ノ指定ニ從フコトヲ要スルコト已ニ述タル所ノ如シ、此ノ場合ニ於ケル遺言ハ民法ノ規定ニ依リ正規ノ方式ニ從ヒテ之ヲ爲スコトヲ要シ、又工業主ニ對スル豫告ニ依リ指定ヲ爲シタルトキハ工業主ハ其ノ旨職工

名簿ニ記載スルコトヲ要ス。(職工名簿記載
心得七ノ口)

職工ハ令第十二條第一號乃至第三號ニ該當スル者ノ内數人ヲ指定シテ扶助料ノ分割支給ヲ求ムルコトヲ得ルヤ否ヤ立法論トシテハ議論ノ餘地ナキニ非サルヘキモ解釋論トシテハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノト解セサルヘカラス。職工カ遺言又ハ豫告ヲ以テ扶助ヲ受クヘキ者ノ指定ヲ爲ササルトキハ工業主ハ任意ニ其ノ一人ヲ選擇シテ之ニ扶助料ヲ支給スヘキモノトス而シテ工業主カ之ニ對シテ債務ヲ履行スルトキハ其ノ他ノ債權者ノ債務ハ同一ノ給付ヲ目的トスルカ爲之ニ依テ消滅スルモノトス。

三扶助支給ノ方法 施行令ハ扶助ノ支給方法ニ付詳細ナル規定ヲ設ケス大部分ハ扶助規則ノ定ムル所ニ一任セリ(令第十
九條)唯休業及療養扶助料ニ付テハ少クトモ毎月一回以上ニ分チ之ヲ支給スルコトヲ要スルコトハ令第十三條ニ於テ之ヲ明規セリ。其ノ他ノ扶助料ニ付テハ工業主ハ支給原因ノ發生ト共ニ支給ノ義務ヲ負ヒ扶助規則ニ別段ノ定メナキトキハ職工又ハ其ノ遺族ノ請求ノトキヨリ民法上遲滞ノ責ニ任ス(民法第四百十
二條第三項)扶助規則中扶助支給ニ關スル規定ヲ設クル場

合於テハ成ルヘク支給方法ヲ簡易ナラシムル様注意ヲ要スルモノトス。

四扶助支給ノ場所 扶助支給ノ場所ニ對シテモ施行令中ニハ何等ノ規定ヲ設ケス故ニ扶助規則中ニ規定アルトキハ其ノ規定ニ從フモノトス。扶助規則ニ規定ナキトキハ當事者間ニ意思表示ナキモノト見做ササルヘカラサルカ故ニ若シ支給ノ場所ニ付慣習アル場合ニ於テ當事者カ之ニ依ル意思ヲ有セルモノト認ムヘキトキハ其ノ慣習ニ從フヘク(民法第九
十二條)扶助規則ニ規定ナク又何等慣習存在セサル場合ニ於テハ債權者即チ職工又ハ其ノ遺族ノ現時ノ住所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス(民法第四百
八十四條)而シテ扶助支給ノ費用ニ付別段ノ意思表示ナキトキハ其ノ費用ハ債務者タル工業主之ヲ負擔ス但シ債權者ノ住所ノ移轉其ノ他ノ行爲ニ因リテ辨濟ノ費用ヲ増加シタルトキハ其ノ増加額ハ債務者之ヲ負擔スルコトヲ要ス(民法第四百
八十五條)

第六項 扶助ノ請求(審査及調停)

施行令中ニハ扶助料請求ノ方法ニ付何等ノ規定ヲ設ケス之ヲ扶助規則ニ一任シタリ(令第十
九條)外國補償法中ニハ可成速カニ傷害ノ事實ヲ工業主ニ通知スヘシト

規定セルモノアレトモ我施行令中ニハ斯ノ如キ規定ナシ然レトモ解雇後一年以内ニ請求セサルトキハ令第十五條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受クル能ハサルニ至ルコトアルヘシ其ノ他ノ場合ニハ扶助規則ニ從フ外如何ナル方法ニ依テ請求スルモ職工ノ隨意ナリ。舉證ノ責任ニ付テハ業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル事實アルコトヲ職工ニ於テ主張シ得レハ足ル而シテ此ノ主張ニ對シテ工業主ハ之ヲ否認スルニ足ルヘキ證據ヲ有スルカ若ハ假令其ノ業務上ノモノナルコトハ否認セスト雖職工ノ重大ナル過失ニ出テタルモノナルコトヲ證明シタル場合ノ外扶助ノ義務ヲ負フモノトス。(令第四條)英國ニ於ケル判例ノ如キハ職工ノ證明ハ推理上正當ナリト認めラルヘキ程度ニ於テスルヲ以テ足り災害ヲ目撃セル證人アルコトヲ必要トセス我施行令第四條ノ注意規定モ蓋シ其ノ意之ニ在ルヲ疑ハス而シテ重過失ノ有無負傷疾病ノ治療等ニ付テハ工業主之カ證明ノ責ニ任スヘキモノニシテ右證明ヲ爲シ得サルトキハ當然其ノ事實ナキモノト看做サルナリ。

扶助請求並支給ノ手續モ亦成ル可ク簡易ニシテ且敏活ナルヲ要ス徒ラニ手續ヲ繁雜ニシテ職工ニ不便ヲ感セシムルカ如キハ扶助令ノ本旨ニ非ス諸外國ニ於

テモ多クハ簡易ナル仲裁裁判ノ手續ニ依テ敏活捷徑一切ノ紛争ヲ解決スルノ仕組アリ本邦ノ現狀トシテハ未タ斯ノ如キ仲裁裁判ノ制度ヲ設クルコトヲ困難トスル事情アリ。此ノ故ニ令第十八條ハ地方長官ハ職權ヲ以テ又ハ申請ニ因リ職工ノ負傷疾病若ハ死亡ノ原因第七條各號ニ掲クル身體障害ノ程度其ノ他扶助ニ關スル事項ニ付之ヲ審査シ及事件ノ調停ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷又ハ檢案セシムルコトヲ得ト規定シ複雑ナル手續ニ依リ民事裁判所ニ出訴スルコトナク成ルヘク地方長官ヲシテ扶助ニ關スル一切ノ紛争ヲ解決セシメンコトヲ期シタリ。

地方長官ノ審査及調停 本件ニ付テハ法規立案ノ當時ニ於テモ可否ノ議論アリタリ積極論者(甲)ハ扶助ノ支給ニ付テハ工業主ト職工トノ間ニ數々紛争ノ起リ得可キヲ豫想シ地方長官ヲシテ此ノ法律關係ニ付徹底的ニ紛争ヲ解決スルノ權限ヲ與フルノ要アリトナシ一種ノ仲裁裁判トモ云フヘキ制度ヲ設クルヲ主張セリ之ニ對シ消極論者(乙)ハ施行令ヲ以テ仲裁裁判ノ如キ制度ヲ定ムルコトハ法第十五條ノ委任ノ範圍ヲ超越スルモノニシテ法律ハ扶助ノ限度範圍等ニ就テハ之

ヲ勅令ニ委任シタリト雖、其ノ權利ノ存否又ハ確認ニ關スル評議ヲ決定スルノ方法迄ヲモ定ムルノ權限ヲ委任シタルニ非ス、故ニ斯ノ如キ制度ヲ設クルハ法律ニ違反スルモノト云フヘシ。加之資本主及勞働者ノ評議ニ關スル仲裁裁判制度ヲ創設スルカ如キ重大ナル社會政策上ノ問題ハ、假令勅令ヲ以テ之ヲ規定シ得ルトスルモ尙慎重ナル研究ヲ遂クルヲ要ス、現ニ之ヲ我國ノ實情ニ考フルモ職工ト工業主トノ問題ハ概ネ相互ノ協商互讓ニ依リ解決セラルルヲ常トシ、輸贏ヲ法廷ニ爭フカ如キコトハ甚タ稀ナリ、左レハ此ノ際斯ノ如キ制度ヲ立ツルハ自ラ求メテ健訴ノ風ヲ促進シ、職工保護ノ規定ハ却ツテ社會問題ヲ誘起スルノ導火線タルノ虞ナキヲ保セス、故ニ實際上ノ必要ニ逼ラレタル後ニ於テ初メテ之ヲ設クルモ決シテ遲キニ非ス云々ト謂フニ在リタリ。

然レトモ既ニ第一項ニ於テ述ヘタルカ如ク職工扶助ノ法令ニ關スル評議アリタル場合ニ於テ、專ラ普通ノ民事裁判ニヨリテノミ決スヘキモノトスルトキハ、事實ニ於テ職工ノ爲不利ナルヘキ場合甚タ多カルヘク、之ニ對シ何等カ便宜ノ解決方法ヲ設タルノ要アルハ甲乙共ニ必スシモ異議アルニ非ス、此ニ於テ甲乙二者ノ

主張ヲ折衷シテ、職工ト工業主トノ間ニ評議ヲ惹起シタルトキハ、地方長官カ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申請ニ依リ其ノ評議ニ于與シ得ルコトトシ、司法裁判ニ訴フルノ繁ヲ省カシムヘシト云フニ一致セリ、此ノ地方長官ノ調停ハ外國ニ於ケルカ如キ正式ノ仲裁裁判ニ非サルコト勿論ニシテ、法律上終審タルノ性質ヲ有スル能ハサルヘシト雖、行政上相當ノ効果ヲ收ムルヲ得ヘキハ疑ナカルヘシ、而シテ地方長官ノ調停ヲシテ事實上初審、且終審タルヲ得セシムルカ爲ニハ、調停ヲ開始スル前豫メ當事者ニ付其ノ調停ニ服スヘキ旨ノ意思ヲ確メ、正義ト條理トノ指示スル所ヲ懇篤ニ當事者ニ貫徹セシムヘキヤ勿論トス。

諸外國ニ於ケル仲裁裁判制度

(一) 英國 職工補償法ニ依ル仲裁裁判(一八九六年)

(イ) 補償責任ノ有無又ハ補償ノ金額等ニ關シ工業主ト職工トノ間ニ存スル評議ヲ裁決スルモノトス

(ロ) 工業主及職工ノ代表者ヨリ成ル仲裁委員會ノ組織アル場合ニ於テハ當事者ノ双方カ異議ノ通告ヲ爲ササル時ハ此ノ仲裁委員會ニ於テ之ヲ決定ス

- (ハ) 當事者ノ一方カ異議ヲ唱ヘタルトキ、仲裁委員會ノ設置ナキトキ、仲裁委員會カ仲裁ヲ爲スコトヲ辭退シ、若ハ事件ヲ受理シタル後六箇月以内ニ決裁ヲ爲スコト能ハサルトキハ、兩當事者ノ選定シタル一人ノ仲裁者、當事者ノ合意成立セサルトキハ、地方裁判所ニ於テ之ヲ決定ス
- (ニ) 英蘭ニ於テハ司法大臣ノ委任アルトキハ、裁判所ハ別ニ仲裁者ヲ指定シ事件ヲ裁決セシムルコトヲ得
- (ホ) 當事者双方ノ合意ニ依リ又ハ仲裁人ノ裁決ニ依リテ訴訟事件カ解決セラレタルトキハ、其ノ決定書ヲ裁判所ノ書記ニ送附シ書記之ヲ特別登記簿ニ登録セルトキハ、其ノ決定ハ地方裁判所ノ判決ト同一ノ効力ヲ有スルモノトス

二 獨逸

- (イ) 一八九〇年工業ニ關スル仲裁裁判制度ヲ定ム、其ノ組織權限左ノ如シ。
仲裁裁判ニ附セラルヘキ事項ハ、勞働關係ノ開始、變更、終了ニ付テノ爭訟、賃銀問題、損害賠償金及違約金等ニ關スルモノニシテ、鑛業勞働者、官公立工場勞働者モ裁判ヲ請求スル資格アルモ、陸海軍工場ニ使役セラルル勞働者ハ

此ノ限ニ在ラス

- (ロ) 仲裁裁判ニ參與スルモノハ、審査員及審査長トス、審査員ハ少クトモ四人タルヲ要シ、資本案勞働者ヨリ同數ノ代表者ヲ選フモノトス、年齢二十五歳以上ニシテ當該地方ニ住所ヲ有シ、營業ヲ營ムモノニヨリテ無記名直接ニ選舉セラレ、被選舉資格トシテハ三十歳以上ニシテ當該地方ニ二年以上住所ヲ有シ、營業ヲ營ミ、係争工業ニ關スル智識ヲ有スルモノトス
- 審査長ハ市町村長又ハ市村會ニヨリテ資本案及勞働者ト關係ナキ第三者選ハレ、高級官廳ノ認可ヲ要シ、任期ハ一箇年トス
- (ハ) 審査員ハ名譽職ニシテ旅費及手當ヲ受クルモ俸給ヲ給セラルコトナシ
- (ニ) 裁判所書記ハ特ニ設ケラルルモ、執達吏ノ職ハ市町村公吏之ヲ行フ
- (ホ) 仲裁裁判ノ判決ハ強制力ヲ有ス
- (三) 佛蘭西 工業裁判所ヲ最初ニ設ケタルハ佛國ニシテ始メテリ、オン市ニ之ヲ設置シタルハ一八〇六年ナリ
- (イ) 裁判ニ附セラルヘキ事項ハ、勞働契約ニ關スルモノトセルモ、民事裁判ニ附

セラルヘキ事項トノ限界明瞭ナラス

(ロ) 裁判所ノ組織ハ獨逸ニ於ケルト大同小異ニシテ資本家及労働者ヨリ同數ノ審査員ヲ選舉ス、選舉人ノ資格ハ年齢二十五歳以上ニシテ當該地方ニ三年以上住居シ且營業ヲ營ミ公民權ヲ有スルモノトス、被選舉資格トシテハ年齢三十歳以上ノ公民權アル者ニシテ當該地方ニ三年以上住居シ讀書ノ能力アル者トシ任期ハ六年トス、審査長ハ審査員ノ中ヨリ正副二名ヲ互選スルモノニシテ資本家及労働者ヨリ各一名宛ヲ選フ

(ハ) 訴訟アルヤ先審査會ヲ開キ係争事件ヲ審理シ次テ判決ヲ下スモノトス

(ニ) 判決ハ強制力ヲ有スルモ民事裁判所ニ控訴ヲ許サルモノトス

第七項 扶助債權ノ消滅及變更

一 扶助債權ノ消滅

消滅トハ扶助ヲ受ケル債權カ客觀的ニ存在セサルニ至ルヲ謂フ、扶助債權ノ消滅原因左ノ如シ。

(一) 混同 債權カ債務者ニ歸屬シタルトキ混同ニ依リ消滅スルハ説明ヲ要セス

(二) 扶助義務ノ履行、此亦説明ヲ要セス

(三) 除斥期間ノ滿了 除斥期間ハ令第十五條之ヲ定ム曰ク 工業主ハ左ノ各號

ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得

一 職工ノ解雇後一年ヲ經過シテ扶助ヲ請求スルトキ、但シ既ニ受ケタル扶助

ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スルトキハ此ノ限ニ在ラス、解雇前ニ

又ハ解雇後一年内ニ請求シタル扶助ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求

スルトキ亦同シ

二 扶助ヲ受ケ治療シタル負傷又ハ疾病カ職工ノ解雇後ニ於テ再發スルトキ

扶助ノ義務カ一旦發生シタルトキハ工業主ノ事業ノ廢止、變更ハ何等義務ノ

發生及存續ニ影響ヲ及ササルカ如ク、又職工側ニ在リテモ其ノ解雇ニ依リテ何

等ノ影響ヲ受ケルモノニ非ス、此ノ事タル債權債務ニ關スル一般ノ法理上明カ

ナリト雖、令第四條第二項ハ明文ヲ以テ特ニ疑ヲ除キタリ、然レトモ解雇ハ工業

主ト職工トノ雇傭關係ヲ一旦斷絶スルモノナルヲ以テ、解雇職工ヲ飽ク迄勤續

職工ト同一視スルノ必要ナキヲ以テ、同條ハ別段ノ定ヲ以テ例外ヲ設クルコト

ヲ認メタリ令第十五條即チ是レナリ。令第十五條第二號ハ扶助ヲ受ケ一旦治療シタル負傷疾病ト雖、若シ其ノ職工カ同一工業主ノ下ニ勤續シツツアルモノナラムニハ、其ノ再發ニ際シテモ亦前ト同様扶助ヲ受クヘキニ拘ラス、再發前既ニ解雇セラレタルモノナランニハ更メテ扶助ヲ受クルノ權利ナキモノトセリ、又其ノ第一號ニ於テハ職工ハ解雇後ト雖、在職中ノ負傷若ハ在職中ノ事故カ原因ト爲リテ疾病ニ罹リタルトキハ、此ノ負傷又ハ疾病ニ對シテ前工業主ニ扶助ヲ請求スルコトヲ得ルモ、解雇後一年ヲ經過シタルトキハ扶助請求權ヲ失フコトヲ以テ原則トスル旨ヲ規定セリ、然レトモ若シ此ノ原則ヲ貫クトキハ職工側ニ於テ可憐ノ情態ニ陥ル場合アルヲ以テ更ラニ二箇ノ例外ヲ設ケタリ。

(イ) 一旦扶助ヲ受ケタルコト有ル場合ニ於テ其ノ扶助ヲ受クルノ原因タリシ負傷又ハ疾病ニ基キテ扶助ヲ請求スルトキ、此ノ場合ハ假令解雇後一箇年ヲ經過シテ請求スル場合ト雖扶助ヲ爲スコトヲ要ス。例ヘハ在職中又ハ解雇後一年ヲ經過セサル期間内ニ於テ負傷又ハ疾病ノ爲療養費休業扶助料等ヲ受ケタル者カ、其ノ同シ疾病又ハ負傷カ原因ト爲リテ解雇後二箇年目ニ死亡

シタルトキニ於テ、其ノ遺族カ遺族扶助料ヲ請求スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得サルモノトス。蓋シ當該遺族ノ請求タル解雇後一年ヲ經過スルモノナリト雖、職工ノ死亡原因ハ正シク既ニ受ケタル扶助ノ原因即チ扶助ノ支給ヲ受ケタル事由タル負傷又ハ疾病ニ起因スルモノナレハナリ。

(ロ) 在職中又ハ解雇後一年ヲ經過セサル期間内ニ扶助ヲ請求(受ケタルニ非ス)シタルコトアル場合ニ於テ、其ノ請求シタル扶助ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ扶助ヲ請求スルトキ、此ノ場合ニ於テハ前段ト同シク之ヲ拒ムコトヲ得ス。例ヘハ職工カ上述ノ期間内ニ扶助ヲ請求シタルニ工業主ニ於テ業務上ノ負傷又ハ疾病ニ非ストシ、若ハ其ノ他ノ事由アリテ未タ扶助ヲ與フル迄ニ運ヒ居ラサリシカ、解雇後一年ヲ經過シ更ニ前記ノ負傷又ハ疾病ニ基キ扶助ヲ請求シタルトキハ、一年ヲ經過シタリトノ理由ニ依リ之ヲ拒ムヲ得ス。故ニ若シ此ノ請求カ業務上ノ負傷又ハ疾病ニ基クモノナル場合ニ於テハ扶助ノ義務ヲ免レサルモノトス。

(四) 消滅時効ノ完成 扶助債權ハ前記除斥期間ノ外一般債權ノ消滅時効ノ完成

ニ依リ消滅ス(民法百六十七條)而シテ民法ノ一般規定ニ依ル時効ノ完成ニ依リ消滅スル扶助債權ハ令第十五條第一號及第二號ノ場合即チ解雇シタル職工ノ疾病又ハ負傷ニ關スル短期ノ除斥期間ヲ除キタル扶助債權ニシテ例ヘハ在職中ノ職工ノ罹病負傷又ハ死亡並令第十五條第一號但シ書即チ在職中又ハ解雇後一年以内ニ請求シ又ハ扶助ヲ受ケタル場合ニ於テ其ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スル扶助ノ如キ即チ是レナリ

(五)相殺 既ニ發生シタル扶助債權ニ付法律上相殺ヲ許スヤ否ヤ(民法第五十條)民事訴訟法第六百十八條ハ差押フヘカラサル債權ヲ列舉シ其ノ第一號ニ於テ法律上ノ養料(本條ノ養料トハ Aliments 即チ親族法上ノ扶養料ナリ)及第六號ニ於テ職工勞役者ノ勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル報酬ヲ掲ケタリ。而シテ工場法規ニ依ル扶助料ハ此ノ兩者ノ何レニモ該當セサルヲ以テ勅令制定ノ當時ニ在リテハ特ニ明文ヲ以テ扶助料ノ差押フヘカラサル旨ヲ規定スヘシトノ説モアリタルカ反對説ハ若シ扶助料ニシテ本來差押ヲ許ス性質ノモノナランニハ命令ヲ以テ之ヲ禁止スルハ命令權ノ範圍ヲ超越スルモノナリトセリ此ノ説ニ對スル反駁論トシテハ工場法ハ扶助ニ關スル規定

ヲ勅令ニ委任シタリ勅令ハ新タニ斯ノ如キ權利ヲ創定スルモノナレハ其ノ權利ニ如何ナル性質ヲ賦與スルモ自由ナリ從テ其ノ性質トシテ差押フヘカラサル權利ヲ創定スルヲ得サルノ理由ナシト云フニアリタリ而シテ審議ノ結果遂ニ斯ノ如キ規定ヲ設ケサルコトト爲シタリト云フ。既ニ差押ヲ禁スルノ明文ナキ以上ハ其ノ能不能ニ付テハ一ニ法規ノ精神解釋ニ依ラサルヘカラサルコトト爲リタルモ恐ラクハ不能論ヲ支持スルコト困難ナラン乎差押禁止ノ明文ナクシテ判決例ニ依リ其ノ不能性ヲ決定シタルモノナキニ非ス即チ金鵝勳章年金ハ絕對的專屬性ヲ有スルカ故ニ差押フヘカラサルモノト爲シタル大正四年五月十二日ノ判例是レナリ故ニ法律ニ差押禁止ノ明文ナキノ故ヲ以テ直チニ差押ヲ爲シ得ヘシト解スルモ亦稍早計タルノ嫌ナキニ非ス

(六)免除(扶助債權ノ拋棄) 現實ニ發生シタル扶助債權ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得ヘシト雖豫メ扶助債權ヲ拋棄スル旨ヲ契約スルモ無効ナリ例ヘハ職工カ工業主ニ對シ雇入ノ際一切ノ扶助ヲ受ケサルヘキ契約ヲ爲シ又ハ災害發生後ニ於テ扶助ヲ拋棄スルノ契約ヲ爲シタル場合ニ於テモ工業主ハ此ノ契約ニ基キ將來ニ向

テ扶助ノ義務ヲ免ルルコトヲ得サルモノトス。其ノ他職工ト工業主トノ契約ニ依リ扶助ニ關スル法令ノ規定ニ違反スル契約ヲ爲スモ何等ノ效力ヲ發生セザルナリ。是レ扶助ニ關スル規定カ公益規定ニシテ強制的性質ヲ有スルニ依ル。

(七)更改 現實ニ發生シタル扶助債務ハ更改ニ依リテ消滅セシムルコトヲ得ヘシト雖其ノ然ラサルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス。

(八)債権者ノ死亡 現實ニ發生シタル扶助債権ハ債権者ノ死亡ニ依リテ消滅スルコトナシ一般債権ト同シク相續スルコトヲ得ヘシ。

(九)債務者ノ死亡 扶助ノ義務ハ債務者ノ死亡ニ依リテ當然消滅スルモノニ非ス。包括繼承人ニ於テ之ヲ繼承スヘキモノトス。

(十)法人ノ解散及合併 解散ノ場合ニ於テハ扶助債権者ハ履行期ノ到來シタル休業扶助料傷害扶助料遺族扶助料葬祭料ノ如キ扶助料ニ付其ノ支拂ヲ清算人ニ請求スルコトヲ得ルハ勿論ナリ。將來ニ向テノ療養扶助料休業扶助料及傷害扶助料等辨濟期ノ到來セサルモノト雖之レカ支給ヲ請求スルコトヲ得ルモノナリ。而シテ清算人ハ此ノ種ノ條件附又ハ存續期間ノ不確定ナル債権ニ付テハ裁判所ノ

選任シタル鑑定人ノ評價ニ從ヒテ辨濟ヲ爲スコトヲ要ス。(商法第九十條ノ二)

會社合併ノ場合ニ於テハ合併ノ決議ヲ爲シタル後二箇月以上ノ期間ヲ定メ債権者ニ對シ異議アラハ申出ツヘキ旨催告スルコトヲ要ス。(商法第七十八條)債権者カ此ノ期間内ニ異議ヲ述ヘタルトキハ之ニ對シテ辨濟ヲ爲シ又ハ相當ノ擔保ヲ供スルニ非サレハ合併ヲ爲スコトヲ得ス。若シ前記ノ期間ニ異議ヲ述ヘサルトキハ承諾シタルモノト看做サルルカ故ニ爾後扶助ノ債務ハ合併ニ依リテ生シタル會社ニ移ルモノトス。

(七)破産 ノ場合ニ於テハ扶助債権者ハ其ノ債権ヲ以テ破産財團ニ加入スルコトヲ得。辨濟期ノ未タ至ラサル債権ハ破産ノ宣告ニ依リテ辨濟期限ニ至リタルモノトセラル。(商法第九百八十八條)

(附)共濟組合及傷害保險 共濟組合ノ規約ニ依リ法定ノ場合ニ於テ法定ノ金額ヲ支出スルノ契約ヲ爲スモ工業主ハ之ニ依リテ扶助ノ義務ヲ免ル、モノニ非サルコトハ已ニ第二項ニ於テ述ヘタル所ノ如シ。

次ニ傷害保險ノ場合ヲ説明センニ工業主カ職工ノ爲ニ傷害保險ニ加入シ法定

ノ場合ニ於テ職工ニ法定ノ保険金ヲ交付スヘキコトヲ約シ工業主カ其ノ保険料ヲ負擔スル場合ト雖、保險會社ノ支拂フ保險金ハ全ク扶助料トハ獨立別個ノモノニシテ此ニ依リテ工業主ノ扶助ノ責任ヲ解除スルモノニ非ス、故ニ斯ノ如キ方法ニ依リテ扶助義務ヲ免レントスルハ現行法規ノ認メサル所ナリ。工業主カ工場法ニ依リ職工ノ扶助ヲ爲スカ爲蒙ル損害(即チ扶助ノ支給)ヲ填補セムカ爲之ヲ目的トシテ工業主自ラ被保險者ト爲リ、職工ノ身體ニ普通傷害保險ノ團體契約ヲ爲シ、團體員タル職工カ負傷シタルトキ工業主カ支拂ヒタル扶助金額ヲ限り、保險會社ヨリ保險金ノ支拂ヲ受クル保險契約ハ傷害保險契約ト認メ難ク、一種ノ責任保險ニシテ我國ニ於テ現存スル保險會社中斯ノ如キ保險業ヲ經營スルコトヲ得ルモノナシ。工業主カ其ノ職工ヲ被保險者トシ、自ラ保險金ノ受取人トナルノ保險契約ヲ締結シ、其ノ掛金ヲ負擔シ、職工カ負傷又ハ死亡シタル際自ラ其ノ保險金ヲ受取リ事實上之ヲ扶助ノ支拂ニ充ツルハ差支ナカルヘシ。之ヲ要スルニ保險ト扶助トノ關係ニ付テモ亦尙將來ノ立法ニ俟ツヘキモノ多シ。

二 扶助債權ノ變更

(一) 扶助債權ノ讓渡 民法第四百六十六條ハ當事者カ別段ノ意思ヲ表示セス且債權ノ性質カ之ヲ許ササルモノヲ除キ債權ノ讓渡ハ差支ナキモノト規定セリ、而シテ扶助ヲ受クルノ債權中現實ニ療養ヲ受クル權利ノ如キハ其ノ性質上之ヲ讓渡スコトヲ得サルハ勿論ナリ、其ノ他ノ扶助ニ關スル權利中現實ニ發生シタルモノヲ讓渡スコトハ差支ナシト雖、其ノ然ラサルモノニ付テハ之ヲ認メサルモノト解スルヲ至當トス。

(二) 債務ノ繼承 第三者カ工業主ノ包括繼承人トナリタル場合ニ於テハ、工業主ノ扶助義務ハ包括繼承人ニ移轉ス、以下述フル所ハ凡テ特定名義ノ繼承ニ限ル。工業主カ其ノ事業ヲ他人ニ讓渡シタル場合ニ於テ扶助ノ義務ヲモ併セテ繼承セシムルノ契約ヲ爲スハ差支ナシ、然レトモ此ノ契約ヲ以テ職工又ハ其ノ遺族ニ對抗スルコトヲ得ス、從テ此ノ場合ニ於テ工業主ノ繼承人カ工業主ニ代リテ扶助義務ヲ履行シタルトキハ、其ノ履行ハ有效ニシテ工業主カ之ヲ履行シタルト同一ノ效果ヲ生シ、工業主ノ扶助義務ハ消滅スルモノトス、但シ當事者カ豫約ヲ以テ又ハ債權發生後ニ於テ反對ノ意思ヲ表シタルトキハ繼承者ハ工業主ニ代リテ扶助

ノ債務ヲ履行スルコトヲ得ス。(民法第四百七十四條)

第八項 扶助規則及扶助ニ關スル書類

一 扶助規則 工業主ハ令第十九條ニ依リ扶助規則ヲ定メ地方長官ニ届出ツルコトヲ要ス、扶助規則ハ恣ニ之ヲ變更スルコトヲ許サス之ヲ變更セントスルトキハ一箇月以前ニ地方長官ニ届出ツルコトヲ要ス(令第十九條、則第二十三條) 地方長官ハ扶助規則ノ内容ヲ審査シ必要ト認ムルトキハ扶助規則ノ變更ヲ命スルコトヲ得元來扶助規則ハ職工ノ權利ニ重大ナル關係ヲ有スルカ故ニ總テ認可制度ヲ採ルヲ可トスルモ行政上事ノ簡捷ヲ期スル爲之ヲ届出ニ止メシメ必要ナル場合ニハ變更ヲ命スルコトヲ得セシメタルナリ。扶助規則中ニ規定スヘキ主要ナル事項ハ扶助ノ金額、手續、其ノ他扶助ニ關シ必要ナル事項トス、施行令ハ扶助ノ金額ニ付テハ最低額ヲ示シ、手續ニ付テハ何等ノ規定ヲ設ケス、其ノ他ノ事項ニ付テモ大綱ヲ規定スルニ止マル、是レ工場經營規模ノ大小、組織ノ如何等諸般ノ事情カ各工場ノ間ニ非常ノ懸隔アルカ爲ナリ。例ヘハ扶助金額ニ付テ最低限度ヲ定メタルニ過キサズル理由ハ組織整頓シ資力充實セル工場ニ在リテハ從來ヨリ此ノ最少限度ヨリモ

遙カニ多額ノ支給ヲ爲シタルアリ、其ノ他工業主ノ所見如何ニ依リ扶助金額ノ多寡ヲ定ムルニ當リ之ニ勤績年數又ハ過失ノ程度等ヲ考ヘ諸種ノ等級ヲ附スルヲ可トスルモノアルヘキヲ慮リタルモノトス。

扶助料請求ノ手續ニ付テハ既ニ述ヘタル所ノ如ク出來得ル限り之ヲ簡易ナラシムルコトヲ要ス、徒ラニ繁雜不便ナラシムルカ如キ法ノ精神ニ適ハサルノミナラス、漁夫ノ利ヲ占ムル代筆者流ノ乘スル所トナリ却テ自他ノ不利益タルヲ免レサルヘシ。

扶助規則ノ大要ハ平易ニ記述シ適宜ノ方法ヲ以テ之ヲ職工ニ周知セシムルコトヲ要ス(則第十條) 例ヘハ扶助規則ノ要領ヲ拔萃シタル印刷物ヲ配付シ又ハ見易キ所ニ大書シテ張附揭示シ、且口頭ヲ以テ其ノ要領ヲ説明スルノ類ハ其ノ一例タルヘシ。

扶助規則ノ性質 扶助規則ハ職工ノ承諾ヲ待ツテ始テ有効トスルモノニ非ス、故ニ假令則第十三條カ扶助ニ關スル事項ヲ職工ニ周知セシムルコトヲ規定スト雖、扶助規則ハ契約若ハ契約ノ申込ニ非サルハ言ヲ俟タス、扶助規則ハ工業主カ法

令ノ規定ニ從ヒテ爲ス工業主ノ一方的意思表示ニシテ扶助ノ金額、手續等法律關係ヲ定ムルノ效果アルモノトス。或ハ之ヲ以テ一種ノ補充法規ト爲シ又ハ法令ヲ以テ認メラレタル工業主ノ特殊自治權ニ基ク規則ナリト解スル者アルヘシト雖、余輩ハ之ヲ採ラス。

惟フニ令第十九條カ工業主ヲシテ斯ノ如キ規則ヲ定メシムル所以ハ、工業主ヲシテ各自ノ工業ノ特殊ノ事情ニ依リ或ハ勤績者推奨ノ意味ヲモ加味シ、或ハ平素ノ勤怠等ヲモ參酌シ、法定限度以上ニ於テ適當ノ金額ヲ支給セシムルコトヲ得セシメ、特定ノ場合ニ於テ如何ナル程度ノ扶助ヲ爲スカ又ハ如何ナル方法ニ依リテ扶助ヲ實行スルカニ付テ豫メ其ノ意思ヲ決定セシメ、斯クシテ職工ノ利益ヲ確保スルト同時ニ、行政監督上ノ便宜ヲ得ルカ爲規則設定ノ義務ヲ工業主ニ負擔セシメタルモノナリ。工業主ノ定ムル扶助規則ハ工業主カ自己ノ意思ヲ自ら表示シタルモノニ外ナラスト雖法令規定ノ作用ニ依リ一面ニ於テハ事實上國法ノ足ラサル所ヲ補充スルノ效果アルモノトス。

二扶助ニ關スル書類 扶助ニ關スル書類トハ扶助債權ノ發生原因扶助料支給

ノ方法、其ノ額並扶助ノ顛末等扶助ニ關スル一切ノ書類ニシテ斯ノ如キ書類ハ工場毎ニ備置キ且扶助ヲ終リタル日ヨリ三年間之ヲ保存スルコトヲ要ス(明第十條九條)

第九項 官立工場ニ於ケル職工ノ扶助

令第二十條ニ曰ク官立工場ニ於ケル職工ノ扶助ニ付テハ別ニ定ムル規程ニ依ルト別ニ定ムル規程トハ法令ニ依リ已ニ定マリタルモノ及將來定マルヘキモノヲ包含ス、現行法上官立工場ニ於ケル職工ノ扶助ニ關スル規程ハ官役職工人夫扶助令及後ニ掲クル七種ノ官設共濟組合ニ關スル勅令ナリトス。

官役職工人夫扶助令(明治四十年五月勅令第四百八十六號) 第一條ハ、政府ニ於テ使役スル職工、人夫其ノ他ノ傭人自己ノ重大ナル過失ニ因ルニ非スシテ、業務上傷痕ヲ受ケ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル時ハ種別ノ規定アルモノヲ除ク外本令ニ依リ扶助金ヲ給スト規定シ、政府ノ使役スル一切ノ勞働者ヲ扶助ス、而シテ本令ハ現行工場法ニ基ク扶助令ノ模範トナリ且其ノ基礎トナリタルモノナレトモ、明治四十年ノ立法ニシテ其ノ扶助金額ハ現行扶助令トノ關係上改正ヲ要スル點ナシトセス、政府ニ於テモ之カ改正ヲ行ヒ扶助令トノ平衡ヲ保タシムルノ意向アリト聞ク。

官役職工人夫扶助令ノ所謂特別ノ規定アルモノトハ法令ニ依リテ共済組合ヲ組織スルモノニシテ左記七種ノ強制的官設共済組合即チ是レナリ。

- (一) 鐵道院現業員共済組合(明治四十年勅令第一二七號、明治四十一年勅令第三〇五號改正)
 - (二) 專賣局現業員共済組合(明治四十一年勅令第一五七號)
 - (三) 印刷局共済組合(明治四十二年勅令第二二號)
 - (四) 臺灣總督府鐵道現業員共済組合(明治四十二年勅令第四九號)
 - (五) 郵稅局貯金局通信管理局通信官署共済組合(明治四十二年勅令第五一一號)
 - (六) 朝鮮總督府鐵道局現業員共済組合(明治四十四年勅令第一號)
 - (七) 海軍造船造兵事業廳所屬現業員相互共済組合(明治四十五年勅令第一八號)
- 此ノ外官立工場ニシテ法令ノ根據ナクシテ任意ニ組合ヲ設置セルモノアリ、而シテ其ノ主ナルモノヲ(一) 製鐵所職工共済會(二) 東京砲兵工廠職工共済組合(三) 大阪砲兵工廠職工共済組合トス(陸軍省ニ於テハ海軍省ノ例ニ倣ヒ陸軍省部内ノ職工ヲ一團トスル共済組合ヲ設置シ陸軍部内ノ各任意組合ヲ統一融合セシムル計畫アルナリ)

今各組合ノ規則ニ依リ重要事項ヲ表示スレハ左ノ如シ。

名組合	合組道鐵朝	合組道鐵臺	合組院道鐵
ノ開始	日一月五年五十四	一四二四年十	日一月五年五十四
種救濟ノ	老 脫 死 傷 衰 退 亡 疾	同	同
組 合 員	(現業員タル 長以ト) 非現業員 (在職六箇月 以上年給十五 歳以上五十歳 以下)	同	同
掛 金	現業員月給ノ 百分ノ三 非現業員同 百分ノ五	同	同
國庫ノ補助	現業員給料 總額千分ノ 二十	同	同
掛金ノ免除	就職六箇月以 内十五歳未満 五十歳以上	同	同
救 濟 金	傷疾、給料六箇月分乃至二年六箇 月分 療養、傷疾療養相當額 死亡、五箇月以下傷疾死亡ニハ傷 疾給與金ヲ加フ 退職、傷疾ニ因ルモノハ掛金押戻 ノ外増額アリ	不 明	不 明
信 通	同	同	同
年二十四	一四二四年十	一四二四年十	一四二四年十
死 疾 傷 亡 病 疾	同	同	同
(雇員、傭人、 現業員)	同	同	同
現業員 月給ノ千分ノ 三十六	同	同	同
給料總額ノ ナ	同	同	同
シ	同	同	同
傷疾、疾病給料一箇月乃至二年六 箇月 療養、傷疾又ハ疾病療養相當額 死亡、箇月在職六箇月分 一年未満ヲ増ス毎二十五日分ヲ 加フ 災害、二箇月以内	同	同	同

合組	合組局賣專	合組局刷印	合組所鐵製
日一月七	日一月八年一十四	日一月四年五十四	日一月六年八十三
勤 脱 災 續 退 害	疾 年 脱 死 産 傷 病 功 退 亡 婦 損	勤 疾 死 罹 傷 續 脱 病 亡 災 損	退 死 疾 傷 職 亡 病 損
非現業員 職工(備人)	現業員 (製造、機械、運輸員等) 非現業員 (在職一年以上者)	現業員 非現業員	臨時職工 以外ノ職工
同千分ノ六十	現業員 五錢以上一圓以下 (平均給料ノ千分ノ十七)	現業員 百分ノ三 非現業員 百分ノ五	入會金一圓毎 月日給額ノ半額
千分ノ二十四	同千分ノ十三	同百分ノ二	二萬圓(國庫補助ヲ豫算面ニ計上セラルタルハ四十二年度ヨリ始マル)
	職工ニ限リ給料ノ支拂ヲ受ケサル月又ハ給料カ掛金ニ滿タサル月	第一回掛金後三十箇年後ハ掛金ノ要ナシ	ナシ
脱退、掛金、六箇月以上在職者)十分ノ八以上 勤続、三年以上在職大約三百五十圓以下 (以上各)二十五年以上ハ勤続給ニ(税併給)利息ヲ附ス	傷損、六箇月分乃至二年六箇月分 療養、實費 産婦、一年以上在職者ニハ四週間ヲ限リ日給ノ二分ノ一 死亡、一箇月分乃至五箇月、二十日以下 脱退、二百六十圓以下	傷損、六箇月分以内又ハ六箇月分 死亡、二箇月分以内 罹災、二箇月分以内 勤続、二箇月分以内	傷損及疾病、手當二十圓乃至四十圓 療養、三週間以上日給三十圓 傳染病入院毎日一圓 死亡、手當八十圓 遺族、百二十圓 退職、傷損、四十圓以内 日給ノ二分ノ五又ハ其二分ノ一

合 組 軍 海	
日一月四年五十四	
休 勤 脱 養 續 退	傷 疾 死 特 損 病 亡 症 ノ 都 官 合 合
	現業員
百分ノ三	等差アリ 百分ノ二弱
	百分ノ二ナシ
	ナシ
傷、疾病、一箇月分以上二年六箇月分以下 死亡、一年未滿百五十日分 三年以上未滿百二十日分 特症、一年未滿六十日分 以上、一年未滿六十日分 脱退、十年未滿掛金拂戻 勤続、十年未滿掛金拂戻 満一年未滿百五十日分以上十 休養、二十一年以上休養ノ承 得タルトキハ五十日ヲ限度トシ テ療養費ヲ給ス	

前表ニ顯シタルカ如ク各組合ニ於ケル重要事項ハ共通ノモノ甚タ稀ニシテ、著シキ軒輕アルモノ少カラス、左ニ之ヲ説明スヘシ。

- (一) 救済ノ種類
- 一 傷病死亡ニ對スル救済金並脱退ニ對スル一定ノ金額ノ給與ハ各組合ニ共通セリ。

二 疾病ニ對スル救済 通信組合爲替貯金局及通信官署共済組合ノ略稱以下同シ印刷局組合印刷局共済組合ノ略稱以下同シ製鐵所組合製鐵所職工共

濟會ノ略稱以下同シ)及海軍組合(海軍造船兵事業廳所屬雇員以下ノ現業員相互救濟組合ノ略稱以下同シ)ニ於テハ之ヲ實行セルモ、鐵道院組合(鐵道院救濟組合ノ略稱以下同シ)臺灣鐵道組合(臺灣總督府鐵道部現業員共濟組合ノ略稱以下同シ)朝鮮鐵道組合(朝鮮總督府鐵道局現業員共濟組合ノ略稱以下同シ)專賣局組合(專賣局共濟組合ノ略稱以下同シ)ニ於テハ之ヲ行ハス。

三 産婦ニ對スル救濟(分娩前後就業不能ニ對スル救濟ハ獨リ專賣局組合ニ於テ之ヲ行フノミ)。

四 罹災ニ對スル救濟(水火震災等不慮ノ災害ニ罹リ困難スル者ニ罹災給與金ヲ給與ス)印刷局組合及通信組合ニ於テ之ヲ行フノミ。

五 老衰ニ對スル救濟(年齢五十五歳ニ達シテ退職スル者ニ一定ノ救濟金ヲ給與ス)鐵道院組合、臺灣鐵道組合及朝鮮鐵道組合ニ於テ之ヲ實行スルノミ、唯通信組合、印刷局組合及海軍組合等ニ於テ勤續給與金ナルモノアルモ老衰ヲ要素トセス、勤續年數ニ應ジテ一定金額ヲ給與スルモノニシテ、老衰ニ對スル救濟トハ見ルコトヲ得ス。

(六) 特症ニ對スル救濟(組合員加入後六箇月以上ニシテ肺結核ニ罹リ雇傭ヲ解カレタルトキ一定金額ノ特症救濟金ヲ給與ス)海軍組合ニ於テ之ヲ實行スルノミ。

要スルニ傷病死亡ニ對スル救濟(竝脱退ニ對スル一定金額ノ給與ハ各組合ニ於テ之ヲ實行スルモ、其ノ他ノ救濟ハ組合ニ依リ之ヲ實行スルモノアリ、然ラサルモノアリ)。

(二) 組合員

- 一 雇員以上ノ現業員ハ凡テ之ヲ組合員ト爲スモノ、鐵道院組合、臺灣鐵道組合、朝鮮鐵道組合(以上雇員タル驛長以下小使、定傭人夫、工事現場従事員ニ至ル迄八十餘種ノ現業員)、海軍組合
 - 二 雇員以下ノ現業員ノ外、主管大臣ノ指定スル非現業員ヲモ組合員ト爲スモノ、通信組合、專賣局組合、印刷局組合
 - 三 職工臺帳ニ登記セラレタル者ヲ組合員ト爲スモノ、製鐵所
- 斯ノ如ク組合員タリ得ヘキ者ノ資格ヲ現業員ニ限定セルアリ、非現業員ヲモ加

フルモノアリ、又單ニ職工ニ止ムルモノアリ、且又組合員タルニハ組合ニ依リ一定ノ就業期間ヲ經過スルコトヲ要スト爲セルモノト就業ノ當時直ニ加入セシムルモノトノ區別アリ。

(三) 掛金

掛金ヲ算出スルニハ二方法アリ、(一)ハ賃金ノ高低ニ應シテ之ヲ若干ノ等級ニ分チ各等級毎ニ賃金ト掛金トノ比例異ルモノ(等級定率(二)ハ賃金ノ高低如何ヲ問ハス凡テ同一比例ニ依ルモノ(均一定率)是レナリ。

等級定率法ヲ採用セルハ專賣局組合及海軍組合ノミニシテ、他ハ總テ均一定率法ニ依レリ。今各組合ニ於ケル掛金ノ俸給ニ對スル比率竝國庫補助ノ比率ヲ表示スレハ左ノ如シ。

掛金 (給料月額ニ對シ)	國庫補助 (給料月額ニ對シ)	合 計	備 考
鐵道院組合 臺灣鐵道組合 朝鮮鐵道組合 印刷局組合	現業員 百分ノ三、〇 非現業員 百分ノ五、〇	百分ノ二、〇 百分ノ五、〇 百分ノ五、〇	鐵道院組合半給五十歳ニ達スレハ爾後ノ掛金ヲ免除ス 印刷局組合第一回掛金後三十ケ年後ハ掛金ヲ免除ス

通信組合	現業員	非現業員	百分ノ二、四	百分ノ六、〇	百分ノ六、〇
專賣局組合	現業員 百分ノ一、〇 非現業員 百分ノ三、三	至百分ノ二、三 百分ノ三、三	百分ノ一、三	百分ノ二、三 百分ノ三、三	職工ニ限リ給料ノ支拂ヲ受ケサル月又ハ給料カ掛金ニ充タサル月ハ掛金ヲ免除ス
海軍組合	現業員 僱人(約) 百分ノ二、七 雇員 百分ノ三、〇	百分ノ二、〇	百分ノ二、〇	(約)百分ノ四、七	
製鐵所	現業員 百分ノ一、七	百分ノ一、七	百分ノ一、七	百分ノ五、〇	
前表ニ依レハ現業員ノ掛金額ハ給料月額ノ百分ノ二五ニ止ムルモノアリ、或ハ百分ノ二七ナルアリ、三〇ナルアリ、又ハ三六ナルアリ、又鐵道員組合ニ在リテハ年齢五十歳ニ達スレハ掛金拂込期間ノ長短ニ拘ハラス爾後ノ拂込ヲ免除シ、印刷局組合ニ在リテハ第一回拂込後三十箇年ヲ經過スレハ爾後ノ拂込ヲ免除スルニ拘ラス、他ノ組合ニ在リテハ掛金免除ノ規定ナク、就職繼續中ハ間斷ナク之カ拂込ヲ爲スコトヲ要スルナリ。					

前表ニ示セルカ如ク法令ノ認メタル組合ノ現業員ノ掛金ニ對シテハ國庫ハ總

(四) 國庫補助

前表ニ示セルカ如ク法令ノ認メタル組合ノ現業員ノ掛金ニ對シテハ國庫ハ總

テ給料月額ノ百分ノ一三乃至二四ノ補助ヲ爲セリ。國庫補助ノ主タル理由トスル所ハ業務ニ基因スル災害救済ノ費用ヲ之ニ充當スルニアルカ如シ。即チ此等共済組合ノ先驅ヲ爲セル鐵道院組合ニ關スル勅令ハ其ノ第五條ニ於テ官役職工人夫扶助令(砲兵工廠ノ職工ハ三十五年勅令第一九一號砲兵工廠職工扶助令ニ依ル)及各應技術工藝ノ者就業上死傷手當内規ハ雇員以下ノ現業員ニシテ組合員タル者ニハ之ヲ適用セサル旨ヲ規定シ、其ノ他ノ組合ハ多ク鐵道院組合ノ勅令ヲ準用シ、又ハ別ニ之ト同一ノ規定ヲ爲セル(通信組合勅令第五條ニ依リテ明ナリ)。

(五) 救済及其ノ方法

一 業務災害ニ對スル救済

災害ハ之ヲ左ノ五等ニ分チ各等級ニ依リ救済額ヲ異ニセルハ各組合皆同シ。而シテ此ノ等級ノ分類ハ大體ニ於テ官役人夫死傷手當規則ノ規定ニ基ケルカ如シ。

- 一等傷 重傷死ニ至リタルモノ
- 二等傷 兩眼ヲ盲シ若ハ二肢以上ノ用ヲ失ヒ終身自用ヲ辨スル能ハサル者

及之ニ準スル者

- 三等傷 一肢ノ用ヲ失ヒ自用ヲ辨シ得ルト雖終身業務ヲ營ムコト能ハサル者及之ニ準スル者
- 四等傷 自用ヲ辨シ業務ヲ營ミ得ルト雖身體毀損シ舊ニ復スルヲ得ス退職シタル者

- 五等傷 身體ヲ毀損シ舊ニ復スルヲ得スト雖引續キ其ノ職務ニ服スル者
- 以上ノ災害ニ對シ之カ救済ヲ與フルニ付テハ其ノ傷痍カ業務ニ基因シタルモノナルコトヲ要スルハ何レモ同一ナリ。唯通信組合ハ業務上ノ傷痍カ被害者自己ノ重大ナル過失ニ因ラサルモノナルコトヲ救済ノ條件ト爲セルモ、其ノ他ノ組合ニ在リテハ斯カル條件ヲ付セルモノナシ。
- 以上ノ災害ニ對スル救済額ハ組合ニ依リテ異同アリ之ヲ分類スレハ左表ノ如ク三種類トナル。

分類	(一) 救済金額ヲ畫一ニ定ムルモノ	(二) 最低額ト最高額トヲ定メ其ノ範圍内ニ於テ適宜救済金額ヲ定ムルモノ	(一) (二)ヲ折衷シタルモノ
----	-------------------	-------------------------------------	-----------------

組合名	專賣局組合、印刷局組合	海軍組合	鐵道院組合、臺灣鐵道組合、朝鮮鐵道組合、通信組合、
一等傷	給料 二年六箇月分	給料 (二年三箇月分 乃至二年六箇月分)	給料 二年六箇月分
二等傷	同 二年六箇月分	同 (二年乃至二年六箇月分)	同 (一年七箇月分 乃至二年六箇月分)
三等傷	同 一年六箇月分	同 (一年二箇月分 乃至一年六箇月分)	同 (一年一箇月分 乃至一年六箇月分)
四等傷	同 一年	同 六箇月分乃至一年分	同 七箇月分乃至一年分
五等傷	同 六箇月分	同 一箇月分乃至六箇月分	同 一箇月分乃至六箇月分

前表ニ付テ之ヲ見レハ同一程度ノ災害ニシテ其ノ受タル所ノ救済金額ニハ大ナル逕庭アリ。例ヘハ四等傷ニ付テ之ヲ見レハ(一)ニ在リテハ確定的ニ給料一年分ヲ給付セラルルニ拘ラス(二)ニ在リテハ單ニ六箇月分ヲ給付セラルルニ止マルコトアルカ如シ。

二 死亡ニ對スル救済

死亡ニ對スル救済金額ノ定メ方ハ二様ニ分レ居レリ。第一類(鐵道院組合、臺灣鐵道組合、朝鮮鐵道組合)ニ在リテハ一定金額ト既拂掛金ノ八割トヲ給付スルコトト爲セリ。其ノ金額ハ鐵道院組合規則第二號表ノ示ス所ナリ。第二類(通信組合專

賣局組合、印刷局組合、海軍組合)ニ在リテハ組合員ノ組合加入期間ノ長短ト給料額トヲ標準トシテ其ノ金額ヲ算定スルコトト爲セリ。而シテ其ノ金額ハ各組合ニ依リテ異レリ。

斯ノ如ク第一類ト第二類トハ根本的ニ救済金ノ定メ方ヲ異ニセルカ故ニ其ノ結果トシテ同一條件ノ救済金額ニシテ非常ノ差異ヲ生スル場合アルヲ免レス。

三 老衰ニ對スル救済(鐵道院組合、臺灣鐵道組合、朝鮮鐵道組合)

組合員五十五歳ニ達シタルトキハ一定ノ救済金ヲ給與シ、五十五歳以後仍勤績スルトキハ脱退ノ時迄一定ノ利息ヲ付ス。

四 産婦ノ休業ニ對スル救済(專賣局組合)

一年以上組合員タリシ者ノ分娩前一週間、分娩後三週間ニ於テ就業セサリシ日數ニ應シ每一日ニ付日給額ノ二分ノ一ヲ給與ス。

五 罹災ニ對スル救済(印刷局組合、通信組合)

組合員水火震災等不慮ノ災害ニ罹リ困難スル者ニ對シ給料二箇月分以内ヲ給與ス。

六 疾病ニ對スル救済(通信組合、海軍組合)

自己ノ過失ニ因ラスシテ業務ノ爲疾病ニ罹リタル者ニ限り災害救済金ト同額ノ給與ヲ爲ス。

加入後六箇月以上ニシテ不治ノ疾病ニ罹リタル者ニハ勤績年數ニ比例シ一定ノ給與ヲ爲ス(印刷局組合、專賣局組合ニ此ノ救済アリ)

七 特定ニ對スル救済(海軍組合)

加入後六箇月以上ニシテ肺結核ニ罹リ解備セラレタルトキハ勤績年數ニ應シテ一定ノ給與ヲ爲ス。

八 以上ノ外ニハ各組合トモ組合員脱退ノ場合ニハ一定ノ金額ヲ支給シテ一定年限勤績ノ後脱退スル場合ニハ其ノ額ヲ大ナラシムルモノ多シ(勤績又ハ年功給與)

以上説明シタル所ニ依レハ等シク政府ニ備使セララルル者ヨリ成ル共済組合ニシテ其ノ救済ノ種類、救済金額、組合員タル資格、掛金額等各組合ニ依リテ異リ、又(一)等シク政府ノ備使スル現業員ニシテ業務上ノ災害ニ遭遇シタル場合ニ於テ、官役

職工人夫扶助令又ハ各應技術工藝ノ者就業上死傷手當内規ニ依リ救済ヲ受クルノ外共済組合ノ救済ヲ受ケ得サルモノ仍甚タ多シ。(二)又既設共済組合モ法令上公認セラレタルモノト然ラサルモノトアリ。公認セラレサルモノノ組合員ニ對シテハ、官役職工人夫扶助令又ハ各應技術工藝ノ者就業上死傷手當内規ヲ適用セサル旨ノ規定ナキカ故ニ、當該組合員ハ業務上ノ災害ニ遭遇シタル場合ニ於テハ組合ノ救助ヲ受ケタル上、更ニ國庫ニ對シテ死傷手當ノ請求ヲ爲シ得ヘク、公認組合ノ組合員ハ其ノ組合カ公認セラレタル爲却テ薄キ保護ニ甘ンセサルヘカラサルニ至ルノ結果ヲ生スヘシ。又公認セラレタル組合中ニ在リテモ單リ海軍組合ノ組合員ニシテ海軍定期職工タル者ハ其ノ組合ニ依リテ一定ノ事故ノ救済ヲ受クルノ外、海軍定期職工條例(二十九年勅令第二一號)ニ依リ一定事項ニ該當スルトキハ滿期賜金トシテ、其ノ年期中就業シタル總日數ニ滿期若ハ最終ノ日ニ於ケル日給額十分ノ一ヲ乘シタル金額ヲ支給セララルルノ特典ヲ有セルナリ。等シク政府ニ備使セララルル現業員ノ組合ニシテ、或モノハ公認セラレ、或者ハ公認セラレス、又或現業員ハ一定ノ事故ニ付テハ全ク救済ヲ受ケス、或者ハ一定ノ救済ヲ受ケ、更ニ或者ハ二

重ニ救済ヲ受ケツツアルカ如キハ他日整理統一ノ必要アルヘシ。(三)法令上公認セラレタル組合ハ總テ國庫ノ補助ヲ受ケツツアリ。國庫補助ノ額乃至補助率ハ各組合ニ依リ一致セスト雖、國庫補助ノ主タル目的ハ業務災害ノ救済費ニ充ツルニアリ。然ルニ組合ニ依リテハ勤績給與金ノ財源ノ幾部ヲ國庫ノ補助金ノ内ニ仰キツツアルモノト認メラルモノアリテ等シク政府ニ備役セララル現業員ニシテ、或者ハ一定ノ事故ニ付國庫ノ惠澤ニ浴シ、或者ハ毫モ其ノ恩典ニ與ラサルモノアルナリ。此等亦總テ適當ノ時期ニ於テ整理スルノ必要アルヘシ。而シテ若シ適當ニ統一セララルコトアリトスレハ之ニ伴フ積極的ノ利益亦尠シトセス。例ヘハ各組合ニ分屬シテ比較的零碎ナル積立金ノ如キハ合シテ一大資本トナリ尙數年若ハ數十年ノ後ニハ積ンテ巨額ノ資本トナリテ有益ノ事業ニ投資セララルコトヲ得ルニ至リ、經濟界ニ貢獻スルニ至ルヘキノミナラス、組合自體ニ取リテモ其ノ資金ハ有利ニ運用セラレ、組合ノ財産状態ヲ強健ニシテ其ノ基礎ヲ安固ナラシムルノ利益アリ。加之強制労働保險制度ノ設定ニ際シテハ直ニ之ヲ基礎ト爲スコトヲ得ヘク、該制度ノ設定ヲ容易ナラシムルノ一大利益アリ。

私設工場ニ在リテモ其ノ重ナルモノハ共濟組合ノ施設ヲ有シ其ノ數全國ヲ通シテ百有餘ニ達スヘシ。其ノ重ナルモノハ鐘淵紡績株式會社、富士瓦斯紡績株式會社、三菱造船所等ニ於ケル共濟組合トス。而シテ施行令カ未タ民間ノ共濟組合ヲ法令上公認スル能ハサル所以ハ既ニ述タル所ノ如シ。

第七節 雇入、解雇及周旋

第一項 概論

雇傭關係ハ契約ニ依リテ發生スル債權關係ニシテ此ノ債權關係ノ效果ノ發生及消滅ハ民法ノ規定ニ從フコトヲ原則トスト雖、之ニ隨伴シテ社會上ノ弊害アルトキハ特別ノ法令ニ依リテ之ヲ矯正スルノ要アルト共ニ雇傭關係ヲ中介スル周旋ニ付テモ相當取締ノ必要アルコト言フ俟タサルナリ。

明治二十年案ハ職工ヲ以テ法律ノ主位ニ置キ職工保護ノ規定ハ雇傭契約ノ内容ニ制限ヲ加フル主義ヲ取リタリシカ、三十年案ニ至リテハ工場ヲ以テ工場法ノ主位ニ置クコトト爲リタリト雖、尙法文中雇傭契約ニ關シ詳細ナル規定ヲ設ケ且

職工規則ヲ設ケ其ノ中ニ雇傭契約ニ關スル事項ヲ規定セシメ、行政官廳ノ認可ニ依リテ之ヲ監督センコトヲ期シタリ。然ルニ其ノ後ノ調査ニ依リ職工ト工業主トノ間ニハ事實ニ於テ斯ノ如キ綿密ナル雇傭關係存在セサルヲ以テ、法律ヲ以テ詳細ナル規定ヲ設クルヨリモ寧ロ之ヲ命令ニ讓リ、機宜ト必要トニ應シテ適當ナル規定ヲ設ケシムルニ如クハナシト爲シ、三十五年案ニハ單ニ職工ノ雇入紹介ノ取締ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムトノ簡單ナル規定ヲ設クルニ止メタリ。爾後ノ諸案ニハ多少ノ相違アルモ皆斯ノ如キ形式ヲ踏襲シ斯クシテ現行法ノ規定ト爲リタルモノトス。現行法第十七條ニ於テハ職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムト規定セリ。職工ノ雇傭及周旋ノ取締ニ關シ必要ナル事項ノ主ナルモノハ、職工名簿、賃金ノ支拂、積立金、信認金等ノ貯蓄金、違約金、學齡兒童ノ就學、歸郷旅費ノ支給、職工爭奪ノ防止等ニ關スル事項等ニシテ、此等ノ點ニ關シテハ施行令第三章、第三十三條乃至三十五條、第三十八條及第三十九條並施行規則第十四條乃至二十條ノ規定ニシテ、次項以下ニ於テ之ヲ説明スヘシ。

第二項 職工名簿

工業主ハ職工名簿ヲ調製シ工場毎ニ之ヲ備付クルコトヲ要ス、職工名簿ハ工業主カ或工場ニ於テ使用スル職工ノ氏名、年齢、男女別、本籍、雇歴、雇入、解雇、職工ノ扶助又ハ保護職工ノ就業及扶助ヲ受クヘキ者ノ指定等ニ關スル重要ナル事項ヲ記入スルコトヲ要スル簿書ニシテ、法定様式ニ依リテ之ヲ作製シ職工一人毎ニ用紙一枚ヲ備フルコトヲ要ス(令第二十一條、綴合ハストカード式ニ依ルトハ工業主ノ任意ナリ、尙工業主ノ便宜ニ依リ法定事項以外ノ記載ヲ爲スモ妨ナシ、此ノ場合ニ於テハ各欄ノ位置ハ法定ノ様式ノ順位ニ依ルコトヲ要ス。

職工名簿ハ工場監督行政上最重要ナル文書ニシテ英國ニ於テモ一定ノ様式ニ依リ之ヲ備付ケシム〔註一〕獨逸ニ於テハ稍其ノ趣ヲ異ニセリ〔註二〕我工場法施行規則ハ可成其ノ記載事項ヲ簡易ニセンコトヲ最メタリ是レ記入訂正ニ際シ其ノ勞ヲ節シ常ニ職工名簿ヲ精確ナラシメンコトヲ期シタルモノニシテ工場法ノ施行ノ當初ニ在リテ所謂簡ヨリ細ニ入ルノ主義ニ出テタルモノニ外ナラサルナリ。

職工名簿ハ毎工場即チ一工場毎ニ備付クルコトヲ要ス、分工場ノ名簿ヲ本工場ノミニ備付ケ又ハ一工場ノ職工名簿ヲ各作業場ニ分置スルカ如キハ孰レモ不可

ナリ、一工場中事務ノ中心タル一定ノ場所ニ取纏メ備付タルコトヲ要ス。

職工名簿ニ記入ヲ爲スノ義務ハ雇傭契約アル場合ニ於テハ雇傭契約ノ成立シタル時ヨリ、其ノ他ノ場合(事實其ノ工場ニ於テ工業主ノ仕事ニ付職工タル業務ニ服スルコトヲ云フ)ニ於テハ事實上使用關係ノ開始シタル時ヨリ發生スルモノトス、而シテ工業主カ自己ノ雇傭スル職工ニシテ自己ノ經營スル甲工場ニ就職中ノ者ヨリ自己ノ經營スル乙工場ニ移シ、以テ其ノ職工ニ付自己ノ工場間ニ移動ヲ行ヒタル場合、又ハ從來専ラ自己ノ經營スル甲鑛山ニ於テ勞働ニ從事シタル者ヲ自己ノ經營スル乙工場ニ於テ就業セシムルコトトシタルカ如キ場合ハ、乙工場ニ付テハ新ニ職工ノ雇入アリタルモノトシテ職工名簿ノ記載ヲ爲スヘキモノトス(八條第十)、此ノ場合ニ於テハ工業主ト職工ノ雇傭關係ハ中斷スルノ要ナク、本條ハ只乙工場ノ職工名簿ニ新ニ記載スルヲ要スル旨ヲ規定シタルモノニ過キス。

尙職工名簿記載後ニ於テ其ノ事項ニ付變更アリタル時又ハ職工ノ死亡又ハ解雇アリタル等ニ依リ、新ニ記載ヲ爲スヘキ事項ノ發生シタル時ハ其ノ都度名簿訂正又ハ記載ヲ爲スヘキコト勿論ナリ(職工名簿ニ記載得)職工名簿ノ用紙ハ職工ノ死亡又ハ

解雇後五年間之ヲ保存スルコトヲ要ス(七條第十)職工ノ雇入ニ關スル書類ハ職工ノ解雇又ハ死亡後三年間之ヲ保存スルコトヲ要ス(九條第十)

【註一】

英國工場法第二百二十九條

各工場ニハ工場原簿 (General register) ヲ備付ケ様式ニ依リ左ノ事項ヲ記入スヘシ

- (一) 幼年工及少年工ニ關スル事項
- (二) 工場ノ石灰洗滌ニ關スル事項
- (三) 工場監督官ニ報告スルコトヲ要スル一切ノ災害ニ關スル事項
- (四) 工場主カ法律ノ例外規定ノ適用ヲ受クル時ハ其ノ事項
- (五) 其ノ他様式ニ定メタル事項

【註二】

獨逸帝國營業條例ハ第一百七條乃至第一百十二條ニ於テ職工證ニ關スル規定ヲ設ケ、職工證ヲ有セサル未成年職工ノ使用ヲ禁止シ、第三百三十四條ハ未成年職

工ノ爲ニ賃金支拂簿ニ關スル規定ヲ又第三百三十四條甲乃至第三百三十四條辛ニ於テ就業規則ニ關スル規定ヲ設ケタリ其ノ概略ヲ舉ケレハ左ノ如シ

(一) 就業規則 (Arbeitsordnung) ニ記載スヘキ事項左ノ如シ(營業條例第百三十四條乙)

一 平常ノ就業時間ノ始期及終期並成年男工ノ休憩時間ヲモ記載スルコト

二 賃金計算及支拂方法並其ノ時期(定期ノ賃金支拂日ハ下級行政官廳ノ許可ヲ得タル場合ノ外日曜日タルコトヲ得ス)

三 豫告ニ關スル法律ノ規定ニ異リタル定メヲ爲シタル場合ハ其ノ解雇又

ハ退業豫告期間及豫告ナクシテ解雇又ハ退業シ得ル場合

四 罰則ヲ定メタル場合ハ其ノ種類、程度、決定ノ方法、其ノ取立及使用ノ目的

五 賃金ノ沒收ヲ爲スツコトヲ定メタルトキハ沒收シタル賃金ノ用途

(二) 賃金支拂簿 (Lohnzahlungsbuch) 特別ノ規定場合アルノ外、工場ニ於テハ事

業主ハ其ノ費用ヲ以テ未成年職工ノ爲賃金支拂簿ヲ調製スルコトヲ要ス、

賃金支拂簿ニハ賃金支拂ノ都度其ノ額ヲ記入スヘシ、賃金支拂簿ハ賃金支

拂ノ際未成年者又ハ其ノ法定代理人ニ之ヲ交付シ其ノ受取人ハ次期ノ賃

金支拂前ニ之ヲ返還スヘシ

(三) 職工證 (Arbeitsbuch) 帝國法律ニ別段ノ規定ナキトキハ職工證ヲ有セサル

未成年者ヲ使用スルコトヲ得ス、未成年職工ヲ雇入ルルトキハ工業主ハ其

ノ職工證ヲ查收シ之ヲ保存シ官廳ノ要求ニ應シ之ヲ示シ、又雇傭關係カ正

當ニ終了シタルトキハ之ヲ職工ニ返還スヘシ、此ノ場合ニ於テ法定代理人

ノ請求アルトキ又ハ職工十六歳未滿ノ者ナルトキハ之ヲ其ノ法定代理人

ニ返還スヘシ、但シ職工證ハ第八條ニ依リ市町村長ノ認可ヲ得テ法定代

理人ニ非サル母其ノ他ノ家族又ハ直接ニ職工ニ之ヲ返還スルコトヲ得小

學校ニ就學スヘキ義務アル兒童ニハ前項ノ規定ヲ適用セス

(イ) 職工證ノ下附 職工證ハ職工ノ最近ノ住所、地、若シ獨逸國內ニ其ノ地ナ

キトキハ獨逸國內ニ於テ最初ニ選ヒタル労働地ノ警察署ヨリ手数料及印

紙稅ヲ徵スルコトヲシテ之ヲ下附ス、其ノ下附ニハ法定代理人ノ請求又

ハ承諾アルコトヲ要ス、其ノ承諾ヲ求ムルコト能ハサルトキ又ハ正當ノ理

由ナク且職工ノ不利益ヲ願ミス承諾ヲ拒ミタルトキハ市町村長ノ同意ヲ

以テ承諾ニ代フルコトヲ得、又職工證ヲ下附スルニハ其ノ職工カ就學ノ義

務ヲ有セサルコト及未タ職工證ノ下付ナキコトヲ證明スルコトヲ要ス

(ロ) 職工證ノ様式 職工ノ氏名出生ノ場所年月日法定代理人ノ氏名及最後ノ住所ヲ記載シ職工之ニ署名スヘシ之ヲ下附スルトキハ官署ハ官印ヲ捺シ且署名シ之ヲ原簿ニ記録スヘシ職工證調製ニ關スル規則ハ帝國宰相之ヲ定ム

(ハ) 職工證ノ記載 傭主職工ヲ雇入レタルトキハ職工證ノ相當欄ニ傭入ノ年月日業務ノ種類又解雇ノ場合ニハ其ノ年月日ヲ記載シ若シ業務ヲ變更シタルトキハ最後ノ業務ヲ記載スヘシ記載ニハ「インキ」ヲ用ヒ傭主又ハ業務代理人署名スヘシ職工證ニハ所持人ノ利害ニ關スル事項其ノ行狀又ハ技倆ニ關スル批評其ノ他本法ニ定メサル事項ヲ記載スルコトヲ得ス

第三項 戸籍ニ關スル證明

工場法ハ職工ノ雇入解雇及扶助並年齢ニ關シ諸種ノ制限ヲ設ケタリ而シテ此等諸種ノ規定ノ効果ヲ完カラシメンカ爲ニハ職工ノ本籍身分姓名年齢等ヲ明カニスルコトヲ要ス是レ工場法施行令カ工業主ヲシテ職工名簿ヲ調製シ所定ノ事

項ヲ記入セシムル所以ナリ。而シテ職工ノ身分年齢姓名等ニ關スル精確ナル事項ハ戸籍上ノ證明ヲ必要トスル場合甚タ多シ然ルニ若シ此ノ證明ヲ求ムル者ニ對シテ手数料ヲ徴收スルトキハ工業主ハ戸籍ノ證明又ハ戸籍謄本ヲ職工ヨリ提出セシムヘク此ノ場合ニ於テハ職工カ手数料ヲ負擔シ結局職工ノ負擔ヲ増加スルノ虞アルカ故ニ職工ヨリ申請スルト工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ヨリ申請スルトヲ問ハス職工又ハ職工タラントスル者ノ戸籍ニ關シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得ルコトヲ認メタリ徒弟又ハ徒弟タラントスル者ニ付亦同シ(法第十
六條)

法第十六條ハ戸籍ニ關シテ規定スルカ故ニ單ニ職工ノ年齢姓名等ノミナラス其ノ續柄等ニ付テモ戸籍ニ登録セラレアルモノニシテ工場法令ノ施行ニ關シ必要ナル事項ニ付テハ證明ヲ求ムルコトヲ得ルモノトス然レトモ此ノコトタル單ニ戸籍ニ關シ證明ヲ求ムルコトヲ得ルニ過キス無料ニテ戸籍謄本ノ下附ヲ求ムルコトヲ得サルナリ戸籍謄本ノ無料下附ヲ求ムルコトヲ得サルハ職工及工業主ニ對シ不便ナル點ナキニ非ス是レ職工中自己ノ生年月日續柄姓名等ヲ確知セザ

ル者甚タ多キカ爲ナリ、工場法規ノ精神ヲ十分會得セル戸籍吏ハ記載事項ニ多少ノ誤謬アルモ原本ト對照訂正ノ上證明ヲ與ヘ、若ハ請求者ノ希望ニ依リ必要事項ヲ自ら記入シテ同時ニ證明ヲ爲ス所固ヨリ少カラス、余輩ハ此ノ事ノ普ネク行ハルルコトヲ期望ス、彼ノ些少ノ文字ノ相違ノ爲證明ヲ拒絶スルカ如キハ法第十六條ノ運用ヲ阻止スルノ憾ナキヲ得サルナリ。抑我國工業界ニ於テハ從來工業主モ職工モ共ニ職工ノ戸籍ニ關シテハ殆ト關知セサル狀況ニシテ、職工中自己ノ年齢氏名等ヲ精確ニ記憶セサルモノ甚タ多キハ勿論、身分ニ關スル重大ナル事項ヲモ了知セス戸籍ノ證明ヲ得テ始メテ自己ノ私生兒タルコトヲ知リタル例サヘモアリ。又全然無籍ナルモノニシテ其ノ氏名年齢ノ更ニ判然セサルモノ又ハ實際ハ二十歳以上ト認ムヘキモノニシテ戸籍上十二歳未滿トナリ居ル者、或ハ故意ニ氏名ヲ詐稱セル者アリシカ如キハ、孰レモ工場法施行ノ反射作用トシテ大正五年九月以降顯ハレタル事實ニシテ、就中其ノ顯著ナルハ職工中ニハ私生兒ノ甚タ多カリシ事是レナリ。サレハ職工ノ戸籍ニ關スル誤謬ヲ正シ其ノ身分、族籍等ヲ明ナラシムルハ、單ニ工場法ノ施行上必要アルノミナラス社會ノ規律秩序ヲ保持ス

ル上ニ於テモ亦重要ナルコトタルヲ疑ハサルナリ。

立法例

職工ノ年齢又ハ身分證明ニ關スル歐洲諸國ノ立法例ハ區々ニシテ一定スル所ナシ、例ヘハ英國工場法第百三十四條ハ幼少年職工ニ限り身分登記官吏ノ證明ヲ必要トシ、證明書ノ様式ハ無料ニテ交附スルモ證明ニ對シテハ手数料ヲ徴收ス。

獨逸ニ於テハ職工證ヲ所持セサル幼少年工ノ使用ヲ禁止シ、而シテ職工證ハ當該職工ノ最近ノ住所地ノ警察署ニ於テ無料ニテ之ヲ交附スルコト既ニ前項ニ於テ述タル所ノ如シ【註二】
 奧國ニ於テハ一切ノ職工ハ職工證ヲ所持スルコトヲ要シ、(營業法第(七十九條)而シテ職工證ハ市町村役場ニ於テ之ヲ下附スルモノニシテ印紙稅ハ免除セララルルモ手数料ハ之ヲ徴收ス

第四項 賃金ノ支拂

賃金支拂ニ關スル弊害中主要ナルモノハ賃金ノ支拂ヲ爲スニ通貨ヲ以テセス

現品ヲ以テ支給スルカ爲職工ノ無知ニ乘シ時價變動等ヲ明ニセス職工ニ意外ノ損失ヲ被ラシムルコト及職工トノ合意若ハ其ノ意ニ反シテ賃金ノ支拂期間ヲ甚シク遅延セシメ職工ハ自己ノ取得スヘキ賃金ノ額ノ果シテ幾何ナルヤモ知ラス、不幸ニシテ工業主カ豫期ノ利益ヲ取得セス若ハ事業ニ失敗セルカ如キ場合ニ於テハ甚シク賃金ヲ切下ケラレ、若ハ全然其ノ支拂ヲ受クル能ハサルカ如キ場合ヲ生スルコトナキニ非ス、斯ノ如キハ主トシテ女工ヲ使用シ出來高拂ノ制度ヲ採ル製絲業等ニ於テ其ノ弊害最モ甚シトス、又職工カ一時歸國スルニ當リテハ殊更ニ賃金ノ一部ヲ留保シテ職工誘致ノ用ニ供スル場合亦少シトセス、是レ令第二十二條乃至第二十四條第三十三條及則第二十條ニ於テ賃金ノ支拂ニ關スル規定ヲ設ケタル所以ナリ、左ニ賃金支拂ニ關スル施行令ノ規定ヲ説明スヘシ

一 職工ニ給與スル賃金ハ通貨ヲ以テ支拂フコト(令第二十二條)

通貨トハ法律ニ依リ通用ヲ強制セラルル貨幣ニシテ硬貨(補助硬貨ハ其ノ法定制限以內ニ於テ)及兌換券ノ二種アリ、爲替手形、約束手形、小切手共ノ他切符ノ類ハ通貨ニ非ス、賃金ノ通貨拂ノ原則ハ英獨等ノ諸外國ニ於テモ何レモ之ヲ規定セザ

ルモノナシ。

令第二十二條ニ於テ通貨ヲ以テ支拂フヘシト規定シタルハ、單ニ賃金支拂ノ方法ヲ規定シタルモノナリヤ又ハ工業主カ職工ニ對シテ有スル債權ト賃金トノ相殺ヲ禁止シタルモノナリヤト云フニ前者ヲ規定シタルモノト見ルヘシ、而シテ賃金ニ對シテ相殺ヲ認ムルヤ否ヤハ民事訴訟法(第六百十八條)及民法(第五百十條)ノ規定スル所以外ニ於テ何等新シキ規定ヲ設ケタルモノニ非サルナリ。賃金ハ通貨ヲ以テ支拂フヲ要スルカ故ニ米、味噌、薪炭等ノ日用品ヲ給シ又ハ賄ヲ爲シ若ハ住宅ヲ給スルカ如キ實物給付ヲ以テ職工ニ支拂フヘキ賃金ノ一部若ハ全部ニ代フル場合ハ令第二十四條第一號、又ハ以下ノ規定ニ依リ豫メ地方長官ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス。一定ノ金額ヲ約シテ賄ヲ爲シ又相當ノ代價ヲ以テ米、味噌、薪炭等ノ日用品ヲ賣渡シ若ハ一定ノ家賃ヲ以テ住宅ヲ給シ、而シテ此等ノ代價ト工業主カ職工ニ支拂フヘキ賃金トヲ相殺スルハ本條ニ違反シタルモノト云フヲ得サルナリ、工業主カ職工ノ委託ニ依リ第三者ニ對スル職工ノ債務ヲ職工ニ代リテ辨濟シ之ヲ賃金ト相殺スルカ如キ亦同シ。然レトモ前ニモ述フル如ク民事訴訟法及民法ハ

職工及勞役者ノ賃金ニ付テハ一定ノ金額迄ハ相殺ヲ禁止スルカ故ニ此ノ範圍内ニ於テハ相殺ヲ以テ職工ニ對抗スルコトヲ得サルナリ、假令豫メ職工ノ同意ヲ得テ相殺ヲ行フヘキコトヲ協定スルモ斯ノ如キ契約ハ民法第五百十條ニ違反スル無効ノ契約タルヲ失ハサルナリ。然レトモ現ニ賃金ノ支拂ヲ爲スニ當リ工業主ノ一方的意思表示ヲ以テスルニ非ス、職工ノ同意ヲ得テ各個ノ場合ニ双方ノ債權債務ヲ差引シ便宜上其ノ殘額ヲ支給スルハ相殺ヲ以テ對抗スルモノニ非サルヲ以テ差支ナシトス。

立法例

英國 ニ於テハ一八三一年物給賃金法 (Truck Act) 第三條ハ賃金ハ現金ヲ以テ支拂フヘシ (All wages must be paid to the workman in coin) ト規定セリ而シテ賃金ト他ノ債務トノ相殺ヲ許サストノ意ニ解ス、何トナレハ同法第二十三條ニ於テ例外規定ヲ設ケ食費、醫藥等ノ費用ニ限り賃金ヨリ差引差支ナキ旨ヲ規定スレハナリ。

獨逸 營業條例第一百五條第一項ハ是レ亦等シク工業主ハ帝國ノ通貨ヲ以テ現金ニテ賃金ノ支拂ヲ爲スコトヲ要スト規定シ、同條第二項ニ於テ工業主ハ職工

ニ物品ヲ掛賣スルコトヲ得ス、但シ買入價額ヲ以テ職工ニ飲食物ヲ供給シ又ハ普通ノ借地料若ハ小作料ヲ以テ居宅及土地ノ使用ヲ爲サシメ、其ノ他實費ヲ以テ薪炭、油、燈火、食品、醫藥及勞働ニ要スル器械原料ヲ支給シ、其ノ代價ヲ賃錢ヨリ控除スルコトヲ得。又請負作業ヲ爲サシムル場合ニ於テ豫メ契約シタルトキハ工具又ハ原料ノ供給ハ實費ヲ超ユル價額ヲ以テスルコトヲ得、但シ其ノ地方ノ普通ノ相場ヨリ高價ナルコトヲ得スト規定シ、工業主カ職工ニ支拂フヘキ賃金ニ付テハ一般ニハ他ノ債權トノ相殺ヲ禁止シ上記ノ如キ一定ノ債權ニ限り之ヲ許容セリ。立法論トシテ我國ノ工場法令中ニ相殺禁止ノ規定ヲ設クルノ可否ニ付テハ固ヨリ議論ノ存スル所ナルヘシ。

二賃金ハ毎月一回以上之ヲ支拂フコトヲ要ス(令第十二條)

毎月一回以上トハ一回、二回若ハ三回等支拂ノ回数ヲ一回以上ト爲スヘキコトヲ規定シタルモノナルコト疑ヲ容レサルナリ、果シテ然ラハ六箇月分若ハ一箇年分等ノ賃金ノ前拂ヲ爲スハ直チニ本條ノ規定ニ違反シタルモノナリト解スヘキヤ否ヤ、此ノ點ニ關シテハ解釋上疑義ナキニ非ス、甲ハ曰ク凡ソ賃金支拂ニ關スル

弊風ハ單ニ貸金ノ支拂ノ遅延スルカ爲ノミニ非ス、例ヘハ拾圓乃至二拾圓ト云フカ如キ極メテ小額ノ金錢ヲ前貸シ爾後貸金ノ支給ヲ爲サスシテ、三年乃至五年ニ渉ル長日月ノ間幼少年工ヲ使用スルカ如キハ殆ント人身賣買ニモ等シキ行爲ニシテ、宜シク貸金ノ前拂又ハ假拂ヲ禁止シ斯ノ如キ弊風ヲ一掃セサル可ラスト、而シテ乙ハ曰ク貸金前貸ノ弊風ハ固ヨリ之ヲ認メサルニ非ス、然レトモ貸金支拂ニ關シ弊害ノ最モ大ナルモノハ或ル地方ノ製絲工場ニ於ケル貸金ノ如ク其ノ支拂ヲ一箇年ノ後ニ於テスルカ如キモノアルカ故ニ職工ハ自己ノ稼高サヘモ録々之ヲ知ルコトヲ得サルノミナラス貸金支拂ノ遅延スルカ爲一朝ニシテ工業主カ事業ニ蹉跌シタル場合ニ於テハ、職工ハ合理的ノ貸金ヲ得ル能ハス若ハ全ク貸金ヲ得ル能ハサルカ如キ場合サヘ生スルコトアリ、工場法規カ貸金ノ支拂ニ付制限ヲ爲スノ趣意ハ蓋シ斯ノ如キ大ナル弊風ヲ矯正セントスルニ外ナラス、本條ノ規定ハ要スルニ貸金支拂ノ遅延ニ因ル弊害ヲ除去セントスルニ在ルカ故ニ貸金ノ前拂又ハ假拂ハ差支ナシト解スト云フニ在リ。此ノ兩說何レモ一理アルモ本條ノ規定ハ専ラ貸金支拂ノ延滞ヨリ生スル弊害ヲ矯正セムトスルノ目的ニ出テタル

カ如ク從テ其ノ前拂ハ必スシモ之ヲ禁止スルモノニ非スト解釋スヘキニ似タリ、然レトモ立法論トシテハ尙今後ノ研究ヲ要スルモノアルヘシ。

毎月一回トハ曆ニ依リ毎月一回全部ノ支拂ヲ爲スヘキモノトス、從テ毎月一回ノ支拂ヲ爲ス場合ニ於テ支拂日ヲ二十五日ト定メタルモノカ、二十六日ヨリ月末分迄ノ貸金ヲ其翌月ニ於テ支拂フコトトナルカ如キ、又支拂日ヲ二十日ニ變更シタル爲メ翌月ニ於テハ二十五日分ヲ給スルニ止マルカ如キ正當ノ理由ニ依リ毎月ニ全部ノ貸金ヲ清算シ能ハサルカ如キハ差支ナキナリ。

三左ノ場合ニ於テ權利者ノ請求アリタルトキハ遅滞ナク貸金ヲ支拂フコト(令第二十三條則第二十條)

(イ) 職工ノ死亡若ハ解雇ノ場合

(ロ) 職工カ一箇月以上ニ涉リテ歸郷スルトキ

(ハ) 職工カ婚禮又ハ葬儀ヲ行フ費用ニ充ツルトキ

(ニ) 其ノ他地方長官ノ命令ヲ以テ定メタル場合

遅滞トハ支拂ヲ爲シ得ルニ拘ラス支拂ヲ爲ササルヲ云フ、遅滞ナク支拂フヘシ

トハ出来得ル限り速ニ拂フヘシト云フニ同シ故ニ工業主カ職工ヨリ賃金支拂ノ請求ヲ受ケタル場合ニ於テ既ニ工場ノ執務時間ヲ終了シ金銭出納員ノ在ラサル爲支拂ヲ翌日ニ延期スルカ如キハ差支ナカルヘシト雖賃金支拂定例日ニ達セサルノ故ヲ以テ支拂事由アルニ拘ラス支拂ヲ拒ムカ如キハ遲滞アルモノト謂ハサルヘカラス工業主ニ遲滞アルトキハ民法ノ規定ニ依リ其ノ責ニ任シ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルコトヲ要スルヤ言フ俟タス。

四 賃金支拂ニ對スル例外

賃金ノ支拂ニ關シ工業主ト職工トノ間ニ特約ヲ以テ既ニ述ヘタル所ニ異ル取極メヲ爲スモ其ノ契約ハ無効ナリ(令第二十四條)然レトモ本令ハ成ルヘク工業ノ現状ト慣習トニ順應セシムル爲左ノ如キ例外規定ヲ設ケタリ。

(イ) 職工ニ貯蓄ヲ爲サシムルトキ 此ノ場合ニ於テハ豫メ方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ職工賃金ノ全部ヨリ其ノ一部ヲ差引キ之ヲ貯蓄金ニ充當セシムルコトヲ得。(第二十四條 次項參照)

(ロ) 賃金ノ一部ニ代ヘ他ノ給付ヲ爲ストキ 工業主ハ豫メ方法ヲ定メ地方長官

ノ許可ヲ受ケタルトキハ職工ノ利益ノ爲賃金ノ一部ニ代ヘ通貨以外ノ給付ヲ爲スコトヲ得例ヘハ寄宿工ニ食物ヲ與ヘ通勤工ニ安價ナル住宅ヲ給シ交通不便ノ地ニ於テ米、味噌等ノ食料品ヲ支給スルノ類是レナリ。

工業主カ單ニ賃金ノ一部ニ代ヘテ米、味噌、薪炭等ノ給付ヲ爲スニ非スシテ一定ノ價格ヲ以テ之レヲ職工ニ賣却シ其ノ代金ヲ賃金ト相殺スルコトヲ定メ地方長官ニ許可ヲ願出テタル場合ニ於テ地方長官ハ之レニ許可ヲ與フルコトヲ得ルヤ、令第二十四條第一號ハ金錢ニ非サルモノヲ以テ賃金ノ支拂ニ換フル場合ノ規定ナルヲ以テ斯ノ如キ場合ニ於テハ地方長官ハ之ヲ許可スルノ權限ナキモノト解セサルヘカラス。故ニ工業主カ一定ノ價格ヲ以テ職工ニ米、味噌等ノ日用品ヲ賣却シタル場合ニ於テハ其ノ債權ハ已ニ一般ノ債權ニ付テ述タルカ如ク民法第五百十條ノ規定ニ依リ一定ノ範圍ニ於テハ相殺ヲ以テ職工ニ對抗スルコトヲ得サルモノトス工業主カ職工ノ委託ニ依リ職工ニ代リテ職工ノ債權者タル第三者ニ支拂ヒタル金額ニ付亦同シ。

次ニ本號ニ於テハ賃金ノ一部ニ代ヘテ他ノ給付ヲ爲スコトヲ認メ賃金ノ全部

ニ代ヘテ他ノ給付ヲ爲スコトヲ認メス是レ日常生活ニ必要ナル丈ノ通貨ハ必ス之ヲ支拂ハサルヘカラサルノ意ナリ。

(ハ)賃金支拂期ニ關スル慣習ニ依ル例外 特定ノ地方ニ於テ賃金ノ支拂ニ關シ毎月一回以上ノ支拂ヲ爲ササル慣習ノ存スル場合ニ於テハ其ノ地方ノ工業主ハ地方長官ノ許可ヲ受ケ法令施行後三年間ハ從來ノ慣習ニ依ル支拂期以內ニ於テ支拂期ヲ定ムル契約ヲ爲スモ差支ナシ。(令第三十條第二項)

(ニ)其ノ他ノ例外 法令施行前ノ契約ヲ以テ通貨ニ非サルモノヲ以テ賃金ヲ支拂フコト毎月一回以上賃金ノ支拂ヲ爲ササルコト及一定ノ場合ニ於テハ假令權利者ノ請求アルモ賃金ヲ支拂ハサルコトヲ定メタルモノニ付テハ施行後一年間ニ限リ其ノ契約ハ有効ナリ。(令第三十八條第一項)

第五項 貯蓄金

一 概論 職工中ニハ貯蓄心少ナク賃金ハ之ヲ得ルニ從テ費消シ散テ他日ノ計ヲ爲ササルノミナラス不健全ナル浪費ニ依リテ健康ヲ害シ又ハ其ノ身ヲ誤リ一朝災害疾患等ノ來襲ニ遇フトキハ慘憺タル苦境ニ陥ルモノ尠シトセス斯ノ如キ

ハ獨リ職工ノ爲ニ憂フヘキ現象タルノミナラス工業主ニ取リテモ甚タ不利益ノヲタルヲ免レズ。職工ニシテ貯蓄心ナキ者ハ其ノ業務ニ忠實ナルコト能ハス從テ勞働能率劣等ニシテ且永ク一定ノ工場ニ勤續スルヲ得ス諸所ノ工場ニ轉礙シ較モスレハ爾餘ノ職工ヲ誘拐シ又ハ墮落セシメ甚シキニ至リテハ同盟罷工ノ煽動者トナル等其ノ弊竇擧ケテ數フヘカラサルナリ。故ニ職工ノ所得ノ幾分ヲ貯蓄セシメ其ノ勤續スルニ從テ多少ノ蓄財ヲ爲サシメ不時ノ用ニ備ヘシムルト共ニ同一ノ工場ニ定着シテ其ノ業ニ勵マシムルハ自他共通ノ利益ニシテ最モ望マシキコトタルヤ言フ俟タス。然ルニ職工中ニハ目前ノ收入ノ一厘ニテモ多カラムコトヲ希望シ貯金ヲ爲スコトヲ悦ハサルモノ多ク職工ノ任意ニ放抛スルニ於テハ貯蓄ノ目的ヲ達セサルコト多シ故ニ職工ヲシテ普ク貯蓄ヲ爲サシメントセハ雇入契約ニ依リテ一定ノ貯蓄ヲ爲スヘキコトヲ定メ賃金支拂ノ都度其ノ幾分ヲ賃金中ヨリ控除スルハ我國諸工場ニ於ケル多年ノ慣習ナリ。此ノ種ノ貯蓄金ハ其ノ金額ノ範圍積立拂戻等ノ方法ニシテ適當ノモノナランカ何等之ヲ禁止スルノ要ナキノミナラス寧ロ大ニ之ヲ獎勵スヘキモノナルヘシト雖中規模以下ノ

工業主中ニハ往々職工ノ利益ノ爲ニ非スシテ、自己ノ融通資金タルノ目的若ハ職工ノ足止メトシ或ハ他日職工カ其ノ工場ニ歸リ來ルコトヲ誘致スル等ノ目的ヲ以テ、平素ヨリ職工ヲシテ積立金信認金等ノ名義ヲ以テ賃金ノ一部分ヲ積立テシメ、又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ工業主ニ金錢ノ保管ヲ委托セシメ、之ニ依テ職工ノ意志ニ反シテ不當ニ雇傭契約ノ繼續ヲ強要スルカ如キコト少シトセス。而シテ此ノ種ノ貯蓄金ニ付テハ工業主ハ往々ニシテ之ニ利息ヲ付セサルモノアリ、又ハ管理ノ方法確實ヲ缺キ爲ニ累ヲ職工ニ及ホスカ如キ亦其ノ事例ニ乏カラス、是レ令第二十三條乃至二十五條及第三十三條則第二十條カ貯蓄金ニ關スル制限ヲ設ケタル所以ニシテ貯蓄金其ノモノヲ阻止セントスルニ非サルヤ勿論ナリ。

抑工業主カ職工ノ貯蓄金ヲ管理スル場合ニ於テ行政官廳ノ認可ヲ受ケシムルノ趣意ハ、職工ノ貯蓄金ノ保管方法ノ安全ヲ期シ、且之ニ依リテ職工カ不當ニ其ノ雇傭契約ノ繼續ヲ強イラルルコトヲ防止スルヲ以テ主タル目的トナス、此ノ點ニ於テハ儘カニ職工保護ノ効果アルヘキハ疑ナシ。然レトモ又之ヲ一面ヨリ考フレハ元來貯蓄心ニ乏シキ職工ノ爲ニ、工業主カ諸般ノ手數ヲ厭ハス其ノ貯蓄ヲ獎

スル場合ニ於テ工業主ノ經濟的基礎並信用ノ鞏固ナルコト確實ナルモノニ對シテ尙且其ノ管理方法等ニ付行政官廳ノ認可ヲ受ケシムルカ如キハ却テ繁文褥禮ノ嫌ナキニ非サルヘシ。現ニ工場法施行後數多ノ工場ニ於テ貯蓄金保管ノ舉ヲ廢止シタルモノアルニ徴スルモ、本條ノ規定ニ付テハ今後尙攻究ノ餘地ナキニ非サルヘシ、況ヤ時局以後ニ於ケル職工賃金ノ昂騰ヲ機トシ他日ノ低落ニ對スル準備トシテ諸工場ニ於テ大ニ貯蓄金ヲ爲スコトヲ獎勵スルノ必要アルニ於テヤ。

二 工業主職工ニ貯蓄ヲ爲サシメ、之カ爲ニ賃金ノ全部ヲ支拂ハサルトキ(一分部爲スカ)此ノ場合ニ於テハ工業主ハ豫メ方法ヲ定メテ地方長官ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス、方法ヲ定メトハ貯蓄ノ金額、積立ノ回數、保管並拂戻等ノ方法ヲ定ムルコトヲ要スルノ謂ナルヘシ。(令第二十四條)

三 工業主カ職工ノ貯蓄金ヲ管理スル場合ニ於テハ工業主ハ豫メ確實ナル方法ヲ定メ、地方長官ノ認可ヲ受クヘシ。(令第二十五條)

貯蓄金ヲ管理ストハ貯蓄金ヲ自ら保管處理スル場合ハ勿論他人ヲシテ保管セシムル場合ト雖工業主カ一定ノ權限ヲ職工ノ貯蓄金ノ上ニ及ホス一切ノ場合ヲ

謂フ例ヘハ自己又ハ職工ノ名義ヲ以テ銀行預金ト爲シ自ラ其ノ通帳ヲ保管シ或ハ自己又ハ職工ノ名義ヲ以テ郵便貯蓄金ヲ爲サシメ工業主カ其ノ通帳又ハ職工ノ印形ヲ保管スルカ如キ場合ヲモ包含ス管理方法ノ確實ナリヤ否ヤハ工業主又ハ其ノ委託ヲ受ケタル者ノ實際ノ資産人物並業務ノ状態等諸般ノ事情ニ依リテ各個ノ場合ニ付之ヲ決定スルノ外ナシ但シ必スシモ工業主カ之レヲ事業資本ニ利用スルコトヲ絶對ニ否認スルモノニ非サルナリ而シテ工業主自ラ保管スル場合ニ於テハ相當ノ利子ヲ付スルカ如キハ固ヨリ當然ノコトナルヘシ。

四令第二十四條第一號ノ場合ノ許可ト令第二十五條ノ認可トノ關係 令第二十四條第一號前段ノ場合ハ職工ノ賃金ノ全部ヲ支拂ハサル事由カ貯蓄ヲ爲サシムルニ存スルコトヲ確認シ而シテ其ノ貯蓄ヲ爲サシムルハ専ラ職工ヲシテ貯蓄ヲ爲サシムルニ在リテ何等職工ノ自由ヲ束縛シ又ハ其ノ利益ヲ害スルモノニ非サルトキハ之ニ許可ヲ與フルモノトス而シテ此ノ場合ニ於テモ行政官廳ハ斯シテ職工ニ支拂ヲ留保シタル貯蓄金ハ如何ナル方法ニ依リ管理セララルヤヲ知ルヲ要ス。若シ工業主ニ於テ自ラ之ヲ管理セムトスルモノナルトキハ行政官廳ハ

許可ノ申請ト同時ニ令第二十五條ニ依ル認可ノ申請ヲ爲サシメ一括シテ其ノ許可ヲ決スルヲ便トスヘシ又工業主自ラ之ヲ處理セサル場合ニ於テハ其ノ之ヲ如何ナル方法ニ依リ管理スルヤニ付詳細ノ申告ヲ爲サシメ之ニ依リテ十分ノ調査ヲ遂ケタル上確實ト認ムル場合ニ非サレハ許可ヲ與ヘサルヤ固ヨリ當然ナリ。

以上ノ解釋ニ關シテハ多少ノ異論ナキニ非ス曰ク令第二十四條ニ依リ豫メ方法ヲ定メ許可ヲ受ケタル場合ハ工業主自ラ貯蓄金ヲ管理スル場合ト雖令第二十五條ノ許可ヲ要セスト此ノ論理ナキニ非スト雖認許ノ目的ト爲ルヘキ事項ハ各別ナルノミナラス令ハ一方ニ於テ許可ト稱シ他方ニ於テ認可ト謂ヒ其ノ處分ノ形式ヲモ異ニシタルヲ以テ令第二十四條ノ處分ハ時トシテ令第二十五條ノ處分ヲ當然吸收スト解釋スルハ穩當ニ非サルヘシ。

五貯蓄金ノ返還 職工ノ貯蓄金ハ積立金信認金其ノ他何等ノ名義ヲ用キルニ拘ハラス一定ノ場合ニ於テハ工業主ニ於テ之ヲ返還スルコトヲ要スルコト既ニ賃金支拂ニ付テ述ヘタル所ノ如シ。(令第二十三條 則第二十三條)

茲ニ所謂貯蓄金トハ單ニ職工カ自ラ貯蓄スルカ爲ニ工業主ノ保管ニ委シタル